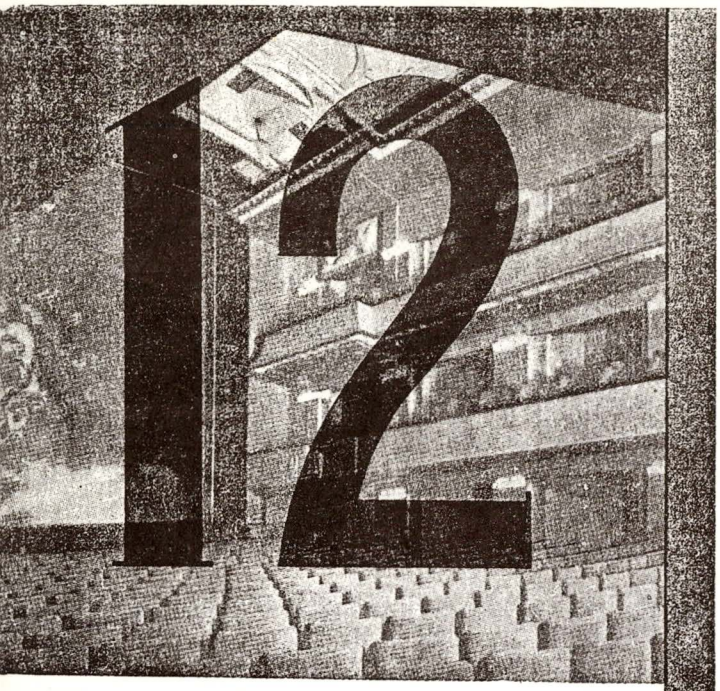
大正六年九月十四日（第三種郵便物認可）
昭和六年十月廿七日印刷納本
昭和六年十二月一日發行（毎月一回一日發行）
（第拾四輯第十二號）

建築と社會



特輯記事

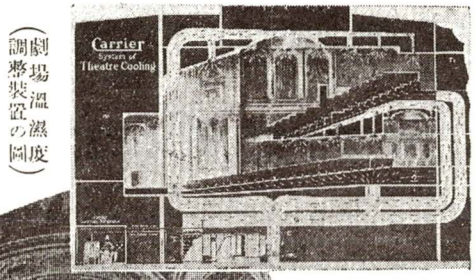
劇場

第十四輯第十二號
昭和六年十二月一日
日本建築協會

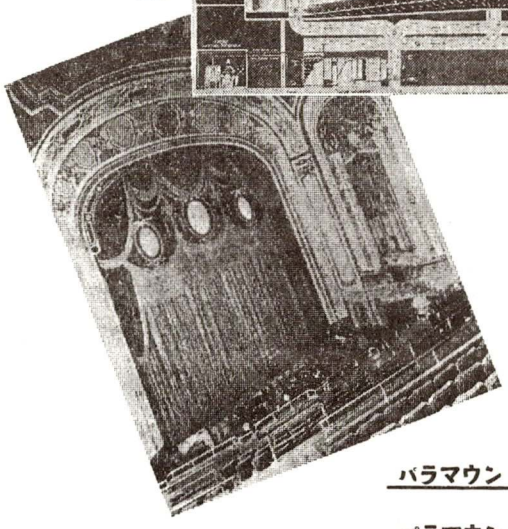
Carrier System

キヤリア溫濕度調整裝置

四季春暖秋爽



劇場溫濕度調整裝置の圖





パラマウント ビルデイング
と
パラマウント 劇場内の一部

最近歐米先進國に於けるキヤリア
システム施工先の一部(劇場の部)

Chicago Stadium, Chicago
Columbia Theatre, Stores & Restaurant, New York
Enright Theatre, East Liberty, Pa.
Madison Square Garden, New York
Olympia Theatre, Paris France
Picadilly Theatre, Rochester, N.Y.
Techinicolor Motion Picture Corp., Boston
Techinicolor Motion Picture Corp, Hollywood
Uptown Theatre, Philadelphia
Washington Street Olympia Theatre, Boston
American Tel & Tel. Co., New York
Broadcasting House, London, England
其他二百數十個所

東洋キヤリア工業株式會社

支 店 大阪市東區備後町(野村ビル)

本 店 東京市麹町區有樂町(三信ビル)

會告

本協會定款第十七條及第十八條ニ據リ監事二名及評議員半數改選ニ付十一月二十六日開會ノ通常總會ニ於テ選擧執行致候處左ノ通當選相成候

昭和六年十二月

社團法人日本建築協會

監事　當選　三七九票　津田敏雄氏　監事　當選　三三五票　小笠原鈤氏

次點　三一二票　竹腰健造氏　以下略

評議員

當選　一二一票　伴野貞三氏　同　八〇票　末澤周次氏　同　六八票　八木盛二氏
同　六七票　松井清之助氏　同　六六票　鳥井信氏　同　六四票　富士岡重一氏
同　六二票　堀田猷次郎氏　同　六〇票　呼子正氏　同　六〇票　河盛益太郎氏
同　五九票　落藤藤吉氏　同　五八票　高橋榮治氏　同　五七票　清水榮二氏
同　五七票　新名種夫氏　同　五六票　增田清氏　同　五二票　中山榮太郎氏
同　五一票　岡部顯則氏　同　四九票　藤本賢太郎氏　同　四六票　河合貞一郎氏
同　四四票　牧野忠氏　同　四四票　中村義雄氏

次點四一票　池田谷久吉氏　以下略

會告

本協會定款第十七條及第十八條ニ據リ十二月五日開會ノ評議員會ニ於テ理事ノ選擧及常務ノ互選執行致候處左ノ通當選相成候

尙細則第九條ニ據リ常務ノ職務分掌頭書ノ通互選決定候

昭和六年十二月

社團法人　日本建築協會

理事會長　片岡安氏
理事副會長　池田實氏
理事副會長　武田五一氏
常務（主記）　伊藤宗太郎氏
常務（主記）　小川陽吉氏
常務（主記）　大原芳知氏
常務（主記）　鳥井信氏
常務（主記）　富士岡重一氏

常務（主計）　岡部顯則氏
常務（主計）　松井清之助氏
常務（主計）　呼子正氏
常務（編輯）　高橋榮治氏
常務（編輯）　中山榮太郎氏
常務（編輯）　增田清氏
常務（編輯）　森本藤吉氏

（五十音順）

商標 OHNO SHUTTER PATENTED 登錄

特許第七九三五號（延長許可）外十數件併用

大野式防火捲上ヶ戸

〔特許大野式シヤッター〕

主要製品

大野式**シヤッター**
大野式自働防火鎧戸
大**野式**工場用軸承
大野式轉子入軸筐
大野式轉子入戸車
大野式廻轉軸抵抗測定機
各種防火扉
應用特殊機械類
特許不二式**サッシ**受托販賣

合資會社 大野製作所

東京市芝區三田四國町二番地・**電話**三田(45)七三三七三三番

電話福島(45)八八五・二中島福上區花此市阪大・所詰員張出付取

世界最新建築圖集

日本建築協會編

1929～1930 年版

人は常に新しいものを欲求してゐるが、これは精神の糧こして洵に當然なことで、殊に建築家が新しい建築に關心を有つて、これが研究消化に努むることも亦極めて當然であつて、それ故にその使命が完璧さるゝのである。

1929~1930 兩年度に亘りて歐米諸國で建築された多くの事務所、銀行、官衙、學校、公會堂、圖書館、敎會堂、住宅、工場等の中で尖端的な最新建築を紹介したのが本書である。大體に於て建築の最近潮流、傾向なりが本書に據つて一目瞭然たるわけである。向學の學生諸君、建築家及一般同好者諸氏にこつて絶好の參考書なりこ信じます。

● **體　裁**　四六版 **100頁**
上質全**アート紙**
寫眞版**500**餘

定　價　50錢　〒10錢 ●

社團法人 **日本建築協會發行**

大阪·西區·大同ビル720
振替口座大阪 39975

賣捌 丸善本支店
柳々堂書店

香里園改善住宅展覽會經過報告

三月二十六日　大阪時事新報社專務取締役堀勘一氏名義を以て會長宛書面にて京阪沿線香里に於て住宅展覽會開催するに付後援方依頼の申込を受く

四月六日　本協會に於て主記會を開き協議の結果主催者側京阪電鐵側と會見することに決し其旨先方へ申送る

同　七日　大阪時事新報社事業部小堀保三郎氏及京阪電鐵地所課長東佐平治氏と當協會常務主記小川陽吉、小川安一郎、阪井米吉、森本藤吉の四氏と會見し展覽會計畫を聽取したり

同　八日　當協會常務會開催に付展覽會後援に付議題として協議したるも決定に至らず

五月一日　片岡會長京阪電鐵重役と會見して京阪側の展覽會に對する意嚮を聽取して次回常務會に諮ることゝなる

同十二日　開會の常務會に於て尙主催者側及後援京阪電鐵側の幹事と會合して意見交換することに決す

同十六日　大阪時事新報社側鹽澤編輯局次長外二名、京阪側松島技師長外二名、本協會側片岡會長外八名の三者清交社に於て會見し意見の交換をなし展覽會に關し協議會を開く

同十八日　愈後援承諾することに決し當協會に香里園改善住宅展覽會準備委員會を設け左の諸氏に委員を依囑したり

淺野　金藏氏　小川　陽吉氏
小川安一郎氏　阪井　米吉氏
酒井勇三郎氏　高橋　榮治氏
德政　金吾氏　富士岡重一氏
松本　儀八氏　森本　藤吉氏

同二十日　本協會に於て第一回準備委員會を開き新報社小堀保三郎氏京阪東佐平治氏、西本正太郎氏列席の上左の書類を作成し準備をなす

1. 香里園改善住宅展覽會概要書
2. 住宅設計圖案懸賞募集規程
3. 覺書

尙覺書左の如し

覺　書

香里園改善住宅展覽會に關し大阪時事新報社と京阪電鐵會社と日本建築協會は左記條件の申合せをなす

一、審査委員及準備委員の選定は日本建築協會々長に一任のこと

一、審査委員及準備委員會合費等に關する經費を合計凡金五百圓以内を展覽會より支出すること

一、實物住宅出品に對し日本建築協會は出來得る範圍内に於て勸誘應援すること

一、出品規定其他詳細に付ては委員會に於て協定すること

年　月　日

株式會社大阪時事新報社取締役社長
社團法人日本建築協會々長
京阪電氣鐵道株式會社取締役社長

五月二十二日　當協會に香里園改善住宅展覽會後援に關し愈々實行委員を設くることになり左の二十三氏に委員を依囑したり

淺野　金藏氏　今林彦太郎氏
小川　陽吉氏　小川安一郎氏
岡本新次郎氏　岡本松太郎氏
小西　一良氏　阪井　米吉氏
酒井勇三郎氏　芝田　知重氏
鈴木　末尾氏　高橋　榮治氏
德政　金吾氏　中島　智喜氏
伴野　貞三氏　姫野　武氏
富士岡重一氏　古塚　正治氏
松本　儀八氏　增山　新平氏
三木　來三氏　森本　藤吉氏
保田虎太郎氏（五十音順）

尙審査委員長及委員を左の五氏に依囑す

審査委員長　會　長　片　岡　安氏
審査委員　副會長　古宇田　實氏
同　同　日　高　胖氏
同　住宅委員會委員長　葛野壯一郎氏
同　京都帝國大學教授　藤井　厚二氏

同二十六日　本協會後援實行委員小川陽吉氏外十六名は京阪電鐵側東西本、大北の三氏新報社側小堀氏等の案内により展覽會場の實地踏査を行ひたり

同　日　香里惠美須館に於て最後の準備委員會を開き主記小川陽吉氏より本日迄の經過を報告し引續き第一回の實行委員會を開き協議す

尙幹事長一名幹事二名を投票選擧により左の通選定せり

幹事長　小川安一郎氏
幹事　今林彦太郎氏
同　德政　金吾氏

六月二日　第二回實行委員會を開き住宅出品勸誘方法及勸誘先、分科會設置等に付協議せり

同　六日　第三回實行委員會を開き各委員の出品勸誘先分擔、出品者の會合等に付協定したり

同十三日　第四回實行委員會を開き出品

勸誘結果報告ありて出品者招待會プログラムの件、住宅賣却に付査定委員會設置の件等協定したり

同　十三日　住宅出品關係者招待會を開き出席者五十六名ありて出品勸誘並に出品決定をなし尚出品者と種々打合せをなす

同　二十六日　第五回實行委員會を開き左の事項を協議す

1. 出品住宅の設計圖案の調査方法の件
2. 地鎭祭執行の件
3. 出品者に對し附帶工事其他に付注意事項を通信するの件
4. 工事中實行委員の出場するの件

七月十一日　會場敷地に於て地鎭祭を執行し大阪府知事代理、大阪市長代理其他多數の來場ありたり

同　日　大阪ホテルに於て大阪時事新報社主催として出品者及京阪電鐵、本協會の展覽會關係者の招待會を催し披露及出品に關する打合會を開きたり

八月二十日　懸賞住宅設計圖案審査會を淸交社に於て開催す

同二十二日　懸賞住宅設計圖案審査會を引續き開催す

同二十四日　懸賞住宅設計圖案審査會を引續き開き本日當選者を決定す

九月十二日　電氣倶樂部に於て大阪時事新報社主催を以て最後の出品者及展覽會關係者の打合會を開き左の事項を協定す

1. 三越に於ける懸賞當選圖案及出品住宅設計圖案の展覽會開催の件
2. 住宅に關する講演會開催の件
3. 室內洋畫展覽會開催の件
4. 出品住宅特別觀賞券發行の件
5. 展覽會事務所設置の件
6. 會場設備に關する件
7. 懸賞投票に關する件
8. 懸賞圖案當選者に賞金授與の件

自九月十七日　市內三越に於て懸賞設計圖案及出品住宅設計圖案
至同二十一日　の展覽會を開き好評を得たり

自五月二十六日　此間に於て幹事會及出品住宅設計圖の調査會
至九月三十日　を開くこと數十回に及ぶ

十月一日　香里園改善住宅展覽會を愈々開會す實物出品二十五戶

同　日　開會式後襲に懸賞募集したる住宅設計圖案の當選者に對し賞牌授與式を行ひ進藤會長審査委員實行委員其他展覽會關係者列席の上葛野審査委員は委員長代理として賞金及賞牌を授與せり

十月二十九日　會期は本月末を以て終了の豫定なりしも會期の前半は雨に祟られたる關係もあり又豫期以上の盛況を呈したるを以て社會の爲十一月十日迄延期することに決し本日之れが發表をなす

十一月十日　本日豫期以上の効果を得て盛會裡に閉會す

會期中賣約濟となりしもの二〇戶なり

十一月十四日　本協會主催として出品者審査委員實行委員等の會合な朝日ビルアラスカ食堂に開き今日迄の經過及將來に付ての意見交換をなす

住宅出品者氏名左の通

住宅出品者名	出品住宅	建坪數
竹井秀吉	和風二階建	三、三八
同	同	三、四四
同	和風平家建	三五、九三
竹中工務店	和風二階建	三八、三五
前田組	同	三五、八五
淸水組大阪支店	和洋二階建	三七、七五
朝永建築工務所	和風平家建	三〇、六二
大林組	同	三一、二一
納谷富藏	同	三六、四五
大昭組	和洋二階建	三〇、五〇
高橋組	和風平家建	三一、八五
中道猪三郎	和風二階建	二七、八六
同	同	三七、六六
井倉五左衛門	和洋二階建	三〇、九〇
山本組	洋風平家建	三〇、四四
あめりか屋	和洋二階建	二七、七五
有山組	洋風平家建	三一、二五
大林組	和風平家建	三五、三
由上鶴藏	同	二四、九〇
中島忠兵衛	和風二階建	二八、四二
前田建築工務店	同	三六、五〇
西本組	同	二八、二五
藤木工務店	和洋二階建	三五、〇〇
安達善藏	和風平家建	三六、〇〇
今中春吉	和洋二階建	三〇、〇〇
		（京間）
計　二五		

（次第不同）

建議

本會は大阪市下水道計畫施設に關し左の通大阪市當局に建議したり

大阪市下水道計畫施設に關する建議

文明の進歩と產業の發達は都市人口の集中を招來し都市の中樞部は高層建築の發

生を促し將來地價の昂騰と共に益々其の增加を見るべきは明かにして且設備に於ても亦著しき進歩を見る就中汚水の淨化を始め建築の衛生施設の改善進歩するに從ひ之等に要する水量も大に增加すると共に殊に近來盛に大建築に設備せらるゝ冷房裝置に至つて從來我が國に於て豫想せられざる驚くべき多量の水を使用し之等を合すれば將來高層建築物よりの排水量は實に夥しきものあるに至るべし

然るに大阪市に於ける下水道は從來雨水及諸用水の如きものゝ排水を基準とし計畫施設せられたるもの殘存し驟雨到る毎に市の中心地例へば梅田曾根崎警察署前本町二丁目市電交叉點、北濱二丁目市電交叉點の如きに在りては路面は雨水の氾濫に任せ通行に堪へざるのみならず甚しきに至つては屋内に浸水するの有樣にして市の周圍部に在りては想像に餘りある狀態なりとす、更に加ふるに高層建築物よりの多量の排水を合流する場合は推して知るべきのみ、現に市内中央部に於て新築中のものに在りて其の冷房用水の排水に對し當局に於ては近接下水道技線への接續を拒否し遠隔の主要幹線に連絡せしめんとしたる事實ありと聞くに至つては寔に遺憾とする所なり

斯の如きは徒に市民の負擔を大ならしむるのみならず其間道路の掘鑿、交通の阻害等種々なる支障を生ずべし、尤も先般都市計畫として決定せる下水道の實施に對しては叙上の水量を十分考慮計畫せらるゝと同時に從來の不完備なる下水道は可及的速かに改良を行ひ當然高層建築物の櫛比集合を見るべき商業地域に於ける下水道に對しては支線と雖も相當多量の排水に支障なき樣萬全を期せられんことを切望するものなり

右及建議候也

昭和六年十一月十七日

社團法人日本建築協會會長

工學博士　片岡安

大阪市長法學博士　關一殿

法制委員會第三分科會

時　十月二十一日午後五時三十分——同八時

所　ライオン食堂

出席者　主査津田　委員高田　松久保

記事一、現下建築界の事情よりして建築勞働者組合及其の運動に付調査研究の必要あるを認めらるゝを以て是が調査會の組織を會長に進言すること

二、建築勞働問題の研究の爲府當局の說明を請ふことゝし其の講演會を開催すること

以上の二項に付申合せをなし第一項の建議案に付ては次會に草案を作成することゝし第二項に付ては本委員會主催を以て講演會を開催するか若くは協會例會に於て講演會を催すことになすか次回の本委員會に提議すること

住宅委員會第一分科會

時　十月二十六日午後五時三十分——同九時三十分

所　本協會事務室

出席者　幹事淺野　主査富士岡　委員佐々木　赤松　渡邊

記事一、設計概要書作成に付前回に引續き研究協議の上別紙の通修正を加へ完了す

一、エレベーションに付研究を進め各委員分擔して圖面を持ち寄る

法制委員會委員總會

時　十月二十八日午後五時三十分——同九時十分

所　森永キャンデーストアー二階

出席者　幹事今林

第一分科主査鳥井　委員池田(唯)　加藤　北垣　佐藤(正)　島田　吉田

第二分科　委員石川　佐藤(松)　作間

第三分科　委員樋口　松久保

記事一、松久保委員より第三分科の報告をなし協議の結果

1. 建築勞働者組合及其運動に付調査研究の爲調査會の組織を會長に進言すること

最初は調査會を設けずして該調査を第三分科に於て來年度より始めることゝし調査の結果擴大する場合は更めて調査會設置を進言すること

本件は來年度の委員會に引繼をなすこと

2. 建築勞働問題の研究の爲府當局の說明を請ふことゝし其講演會を開催するの件

先づ津田主査より特高課長に大綱を聞き且同課長の講演さるゝや否やを確めたる後講演會を開くことゝし本年も餘日少なき爲成可く近き例會に於て開催されんことを希望することに決す

鳥井主査より第一分科の報告をなす

大阪市下水道計畫施設に關する建議案を作成したるに付今林幹事より案文を朗讀したる後修正を加へ結局鳥井主査に於て尙一應精査の上案文を提出することに決す

常務會

時　十一月九日午後五時三十分——同八時

所　本協會事務室

出席者　會長片岡　主記小川陽　小川安阪井　松本　主計岡部　德政

編輯　小西　高橋　本間　村野

報告一、十月分會計報告

一、秋季大會決算報告

一、法制委員會委員長より報告の昇降機取締規則に關する件

一、會館建設調査準備委員會報告

一、生活改善健康住宅展覽會終了經過報告

一、香里園改善住宅展覽會經過報告

一、兩展覽會委員及出品者慰勞の件

議事一、昭和五年度收支決算報告の件

一、昭和七年度收支豫算の件
一、協會員會費助費滯納者及所在不明者處置に關する件
一、評議員會及通常總會開會日取決定の件
一、建築學會より依頼に係る竣功建物の記錄蒐集に關し會員へ周知方の件
一、法制委員より報告に係る大阪市長に建議案の件
一、會員詮衡

住宅委員會第一第二分科會

時　十一月九日午後五時三十分——同八時三十分
所　ライオン食堂
第一分科出席者　幹事淺野　委員小山　佐々木　渡邊
記事一、訂正の第一及第三案委圖に付種々協議をなす
未提出の第二案を至急取揃へ委員總會前に訂正の上持寄ることを申合す
第二分科出席者　幹事　南　主査　酒井　委員　岩尾　岩崎　中村
記事一、前回委員會に於て決定せる調査要項を氣象調査豫定地に付各員分擔の上調査表を作成し來る十一月二十三日迄に主査の手許迄提出することを申合せたり

資料委員會

時　十一月十七日午後五時三十分——八時三十分
所　ライオン食堂
出席者　委員長　野村
第一分科　白石　梶田
第二分科　高岡　山田　松尾
第三分科　田阪(代)
第四分科　伊東　山中　須賀(代)
記事一、當委員會に於ては今回京都方面の工場見學を擧行することを申合せ先づ實行委員を撰び種々具體的案を立つることゝす
一、各分科は委員長の要求に依り本年度中の事業經過報告書作成に付種々協議せり

法制委員會第一分科會

時　十一月十九日午後五時三十分——同九時三十分
所　ライオン食堂
出席者　幹事　今林　主査　島井　委員　加藤　北垣　島田
記事一、工業地域に關する件
各府縣の取扱異なる點あるを以て內務省に對し統一されんことを希望の爲建議することに決し次回委員總會迄に建議案を作成し提出すること
一、乙種防火地區を如何にすべきやに付審議
本件に付ては種々の意見あり之を纏めるは困難なり殊に本件は少數よりも多數の意見を聽取するを以て結局次回委員總會に諮するに決す

入退會

入會者

會員

田口銀次郎君　府下豊能郡豊中町櫻塚一五一〇、東京建鐵株式會社
倉社、田島工業株式會社
本間　嘉平君　東區釣鐘町二大倉土木株式會社內
蹬　勇一君　兵庫縣武庫郡甲東村甲東園
小林　清君　京都市右京區桂局横松田方
平井　勇馬君　府下中河內郡高井田村字新喜多一〇番地
志岐　善吉君　株式會社大林組工務監督
牧　毅君　府下中河內郡蹉跎村中振第四〇九
大倉土木株式會社
住吉區阪南町東一ノ三三
山本方、株式會社大林組

特別賛助員

服部　吉雄君　浪速區河原町一ノ一五二八、寧樂屋家具裝飾店
川井　義貫君　西區西長堀南通三ノ一
ベニヤ商會

普通賛助員

中橋　鐵二君　北區中野町四ノ八〇
多美屋木工所工場內
白井　俊雄君　神戸市中山手通七丁目九〇、古塚正治建築事務所
上田富之助君　神戸市若松町四丁目一七〇ノ一、土木建築請負業
林　力造君　港區九條通二丁目六四七
土佐熊吉方
佐竹　義雄君　京都市下京區西洞院松原下ル永倉町五六一
土木建築請負業
伊藤　一郎君　神戸市須磨區庄山町三ノ二、神戸高工社學中
三島圓四郎君　東區平野町四ノ五八
建築材料製造販賣
永田　伸正君　住吉區山王町四ノ一七
都島工業學校建築科助手
衣笠　信夫君　高松市西ノ丸町二清水組高松出張所

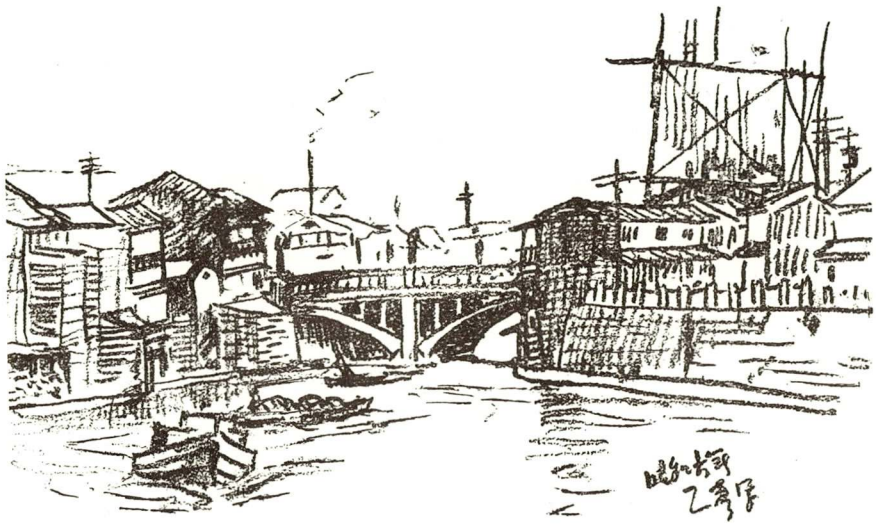
退會者

會員　角地秀雄君　有馬休二君
上野伊三郎君
(地方在住)　今川鎭夫君　權藤要吉君
普通賛助員　安川惠造君　坂本敏克君

寄贈雜誌

建築雜誌　每號　建築學會
日本建築士　每號　其　會
建築世界　每號　其　社
建築新潮　每號　洪洋社
建築學研究　每號　其　會
建築畫報　每號　其　社
住宅　每號　住宅改良會
インターナショナル建築　每號　其　會
滿洲建築協會雜誌　每號　其　協會
新建築　每號　其　社

朝鮮と建築　每號　朝鮮建築會
國際建築　每號　其　社
土木建築　每號　其　社
セメント工業　每號　其　社
土木建築工事畫報　每號　其　社
臺灣建築會誌　每號　其　社
都人　每號　其　社
土木建築工學　每號　東京工學　社
東京工業會誌　每月　其　社
大阪工業俱樂部　每號　其　社
家具指物新聞　每月　其　社
白然科學と博物館　每月　東京科學博物館
日立機械評論　每號　其　社
日本土木建築時報　每號　其　社
建築業協會々報　每號　其　協會
東京土木建築業組合報　其　組合
大阪土木建築業組合報　每號　其　組合
庭園と風景　每號　日本庭園協會
日刊工業新聞　每號　其　社
東洋建材時報　每號　其　會
名古屋工業會々報　每號　其　社
木材新聞　每號　關西木材商報社
工業評論　每號　其　社
工業要錄　每號　其發行所
大阪　每號　大阪都市協會
都市問題　每號　東京市政調査會
學士會月報　每號　學士會
工政　每號　其　會
國立公園　每號　其　社
關西園藝　每號　其　社
塗料　每號　日本ペイント株式會社
塗工の魁　每號　其　社
驗工　每號　其　會
電氣學會雜誌　每號　其　會
電氣評論　每號　其　社
帝國鐵道協會報　每號　其　會
朝鮮鐵道協會會誌　每號　其　協會
日本ポートランドセメント同業會　セメント界彙報　每號
エンヂニヤリング　每號　其　社
經濟資料　每號　東亞經濟調査局
通俗衛生　每號　大阪府衛生會
產業　每號　其　會
日本美術協會報告　每號　其　社



大阪・農人橋

場劇會社と築建

昭和六年十二月二十發行　第十四輯第十二號

目次

卷頭挿畫・(大阪農人橋)……(一)
劇場建築と法規……池田實…(三)
大劇場主義か中劇場主義か……坪内士行…(五)
經營者の見たる映畫館並に劇場建築……僊石政太郎…(一〇)
劇場の氣分……食滿南北…(一二)
劇場について漫筆……木村得三郎…(一三)
劇場及び映畫劇場の音響……佐藤武夫…(一八)
劇場及映畫館の火災に就いて……菅野久一…(二七)
劇場建築に關する文獻錄……佐藤武夫…(三六)
昇降機速度に就いて……(長野文一／藤川保)…(五一)
神戸・鈴蘭臺生活改善健康住宅展覽會出品實物住宅……(五六)
京阪・香里園改善住宅展覽會出品實物住宅……(六〇)
秋醋の南紀行(秋季大會記)……德政金吾…(七一)
國際新建築集……(附 六三)
京阪神新建築集……(附 五五)

劇場建築と法規

池田實

はしがき

劇場に關する法規はその一般的のものとしては市街地建築物法竝に其の附帶命令があり、又同法第十四條に基く特殊建築物耐火構造規則があり、又特殊のものとしては劇場取締規則若くは興行場取締規則がある。前者は全國主要なる大中都市の劇場に適用せられ、後者は各府縣毎に夫々別箇の取締規則が存在してゐる譯である。いま便宜上大阪を主體として聊か說明を試みて見やうと思ふ。

劇場取締規則は明治三十年十月大阪府令第一九一號として發布せられ、その後大正十年一月大阪府令第五號を以つて一部改正せられ、最近第十三條及第十六條が削除された。本則の大體の骨子は警視廳令を根據としたものであつたが、警視廳令は早くも時代の要求に適合する樣改正せられ、又この附近に於ては兵庫縣令として興行場取締規則の發布等あつて比較的進步したるものであるが、根本的に於て大阪府令の劇場取締規則は古色蒼然たるもので既に業に前世紀のものに屬すると云つても過言では無い。吾が日本建築協會の法制委員會に於ても劇場取締規則の改正に關し調査研究を遂げ、その意見を府の當局者に建議したること等あるも僅に劇場數の定限の撤廢を見たのみで未だ新興行場取締規則の發布を見るに至らざるは我々の常に最も遺憾とする所のものゝ一である。

顧ると早くも十數年前に於て大阪府令中劇場取締規則、寄席取締規則、觀物場・遊覽所取締規則等を打つて一團とし新に興行場取締規則を制定するの私見を提出した事があつた。その當時大阪を中心とする京都、兵庫、奈良、和歌山等の各府縣の保安課當局が興行に關する事務打合會を大阪に於て催したことがあつた。その際大阪府の保安當局者は新たに興行場取締規則制定の意向ある事を發表した。而して未だその具體案の公布を見ざる前に其の當時最も機敏に富む兵庫縣保安當局者は一早くも兵庫縣令として興行場取締規則を發布した。その爲に大阪府は一步立遲れの姿で今更兵庫縣の眞似をしたと見らるゝことも等考へられて、其儘一時沙汰止みとなつた等のエピソードもある。其後常に大阪府の保安當局者が更迭する毎に改正案が研究せられつゝある樣だが、今にその完成を見るに至らない。吾々は當局者が熱心銳意研究を遂げられ、時代の進步に伴う新制限の一日も早く發布せられんことを切望して止まぬ次第である。

◆

前述の樣な次第で現行取締規則はその制限時代に適合しない爲め府の保安當局者と雖もその全部をその儘適用するに難色ある位である。從つてその制限を一々說明することは殆んど不必要のことに屬するから、主要なる數點に關して說明竝に批判を加へることに止める。

劇場の種類

現行取締規則によると劇場を二種類に分つて一を大劇場とし、一を小劇場として居る。その區別は建物の坪數によるもので、大劇場は建坪二百坪以上、小劇場は建坪百坪以上二百坪未滿としてある。而してその構造制限も大小の區別によつて多少寬嚴の區別がある。現時實際の上に於ては興行上何等の差別が無いと云つても良い。一體この大小の區別は各々その劇場數の制限の上に於て初めて意義のあるものであつたが、最近數の制限の徹廢によつてその區分は殆んど意義を失うに至つたものと云つて良からう。殊に建物全體の大小は舞臺、樂屋、其他の附屬部分の廣狹によつて必ずしも觀客を收容する客席の大小、又は收容すべき觀客數の定員の多寡に比例しない場合が少くない。從つて劇場の種類を大小の如く分類せむとせば、その根據を建物全體の建坪に置くは寧ろ不合理と云つて良しい。

一面に於て市街地建築物法に基づく特殊建築物耐火構造規則に於ては、劇場の構造の種類を三種類に分つてゐる。而してその區分の標準は收容すべき觀客定員の大小に基づいてゐる。即ち觀客定員七

五〇人以上を甲とし、五〇〇人以上七五〇人未滿を乙とし、二五〇人以上五〇〇人未滿を丙としてゐる。而して甲は外壁は勿論其他の壁體・柱・床・屋根・階段等主要構造部を耐火構造となすことを要し、乙は少くも外壁を耐火構造となすを要し、丙は外壁を耐火構造又は準耐火構造となすを要するのである。

劇場の位置

劇場は市街地建築物法の地域制限に基づいて住居地地内には之を建設することを得ない。併し商業地域、工業地域並に未指定地之内に於ては自由である。併し劇場の許否は地方長官の權限に屬するもので箇々の事實問題としては局部的に何等かの支障あるときは許されない場合が無いとも限らない。例へば學校に餘り近接してその教育上又は教授上支障ありと認めたる場合、其他公安風紀上支障ありと認めたる場合等その一例である。而して全市に亘る劇場の分布に就ては、之を集團的となすべきか、個々に散在的となすべきか、各々その可否に付ては大いに議論研究の餘地あつて、今俄に之を判定し難きものがある。今こゝには只問題として存し置くに止める。

次は道路幅員による位置の制限がある。即ち、大阪府令によると大劇場は大阪市内に於ては幅員四間以上の道路に面せねばならないし、尤も幅員三間以上でも特に許可される場合がないでもない。小劇場は幅員三間以上の道路に面せなければならない。

之は多數の人の集合する建物であつて、非常時に於ける避難を易からしめ、又火災其他の災害に對する防備から必要な制限である。

餘地の制限

劇場に於ける餘地の制限は前面に九尺以上、建物の左右及後方に建物間口の三分の一宛の餘地を存せしめる規定になつてゐる。併し其の制限の出來た當時は總て木造のものに對する制限であつたためにその制限は極めて嚴であつた。

その後、煉瓦造の建築物となし、又は敷地の周圍に適當なる防火壁を設くることによつて、火災豫防上の目的が多少達せられ、又市街地建築物法に基づく特殊建築物耐火構造規則の制限によつて、大劇場は當然、外壁は勿論其他の主要構造部をも耐火構造となす必要に迫られ、其の三分の一の制限は現時にては五分の一に斟酌せられつゝある狀態である。小劇場にあつては前面餘地九尺以上、左右及び後方の餘地は建物間口の四分の一の規定となつてゐるが、これも少くも外壁が耐火構造のものに限つては、大劇場同樣五分の一迄斟酌されることになつて居る。

猶前面以外の左右又は後方に於て、幅員二間以上の道路に接する場合に於ては、その道路の幅員を前述の建物間口の五分の一の餘地に通算することも認められてゐる。又後方の餘地は適當なる防火壁を設けたる場合に於ては建物間口の五分の一の餘地を多少斟酌して許可せられる場合もある。而して餘地内には便所に限つて、客席より遠ざかりたる部分、即ち舞臺の左右又は後方等に於て餘地内に之を設くることを認容せられてゐる。それ以外には餘地には何等の施設をもなすことを許されないので避難上充分有効に利用せしめる樣になつてゐる。

一體餘地の制限は採光、換氣、防火及び避難等の目的のため必要なる制限であつて、適當に之を設けしむることは必要と認められるがその餘地幅の制限を果して何に基づいて規定すべきか、又その最小限度及び最大限度を規定するの必要なきや、猶最後に客席の左右と舞臺樂屋の左右、後方との間に空地巾制限上の等差を附するの必要なきや等は大いに研究せらるべき問題の一であると思ふ。

非常口

劇場取締規則によると建物自體からの非常口と劇場敷地全體からの非常口と二方面の制限がある。即ち前者は建物前面の拂口の巾を建物間口の二分の一以上ならしめ客席左右の全部を拂口の用に供せしめる制限となつてゐる。又後者は左右餘地に其の全幅の拂口を設け前面道路に通ぜしめ、又後方に於て幅六尺以上の非常口を二箇所以上設けしむることになつてゐる。

（以下五〇頁へ續く）

大劇場主義か中劇場主義か

坪内士行

最近の米國雜誌『劇術誌』に、アシユレー・デユークスが、『劇場を造ることによつて劇作家や劇を創造することは出來ぬ』(You do not create playwrights or plays by building playhouses.) と書いて居る。彼の此の句の意味は、劇場をどし〳〵建築しても、それによつて作家や作が生れるものでは無い、と云ふ事に相違ないが、私は『劇場』と云ふ言葉の内容を異つた意味に使つて、敢て、『劇場は作家を造り變へる』と云ひたい。

元來、文藝家——少くともイプセン以後の戯曲作家は、あまりにも自己の天職に醉ひ、自己中心になり過ぎた弊がある。演劇と云ふものゝ中心が脚本の内容にあるのは分り切つた事であるが、それのみが立派であればよいやうに考へるのが戯曲作家の通例——むしろ通弊——となつた。しかも演劇は、誰しもが知る通り、その當時に於けるあらゆる文化を綜合して成る藝術であつて、内容をこそ作家が與へるものゝ、仕上げは演出家が、俳優が、或は電氣技術者、美術家、音樂家、等々の助けを借りて、一定の場所で民衆に訴へかけるものである。成立するまでの順序から云へば、まづ第一は作者、第二に演出家、第三に諸種の科學や藝術、第四に俳優、第五に劇場となるが、これを見物の側から云へば、第一に己の身を置き、感じを左右させるものは劇場である。次にそこに現れる俳優であり、諸種の補助藝術や科學であり、やがて演出家や作家の眞髓に觸れる……人もあり觸れぬ人もある……ことゝなる。即ち一般見物には劇場こそ第一で作又は作家は最も奥であり、最後のものと見なされるのは、當然の順序と云はねばならぬ。

此のことは、例へば人間が人間として生きる根本機關が、心臟であり、腦髓であるとしても、その他に必要な内臟機關や骨を無視することは出來ず、なほその上に、皮、毛、を冠り、衣服を着てこそ一人前の人間として完全なのと同樣だと云へる。我々お互ひに交際する時に、誰しも直接相手の心臟や腦を語り合ひはしない、握手は手先でする、感想は口唇によつて述べる。目つきや衣裳で相手を判斷するのである。實際日本の從來の舞又は踊りなどを見る時に、外面的と見なされる衣服そのものがいかに舞踊藝術を左右して來たかゞ瞭然たるのと同樣に、外面的と思はれ勝ちな劇場建築そのものが今までの劇の内容をどれほど左右して來たか、又、將來とても、『劇場が作を造る』のが當然であるかは、多くを說かずして明瞭であるべきなので、此の點從來の劇作家達の自惚れとは大分距離があり、劇場そのものについての愼重な研究考察がなされねばならぬわけである。

デユークス如き英米に聞えた知名の劇論家が、『劇場を作つても脚本は生れぬ』と云つた一面には、勿論昨今の所謂興行師なるものが其の資本の魔力を惡用し、專らその懷中を肥やさんが爲めに、强いて興行本位の政策を取る事に對しての反抗の意味もこもつて居ると思ふ。その點については、私もデユークスに大賛成である。全く歐米の昨今の興行師の中には、名を民衆の要求にかりて、實は民衆をそゝのかし、惡指導をして、豫めほつておいた穴へ連れ込み、まんまと民衆の金を搾取する者が可成り多いらしい。さて日本は?

昔は、いや、最近までも、よしんば芝居の興行が資本家の手によつてなされても、大體に於て民衆の好みや要求が土臺となつて、劇場も脚本も左右されて居た。ギリシヤの劇場と脚本、ローマのそれ、英國エリザベス朝のそれ、佛蘭西ルヰ十四世時代のそれ、乃至イプセン以後の社會劇風の脚本や劇場

なども、殆ど悉くさうである。劇場構造の變遷については、本誌上に別に書かれる方があると思ふので略すが、ギリシヤやローマの無蓋劇場、日本は四條河原の芝居小屋などは、全くその當時の文化の發達に應じて生れたもので、なるべく多くの民衆を集めて、或は宗教の儀式に等しい年中行事を行ふため、又は神社佛閣への寄附勸進のための催しであつたのである。即ち民衆は宗教心を中心として、出來るだけ多數が、出來るだけ上下の階級を無視して寄り集らうとした。そのために、勿論建築術の幼稚さ、即ち文化の程度が低いので、屋根の無い野天の劇場を形造つたのであるが、さて、かうした形式の劇場が自ら決定した後に、そこに上演さるべき脚本が作られる順序となる。ギリシヤの三大悲劇作家、一大喜劇作家の戯曲は、いづれも誇張された面や衣裳を着文章も半ば歌はれる樣に書かれてあるのは、畢竟野天で大勢の見物を前にして演ずるからで、劇場の構造によつて脚本が決定された第一の好い例である。日本の能やお國歌舞伎が、歌や舞を中心に作られてあることも、劇形式の初歩と解釋されると同時に、開け放された廣場に集つた見物を相手とする必然の結果であると見ることをおこたつてはならぬ。

◇

以上は初期の大劇場主義である。主義と云つては當るまい。自らにして成つた大劇場と云ふべきか。が、併し、西洋では文藝復興以後、又、日本ではすでに女歌舞伎以後、文化が發展してからと云ふよりは、個人〳〵の自意識が盛んになり來つたゝめに、大集團の觀劇よりは、次第〳〵に限定された小範圍の場所又は建物の內での觀劇趣味が高まつた。エリザベス朝の劇場や、佛蘭西でのイン・ヤード劇場などは、半無蓋の劇場であるに拘らず、收容しうる人員は可成り少いものであつたらしい。恐らく千人とは收容しえなかつたであらう。たか〳〵五六百人の見物を入れたものと思はれるが、これは取りも直さず小劇場時代と云ふべきではあるまいか。從つて、此の樣な集團を相手としての劇は會話を主とした。會話でも特にウイツチーな、頓智問答風の輕明な辭句が盛んに用ゐられてゐる。シエークスピヤとモリエールでは、作の內容は非常に相違するが、此の頓智問答式の會話の多い點に於ては一致する。しかも、右の樣な名作家と雖も、彼等の作品が書かれたゝめに小劇場が造られたのではなく、小劇場が流行したればこそ、それに適合する脚本を書いたのだと云ふ事實は認めておかなくてはならぬ。

◇

十八九世紀は中劇場時代と云はゞ云へる。此の中劇場主義は、併しながら、要するに前の小劇場の延長、乃至、膨脹と見るべきであらう。即ち世界的に人口は增加し、自然觀劇者の數も增し、又、一方に於ては科學の發達が著しくて、舞臺上に取入れる諸要素——例へば最初は瓦斯、次には電氣、其他背景や大道具の機械的構造等——の複雜になるにつれ、客席も舞臺も自ら廣められたに過ぎないのでシルレルやラシーヌや、下つてはイプセンやショウ等の脚本も、結局は依然會話本位である。此の會話本位と云ふことが長く續いたゝめに、又、たま〳〵十九世紀後半からは卓越した名優が乏しくなつたゝめに、文學が主體となり、作者が演劇の專制君主の樣にもなり來つたのである。

◇

中世からは小劇場乃至中劇場になつたと云つたが、それと並行して、一種の大劇場があつた事は否めない。これは即ちオペラ劇場である。併し、私をしてし言はしむれば、オペラなるものは、つまりはギリシヤやローマの劇の模倣をしようとした試みから出立したもので、民衆の要求から生じたものではない。貴族や學者や音樂家の努力によつて唆かされた高峰の花とも見られる。であるから、二千、三千の客を入れる大劇場が、イタリーにもフランスにもイギリスにも建設され、現存して居るが、其等は謂はゞ特殊な社交機關であつて、民衆を對照とする演劇とは自ら別の取扱ひを受けるべき性質のものである。

◇

さて、初期の大劇場、中世以後の小中劇場の時代を經て、昨今頻りに『大劇場主義か中劇場主義か』が問題にされることゝなつた。私は先づ大劇場主義を二つの觀點から考へて見、次に、中劇場主義の内容を研究して、大まかな結論に達しようと思ふ。

昨今改めて唱へられる大劇場主義には、二つの違つた立場がある。一つは興行師等が事業としてこれを考へるものであり、他は民衆娯樂の文化機關として社會學研究者や文化運動者が唱へるものである。此の二つは大劇場を可とする點に於てのみは一致するが、そのスタートと、主張する意義、從つて内容には大きな相違がある。事業として大劇場を可とする説は甚だ簡單明瞭である。即ち一般の生産業と同じく、劇場經營に於ても、安くして多く賣るに限ると云ふのがその根本理論をなして居る。現代の民衆——と云つても、勿論芝居好きの民衆——の最も飽き足らず思ふところは、決して劇の内容ではなくて、その興行法にある。興行法さへ改良すれば見物も澤山來る、從つて一般民衆に幸福を與へることが出來る。これが事業家側の考へ方である。そして、その改良の方法はどうかと云へば、最初に、同時に又最終に、『安く見せること』これのみが目標である。併し、勿論無闇に安くは出來ない、何故ならば、すべての事業は計算が取れねば永續はしない、永續しないものは社會的に見て殆ど意義が無い。であるから是非算盤の合ふようにしなければならぬ。そのためには、例へば十萬圓かけた興行を、毎日千人づゝの見物を相手に二十日間やれば、一人について五圓づゝ取つて一杯であるが、これを五千人收容しうる大劇場で演ずれば、同じ費用のものなら一圓づゝ、もし又二倍の費用二十萬圓をかけても二圓づゝで見せられると云ふ理由から、まづ大劇場を建設せよ。大體かう云つた主張が一部の大劇場論者によつてなされて居る。

此の主張はまことに尤もな點がある。同じ費用のかゝつた劇を一層安く見せる方法としては、もう一つ二回興行と云ふ方法があるがそれの弱點は俳優の勞働過度であり、演者に感興が乘らぬ事が多い。それに比べれば、見物の數を增した大きな入れ物で一日一回演ずる方が、よしんば、これは遠方の見物を虐待するものだとの批難はあるとしても、遙に優れた方法であることは論をまたない。

併しながら、此の經濟論から出立する大劇場主義には一つの矛盾がある。と云ふのは、大都市に一二、又全國的に若干と、云ふ程度の數ならば、どうにか經營もして行けるであらうが、全都の、又は全國の、劇場が悉く大劇場になりうべき筈はないので、主義と名づけられるほどの大きなムーヴメントとはなりえないし、同時に、その少數の大劇場で上演する出し物には非常な費用がかかるに拘らずそれを地方や他の小中劇場へ持ち出して上演する事は不可能であるので、一時的には成功しても、結局は費用倒れに終り勝ちである。それに、さうした計算を元とするために、自然觀客層の低下を來たし、上演物は次第に雜然たるものとなるおそれがある。雜然たる出し物の連續は、これも一時は刺戟を與へても、永くは保ちえない。やがては内容に行き詰まることゝなる 紐育のロクシー・セヤターの興行成績や内容は知らぬが、ヒポドロームなどは確にその點で行詰りもし、所謂演劇界の本道からは全く離れたものとなつてしまつて居る。もつとも日本では、寶塚の大劇場が四千人の收容人員をもち、見物料金も三十錢と云ふ安値で、よく一年無休演の好結果をえつゝあるものゝ、これも、藝術的には兎に角、經濟的にはたして獨立した成功と云へるかどうかは未だ疑問である。何としても寶塚が電車會社の經營になつたものなればこそ、との感じは何人も考へる點である。

◇

以上のやうに、經濟的の理由からは大劇場主義に多くの贊意を表しかねる私も、併し、他の理由から大劇場主義を主張する一人ではある。主張しないまでも、大劇場贊成と叫ぶものゝ一人ではある。それは、經濟的に損になるか得になるかは二の次として、文化進展の自然法則から、又、社會組織の變轉から、大劇場は社會的オーガニゼーションとして必要なものゝ

一つたらざるをえない、と云ふのである。即ち前の經濟的理由とは殆ど反對に、內容、及び觀客の慾求がもとで大劇場は建設さるべしと云ひたい。

大劇場の必要を云々するためには、劇の內容の變遷——と云ふよりは、近代社會の急激な變化——を論ぜねばならぬが、大ざつばに云つても、初期の劇が宗教劇であり、やゝ進んでは、小さい箇々の人間の葛藤を主とした人情劇となり、次に箇人對社會の所謂社會劇、問題劇と變つて來たのは、畢竟その時代の見物の要求に依て生れた自然の結果であるが、今はどうであるか？世界を擧げての大問題は勞資の鬪爭であり、階級と階級との必死の衝突である。今は箇人と箇人とか、箇人と社會と云ふ比較的小さな問題は殆ど顧みられず、集團と集團との相擊つ大波濤が起伏重疊してゐる時代である。人間が一つの集團をなして動くと云ふ點に於て、私は遙に初期の劇界の有樣と相似た物を認めざるをえない。即ち初期の劇界の對照物は神であり佛であつた。神佛と云ふ人間界以上の又は以外の、大きな存在に對して、人間が一團となり、心を合せて、或は崇敬し、或は恐れ、或はそれの司る運命に反抗して鬪はんとした氣持を現したものが、宗教劇の本體であつたのである。その頃の社會人は見えざる力に對して一團をなした。今の社會人は、己等が無意識の間に作り上げた社會制度や組織に對して、お互ひに一團をなして鬪ひ合つてゐる。此の意味からして、昔てギリシヤやローマ、下つては四條河原の野天劇場に集つた見物とは違つた內容の、しかも形に於てはそれを髣髴させるものが現れるのは當然ではあるまいか。團結、群集、さうした社會人の動きは、これをスポーツ界に見ても、野球、又は蹴球のやうな大きなゲームを盛り上らせたが、劇場に於ても、千人よりは二千人、二千人よりは五千人と、出來うる限りの大きな劇場を要求して居る。これこそ資本家や事業家が、儲かるか否かを考へるより前の、根深い理由でなければならぬ。

かう云ふ集合所、大劇場の要求や必然性が起る時、そこに始めて其の觀衆の心を捕へる脚本、その舞臺に適應する劇が考へられる事となる。これが最近の所謂群集劇であり、レヴュウ形式の娛樂物である。勿論此の二者は內容と效果に於ては天地の相違があるものゝ、そのいづれもが、今までの小規模の舞臺劇を離れて、大衆にアピールする表現方法を工夫して居る點に於ては一致する。はたしてロシアやドイツでの左翼劇が最もよいものか、フランスやアメリカの見世物式レヴュウが完成されたものか、或は又日本の一部の識者の唱へる樣な新歌舞伎の形式を取つた劇が將來の脚本の主座を占めるかは、今後多くの研究を要するであらうが、その疑問點、その未完成の所にこそ新群團劇の生命と興味はかけられる。從つて、此の式の大劇場は、或は經濟的には收支相つぐのはぬ場合があるとしても、それが故にその使命と意義の重大性を失ふものではない。否、むしろ多くの犧牲を拂つても、又例へば國家や都市の負擔が重くても、社會政策的にさへも經營されねばならぬと信ずる。

◇

私は、以上で可成り大膽に大劇場主義を支持したつもりである。が、甚だ首鼠兩端とも思はれようが、中劇場主義に對しても、私は充分にその存在價値を認めるのみか、それがいよ〳〵繁盛せんことを望んでゐる。何が故に、一方に大劇場を讃美し、他方中劇場を推すか？此の私の考へを明らかにするためには、人間の理智と感情との問題、社會性と藝術本能との關係を一と通り說明すべきであるがそれもくだ〳〵しいので略すとして、一部の社會批評家は、藝術本能も娛樂趣味も、悉くこれを大きな社會の動きの中につき交ぜて、人間の理性なり感情はすべてこれ集團の力によつて左右されるものと論ずる人がある。勿論人間は無人島に一人住んで居るのでない限り、何らかの意味で世界の大勢に影響される事はまぬがれぬが、しかも、何時の世、何處の國の人間でも、必らず自分自身の、各箇の感情や趣味は持つてゐる。人間と

しての大體は一般に共通であつても、その目や鼻は一人々々に違ふのと同じ事である。從つて、群團的に、大量生産式に動き、考へる事が現代の大勢であるとしても、その間、箇人的の趣味や感情は底深く存在して居る フォードの自動車が自動車界を席捲しても、キヤデラツク、クライスラー、等々亦同時に存在價値をも顧客をも有して居るのとほぼ同じ様に、ほゞ同趣味の人々、ほゞ同程度の教養や境遇の人々が相寄り相見る劇場の必要な事は、改めて云ふまでもないと思ふ。大劇場主義か中劇場主義かと云ふ事は、一つが是であり、他が非であると云ふ事にはならぬ。いづれが現代により有意義なりやと云ふ程度の疑問にしかなりえないのである。

◇

中劇場と小劇場とは、その持つ意義に於てほゞ同じものである事は前に述べた。其等の中、小劇場が昔から存在して居るに拘らず、近頃俄に大劇場主義を唱へる者の増したのは、前に述べた様の理由や理論があるからではあるが 一つには中劇場の存在は何世紀間の長きに亘り、その舞臺で演ぜられる物が多くは陳腐となり、新に作られる脚本も、劇場が同じであるがために、上演形式其他に於て全然舊型を脫し切りえず、次第に甚しく人々に飽かれて來たからであるとも考へられる。併し、過去はともあれ、又 その形式が傳統的に尊ばれると云ふ理由からでなくても、中劇場は將來も必らず一部人士の中には缺くべからざるオーガニゼーションとして支持されて行くであらう事には一點の疑ひもない。大衆と共に行動する事を有意義と考へ、そのためには箇人の趣味や感情を犧牲にする事を敢ていとはぬ近代人も、一生の全時間をあげてその通り行動する事は絶對にありえない。特に私は日本人に於て然りと云ひたい。西洋人と比較して——例へば衣裳の好みなどについて——日本人は箇性がないとは、よく人の口にする事であるが、私は丸で逆に考へて居る。日本人ほど、少くとも藝術的な趣味に於て、惡るく云へば贅玉の小さいほど箇々人の好みを主張する國民は稀だとさへ考へて居る。最もよい例は、能樂なり、狂言なり、又は舞踊、三弦等に、いかに流派の多いことか。劇界でもその通り何某家と稱する流派の數は十を以て數へるべく、そのいづれもが各自の好みを固守し、傳統を尊んで、容易に他に雷同しない。勿論これは島國根性ではあるが、又もつて外國の藝術家が融通自在、たまたま流派らしいものを立てるものがあつても、その門下、末流に至つては忽ち彼我相合流し合う妥協性と著しい對照をなして居る。かう云ふ箇性を固執する日本人の間に小、中劇場が無くなることは到底想像しえられない。昨今日本の中劇場の衰微の最大原因は、事業家達の說とは反對に、やはり內容の缺陷が第一の原因だと思ふ。それを改善する事の代りに、事業家は無闇に多くの劇場を增設し、資金の融通に息をつかうとあせつて居る。いかに人口が增加しても、單にそのやり方だけでは劇界が盛える筈はない。デュークスの『劇場は劇を造らず』と云つたのは寸鐵の名句である。

が、しかも『劇場は劇を造る』。社會民衆の要求によつて生れつゝある大劇場は、その大劇場に適當な脚本を書いてくれ、上演方法を研究してくれと叫んで居る。同時に特殊の好みによつて集る幾多の小グループは、吾等の生命の糧ともなる、趣味豐かな各々異つた快い手頃の劇を中劇場に見せてくれと叫んで居る。

◇

大劇場、中劇場、小劇場、其等は各々獨特の使命と意義を有して居る。其等はその一つのみを選定さるべき性質のものではない。相互ひに補佐し合ひ、又は競爭し合つて、社會民衆に利福を與へねばならぬ大切な任務を有して居るものである。(完)

經營者の見たる映畵舘並に劇場建築

僊石政太郎

經營者の見たる映畵舘並に劇場建築に關して聊か愚見を述べて見たいと思ふ。元來經營者と雖も各其個性を異にするから、從て單純に律することは出來ないから實際は可なり面倒であるが、併し大體に於て共通性なる處を述べて見れば第一番に場所の問題である。

◇

映畵舘も劇場も大體同一であるけれども多少は差異がある。先づ映畵舘の方から云へば劇場より凡ての點に於て稍小規模である。經營も劇場よりか單純である點から數に於て非常に多い。故に其撰定の仕方も種々あるが、先づ東京淺草公園六區とか、大阪新世界とか、或は京都新京極とか云ふ樣な盛り場は別として、各一般市內に設置する場合は、大體に於て階級の高低はあれども一般には成るべく人口の稠密なる場所を以て最上とする。其環境に於ては道路の角地又は道路に圍繞せられたる敷地にして、最も人の集合し易き且つ餘りに騷擾のある所でない場所を望む。勿論一流の映畵舘となれば別であるけれども、餘りに高級でない舘となれば實際興行の十分可能なる所、夜の方は大底問題でない。

第二には建築の計劃のことであるが、之れは先づ最も大切なることが平面計劃である、之れは成るべく判り易くして餘り單調に流れない樣にすることで、即ち『コンフカート』にすると云ふことで有ると思ふ。其次が立體計劃であるが、之れは其『プラン』に支配されるもので、最も重要なる事柄は視線『サイトライン』が舞臺の映畵面に容易に集注する樣に計劃することで、理論は頗る簡單なれども、實際は種々の事情のもとに成功して居るものが極めて尠い。之れが當を得て居たならば、映畵の觀賞は極めて安樂に、少しの疲勞も感じない。

次に起る問題は音響の事であるが、之れは舘が小さければ大した事もないが、規模が大となれば餘程考慮を要する。要は映畵の說明其他音樂等が容易に聽聞することが出來れば良いのである。

其次は換氣煖房のことであるが、煖房の方は大概良しい樣であるが換氣の方は今の處成功したのは極めて尠い樣である。何んな小さき舘でも全部自然換氣法によるとは今迄は兎に角、之れより先きは考へものである。稍規模が大となれば少くとも冷水にて空氣洗滌を爲し之れを『ダクト』等の手段により客席內へ快感を與ふる程度に十分の空氣量を供給し、之れに伴ふ排氣裝置も完全であつたならば、場內は何時も歡樂境である。

其他喫煙室、休憩室、便所等の設備を完全にすること、就中椅子は觀客に直接影響を與ふるものなれば、狹隘を感ぜざる樣、且つ『シート』の彈力あるそして凡てが頑丈なものを吟味することである。

次には建物の外觀內部の造作であるが、之れは趣味の問題で一寸面倒である。外觀の方はつとめて人目を引く樣にさりとて醜惡な強烈なものは勿論良しくない。大體の骨子は樣式の新舊にかゝわらず公共的なそして情味のたつぷりした且つ今迄述べた內容を總括した最後の現はれでなくてはならない。內部の造作はなるべく簡潔にして、映畵觀賞を本位とし、刺戟の強きものは良しくない。併し段々競爭が激しくなつて兎角強烈な裝飾を施す傾向はあれども、成るべく事情が許せば簡潔なるを良しとす。能く昔から建築を觀賞する言葉に「美盡し善盡し」と云ふ事があるが之れは車の兩輪の如きものでどちらも欠くことは出來ない。即ち美に適へば善を生じ、善に適へば美を生ずる譯であるが、殊更彫刻繪畵等を施さなくとも成るべ

く善の方に重きを置き、之れより美を得る様なやり方が映畵觀賞には無難と思われる。

◇

次は劇場建築のことであるが、之れは一般に前者よりも稍規模が大となる傾向がある。夫れは第一に舞臺裝置、樂屋等の程度が大きく成り又劇の幕間がある關係より、食堂及賣店等に相當の面積を要し從て建物の嵩が大きくなる。故に前者即ち映畵館の敷地撰定とは少し異つて來る。殊に最近は何々觀劇會など、種々の催が行われ、入場退場の時は自動車の輻輳が激しいから道路幅は成るべく廣く、且つ廣場の如きものあれば尙結構である。建物に就ては大體前者と同一であるが　客席は劇の方は暗くすることが前者のそれよりも少ない。大體に於て明るいから此點が餘程考慮を要する、即ち芝居氣分が出なければならない。當今は從來の歌舞伎劇と西洋劇が交々演じられるので、双方に都合の能きものが一番良しい譯ではあるが、中々六ケ敷い。結局簡潔なるものが双方に染まりやすく、若し單調に流るゝ様なときは、其場面に應じ電灯及『カーテン』或は引幕の様なものにて裝飾を施し、調和を補足する様にすることは能いと思ふ。此點に關しては映畵の方は暗いから日本劇でも西洋劇でも大した問題でない。又歌舞伎芝居專門となれば之れには申す迄もなく昔からの能く洗練された型があつて、之れに嵌めるから外觀などは檜の上つた江戸風のもの、又内部造作は大概二階建でそして階高が一般に低いから、視線が第一に樂くで、口跡が能く聞え、劇と建物とはピタツト合致して居るから、其味は又別である。能く昔の芝居は一度見ると印象が深くて忘れにくいと云ふのは、思ふに造作の刺戟が今程でなく、劇の觀賞に重きを置き、劇との親しみ深かつた様に思われる。勿論今日の如き日進月歩のときに何も昔を學ぶともないと思われるが、さりとて捨て難き風情と思ふ。

◇

兎に角結論として觀客に好感を與へ經營の繁榮を期することであるが、之れには又入場料金の低廉なるを要するを以て、比較的少額の投資にて最大の効果を得る様計劃されねばならぬ。之れには善盡しの方法で、階級の如何を問はず凡ての客席より歌舞音曲、映畵の觀賞聽聞に遺憾なからしむると云ふことが絶對條件で、出來榮へも相當に効果を修めたならば、其建物が自己の所有であつても、亦賃貸建物でも、經營者としての見地より滿足すべきものと思ふ。(完)

劇場の氣分

食満南北

私は『建築家』ではありません、だから私から『建築の智識』と云ふやうなものを獲やうとなされてもそれは無駄な努力だと思ひます。しかし私は『建築の趣味』と云つたやうなものゝ持合せはあります。だから私からさうしたものを聽かうとなさるなら、ひよつとすると面白い事を云ふかもしれません。

私は今『劇場の氣分』といふものを話さうと用意して居ります。

私は『芝居』といふものを作りあげて行く『作者』であります。

『作』

といふ事は『建築』と共通した一つのエネルギーがあります。私は作りあげられた『建築』を批評する事が出來ます。しかし芝居を基礎工事から積上げ得られるやうに、地を幾十丈か堀下げてソロ〳〵家を建てやうといふ事は不可能です

『劇場』

それはそも〳〵表構へからして『劇場』がもつてゐる『華やかさ』がほしいと思ひます。お寺のやうでも困るでせうし、ビルヂングでもいけません、ステーションでも、百貨店でも、ホテルでも困ります。

『劇場のもつ特種の味』をそこに盛らなければなりません。

人をひきつけなければなりません。劇場の建物に『まねき猫』の役目をつとめさせなければなりません。さうすると、其處に、

『色彩』『感じ』『やわらかさ』『味』

『高さ』

『建築』の方ではどんなテクニックを用ひるかはしりませんが、兎に角さう云つたすべてを盛りかへ考慮しなければなりますまい。

『芝居』なんていふものはどの道から進んで見ても『氣分本位』のもので、私は善盡し美つくしでは困ると思ふ一人なのです、舞臺が世話場であるに拘はらず、觀覽席が金ピカでは全く出合はないものがありはしますまいか。

『外觀』

などは、前に云つたやうでいゝとして、『內部』はあまりに洋式に流れないやうにしたいのと、

『コテ〳〵した色彩』

『甘い味』

『べらぼうな高さ』

『眼を射るやうなキラビヤかさ』

などは一切さけなければ場中は引締まらないと思ふのです。

近頃多く洋式をとりいれてむやみに『モダン』がつてゐますが『レヴュー』とか『映畫』にはよいとして、日本古來の歌舞伎の場合に『無調和』といふ事がまぬかれますまい。

扨話しかけて見ると、これ以上の事も云へなささうです、何だいそれつぽつちかいと笑はないでね。

劇場について漫筆

木村得三郎

○

私は巴里やその他の都市で小ぢんまりした氣のきいた新らしい小劇場を三四見ましたが、日本でも、せいぜい三百人位乃至五百人までの位の、云はば從來の寄席をもつと近代的に改築した大きさの、小劇場を建てゝ欲しいと思うて居ります。そう云う小劇場は平面は非常にかんたんで、唯安樂にそして氣安く見らるゝと云うことだけを主眼として建築されて居る故、別に食堂とか喫茶店とか又は休憩室とかそう云つた餘分の室は全く無いので、煙草などは廊下や階段室でのんきにふかして居る有樣です。尤も劇場の開始時間が夕食後であるため、日本のそれのように見る事と食ふ事とが重複してないのだから、その點甚だ都合よいのであります。場所によつては一寸した酒場がありますが、之は飲物專賣だから殆んど御客は立飲みで用がたります。又特に飲みたい人は芝居がはねてから途中のレストランへ出かけますし、御腹の空いた人もそこで夜中の食事が出來るわけであります。食ふことは第二の問題として、見る一方の氣持ちのよい、小ぢんまりした小劇場は是非あつてよいと思ひます。先年私が東京で仕事をして居る時、或る芝居會社の幹部の人人も是非そんな小屋を造つて見たいなどゝ切に話されたことがありましたが、芝居道關係者にもこんな慾求は多分私など以上に持つて居らるゝことでせうが、とかく問題の多い目下の狀態ではそこまで手がのびないのだと思はれます。

○

小劇場として一個建にすることは理想的ですが、高々五百人か八百人位收容の小屋は適當なるビルデングの一部にふくめられてもよいと思ひます。千人以上の小屋は中劇場として相當の條件がつきまとうことは止むを得ぬとは思はれますが、それ以下の小屋は監督官廳の方でも大分に割引して融通性のある條令で以て、危險やひどい支障のない限り、或る程度寬大な按配をゆるされるようになると好都合と存じます。

前置きが長くなりましたが、巴里で見た或る小屋は全く一つのピ

ルデングの地下室を利用したもので、正面玄關からいきなり廣間へ出ると切符賣場があつて、すぐうしろと左右に出入口や階段があつて、それ〳〵平場や棧敷へ連絡してあります。觀覽席には左右に廊下などは無く長さの三分一程まで二階棧敷が出て居ります。芝居がすむとすぐ舞台の前のオーケストラの左右に設けられた出口から、極めて速かに御客は退場してしまひます。

○

こんな小劇場では御客のうごきが能く訓練されて居るために殆んど興業者側からの手はかゝらぬようで、案内人などもそんなに大勢居りませんし、それに切符は椅子の番號入りだから御互の混雜は自然起らないのです。今思うと可笑しいのですが一帶に歐洲の劇場では御客は案内人に心付けをやり又案内人は御客から心付けを貰うこととなつて居ることは、從來東京や大阪の劇場でもあつたことで當今は大分減つたようですが、歐洲では依然そのまゝになつて居る樣子であります。巴里の或るところでは案内人の方から『これぢやすくな過ぎる、もつと下さい』なんて圖々しいのが居りましたが、之らは一般になくなつてくる傾向が見えます。最近改築出來たばかりの巴里のガウモンパレーなどではこちらから心付けを出しても案内人は受け取らなかつたと覺えて居ります。又横道にそれましたが、大體に於いて建物の平面を概觀して取締規則は我國程嚴格でなく大分ゆとりがあるように思はれます。尤も町全體の建築は絶體耐震とは申しかねますが、耐火的ではあるようですから、其邊我國のような木造建築の多い町の中に建てられるものとは大分條件が違つて來るのだらうと思はれます。

○

椅子の大きさ、各間隔などは、我國の規定より少しく一廻りひろいと云つた程度でありますが、多くの場合椅子そのものの腰掛具合はまことに能く、安樂なものです。建物それ自體は所謂無裝飾式とでも云ひませうか、近代のもの程瀟洒な單純な形式でつくられて居りますが、仕上材料などは相當の良質のものを使用して居りますので一寸見には或は安く思はれても、實際は形の割には贅澤なものが多いようであります。

舞台の道具建も單純になつて居るようですが、舞台に附隨して必要な設備はこれと反對にだん〳〵複雜になつて行くものと思はれます。殊に電氣の照明裝置は素晴らしいものであります。そして充分洗練された色彩の感覺とたくみな電氣照明術とによつて、舞台効果の上になんとも云へぬ情景を表現して居るのであります。實に巴里人程現代に於いて豐富な色彩感覺を多分に持ち、そして生き〳〵した立派な美しい表現をなし得るものはないと思ひます。

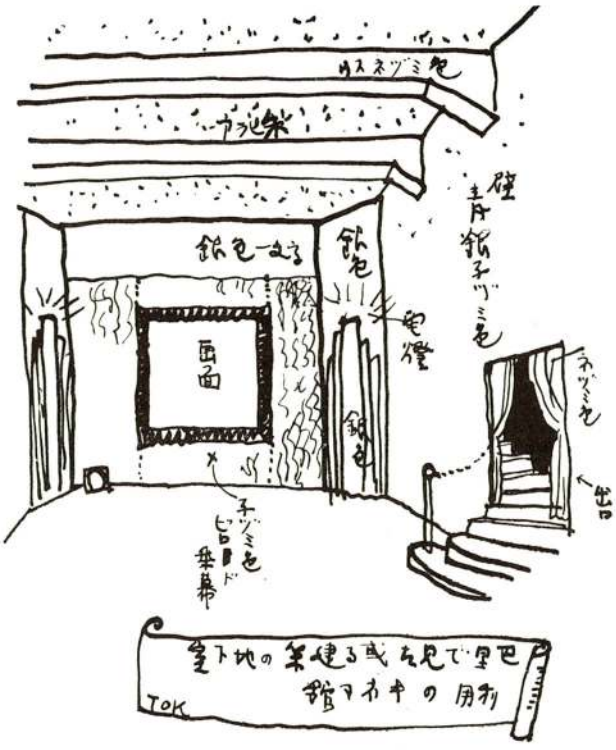
○

巴里のグランドオペラのような大劇場はむろん小劇場でも舞台裝置、道具建て、いろ〳〵小道具の配置、家具調度品のならべ方、そしてことにそれらの形と色彩の布置と、俳優の扮裝と化粧など寸分の隙間もなく、實にすばらしいたくみさであります。殘念ながら私はフランス語が出來ないのでコミツクなどの氣の利いた洒落ことばがわからないので、劇場内の樂しい雰圍氣を充分堪能出來ないのでしたが、それでもかなり深い感動を受けてのう〳〵したほがらかな氣分にひたつて滿足したことであります。

かゝる種類の小劇場は建築としてさ程に凝つたものゝ如く見えませんが、然し一面デザインとして相當洗練をへて居るようであります。根本問題として平面計劃が比較的簡易直明であることが自然ものゝ組織や構圖に影響してくるのですが、同時に建築それ自體も小さいながらも活動的であらねばならぬと思ひます。劇場のまわりの餘地などは周圍の狀況によつてはさ程に考慮する必要もない場合も少なくないと思はれます、こう云ふ點では歐米の全體では無いかも知れないけれど、古いビルデングの一部を小劇場や映畫館に改築したようの例は、我國などの目下の狀態では一寸望めない問題であることは遺憾であります。

○

日本の劇場と歐洲のそれとは到底比較にならぬ程御互に特殊性を持つて居ることはまことに興味があります。舞台だけの事からでも、日本は平面的で向うは立體的とで



も申しませうか。東洋人と西洋人との間に於いて各々傳統的に持つて授かつたものの鑑賞態度がおのづとかゝる形式を生んだものと云つてよいと思ひます。べつたり座薄團に坐つて見ることと椅子にもたれて上半身を直立さして見ることの差異が舞台及大道具の方にも及ぼして、舞台間口の形、奥行など及び道具建のはたらき、俳優のうごきそれぞれの形式を異ならしめて居ると思はれます。が近頃急に日本の生活様式が歐化して來ましたので、どちらがよいとかわるいとかを論ずる餘地は殆んどなくなつて來て、今後は純粋の日本式劇場は成りたゝないので、新らしい劇場を建てるとすればどうしても歐米のそれらを參酌しなければなぬぬ氣運に在ることは止むを得ぬことゝ思はれます。觀覽席を椅子に改めることはすでに徹底したようですが、それでも尚舞台上の効果を立體的に表現するため、思ひ切つて從來の横長の舞台間口を縦長のそれに改造出來ぬ矛盾があるようです。即ちこれ程日本の演劇そのものゝ根強よさ、又は特殊性或は又御客側の鑑賞的態度なりが日本らしい特色をまだ多分に保有して居るのであると思はれます

○

小劇場の舞台間口として、横六七間位、高五間位欲しいと思ひます。奥行も五六間で充分でせう。オーケストラがあれば申分は無いと思ひます。從來の日本に於ける劇場は小屋の格位を舞台間口の幅できめてしまうようであります。東京の歌舞伎座は十五間だから第一流だとか、明治座のは十三間だから第二流だとか、帝劇は十間だから東京劇場には及ばないとか、つまり舞台間口の幅がその小屋の先決問題で觀客人員なども之によつて割出される模様であります。尤も近頃やかましい大衆劇場を目的とする方からは歌舞伎座や寶塚歌劇場などの觀客人員二千五百人とか三千人とか或はもつと收容できる建物は極めて好都合でありませうが、小劇場と雖も見せる方法によつては充分大衆的に成り得ると思はれます。アメリカの或る活動寫眞舘でしたが、これはいつも時事問題やきわものをたて續けにうつして一日に七回も八回も何回となくたへまなく繰り返して居るのです。トーキーですから説明者は不要です、御客は入場料をはらつてどこでも空いた席にすわつて見て、一定の寫眞を見終はつたら勝手に出て行つてしまうのです。だからこの映畵舘にはたしか切符賣場に人影を見るだけで管理人とか案内者などは見えなかつたと思はれます。これなどは隨分徹底した大衆的の經營方法だと思はれます。

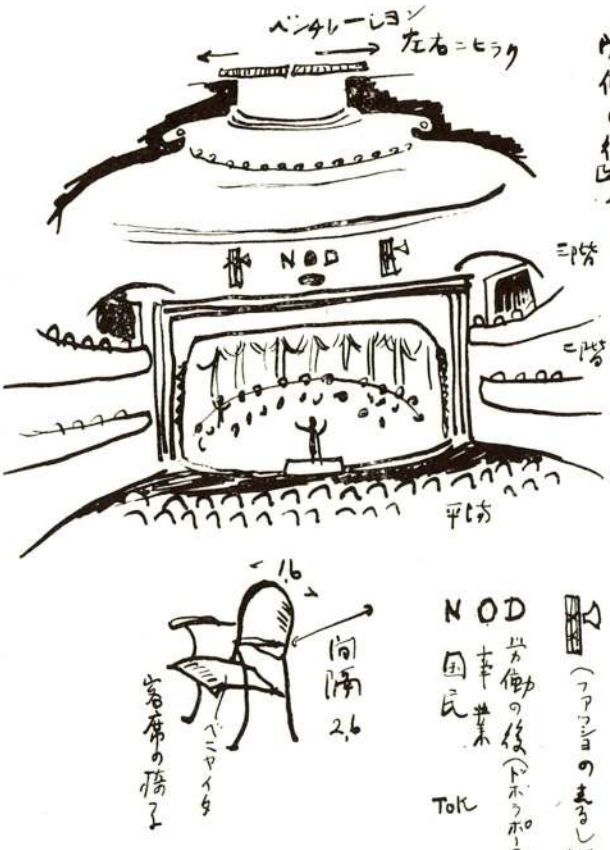
○

特殊設備としては電氣裝置に主として出來るだけの力を致すべきで、この點では殘念ながら我國の劇場は、歐米に比し何んとも形容の出來ぬ程の貧弱さ幼稚さで、馬鹿々々しい位であります。むしろその外の換氣とか煖房とか冷房では少くとも歐羅巴の多くの劇場に比し左程の遜色ないと思はれます。むろん歐洲は一般に氣候や溫度の變化や差違が少ないために、かゝる方面に對し日本の劇場のよ

うに複雑なる裝置は必要としないものと思はれます。少なくとも冷房については日本の劇場の方がかなり苦慮されて居る模樣であります。尤も向うでは夏期には芝居は休演して居るので冷房裝置の必要は感じないのでありませう。かゝる方面の問題ではやはりアメリカの劇場や映畫館の方が遙かに進んだ立派な設備を備へて居ります。全く歐洲のものなどとは御話しにならぬ程度のものであります。だから人氣取りの上手なアメリカの或る小屋では、冷房や換氣設備の完全なることを標榜して、大道路に面した女關の所へ大げさに書きたてて宣傳用に廣告して居るものなどを間々見うけました。

○

イタリーのローマでドーボラボーロ（勞働の後）團體の專用して居る手頃な會堂を見ましたが、主として演劇と奏樂場に使用されて居るもので、ぎつしりつめたら千三四百人は入ると思はれます。私が行つたのは大マスカニーが鐵道從業員より成る音樂團を指揮してベートベンやベルデイや大マスカニー自身の曲目を演奏すると云ふのでそれを聞くためにローマで御近づきになつた下位さんの御家族のお供をして參りました。建築は新らしいものですが、さすがイタリーにはクラシカルな形式が根强くて自然新しがりの建築にもそう云ふ古い形式のなにものかゞ表はれて居ります。觀覽席は圓形で、壁及天井は純白スタツコ塗りのすこぶる簡素なもので、椅子も全部金物の足にベニヤ板を張つたものだつた と思ひます。天井には圓形で直徑十二尺位のくぼみがありますがお休憩時間になるとくぼみの上部の蓋が眞二つにわれて左右へ引き分けるようになつて、そこから開演中にこもつた惡い空氣が屋根裏を通つて外へ排出されるようになつて居ります。なにしろ大アスカニー出演と云うので人氣は大變なもので又オーケストラの鐵道從業員の音樂團もすこぶる緊張して熱心に演奏しましたが、かゝる方面にあまり頭の無い私でも深い感激を味はつたことでした。



○

イタリー內地の主なる各都市にはドーボラボーロの團體で確固たる組織の下に經營されて居る立派な住宅區域がありまして、そこにはそれ〴〵小劇場の形體で公會堂のような建物がたつて居ります。ローマだけでも四つか五つ位あつたと思ひます。そして時々その會堂で團體の會員より成る演劇や音樂公演があつて隨分有意義なる文化機關となつて居るのであります。恐らくイタリー人程音樂愛好の國民は無いと思はれますが、どこへ行つても相當の音樂をきく事が出來ます。ドーボラボーロの會館は能く音樂會場として又演劇場として利用されて居るので、特にこの會員はごく僅な入場料で場合によつては無料で入れるのであります。開會時間はたいてい夕食後即ち八時

頃からでありますから勤務や勞働の時間をむだにするようのことなく、又この團體には少くも正當な勞働や勤務によつて生活して居る者は、位置の上下にかゝわらず極めてやすい會費で會員となることが出來るので、家族のある者は家族も同樣の待遇をうけることが出來るのだそうであります。こう云ふ團體を我國に造つてよいかどうかは別問題として、誰でも氣安く出入りの出來る手頃の大さの會場を數多く建てることは無意味ではないと思はれます。」

○

單に商賣上からこう云ふ種類のものが能い經營を續けることは無論至難なことゝは想像されますがこの漫筆の最初に於いて書いたように大會社の幹部の中にもかなり熱心に幾分なりと理想に近い小劇場を建てゝ見たいと云ふ主張はあるようですから、早晩實現することが出來るかも知れないと思ひます。私の頭の中には別に具體的にどうしてよいと云ふ考案は無いのでありますが、出來れば東京と大阪位にせめて一ケ所づゝ位のまとまつた小劇場があつたらと思ひます。大阪の朝日會館などがたへず利用されて居るのはすでにこの氣運が熟して居るのでは無いでせうか、あれなどはまことに社會的に意義のあるはたらきを持つた建物だと思はれます。

○

小劇場の道具などについては、歐洲の各都市で盛に演出されて居るレビューに使用して居るものは主として垂幕應用のもので、それは最も便利だと思ひます。電氣の照明に相當な工夫があれば、單に垂幕だけでもかなり複雜なそして生き〳〵した立派な効果が表現されると思ひます。日本式の横長舞臺ではどうしても垂幕だけでは間がぬけます。いやでも兩脇に不自然な形ちの二重にも三重にもの高い塀をつくらねばなりません。ことに多くの演技で見ても舞臺でほんとうの働きのある所は兩花道の間であつて、その左右は出がたりとかはやし場のためにのみ存在の理由あるに止まるとさへ思はれます。せめてあの左右のものだけでも取り去ることが出來れば日本の舞臺間口もよほど立體的に成るのでせう。この間ニューヨークでロキシー劇場を見た時舞臺前のオーケストラが有つて、ほかにちようど舞臺わきの日本で云へば貴賓席にあたる場所の中段で演奏や出語りをやつて居りましたが、日本の劇場に於てどうでも出語りや、はやしの場所を客席に向つて、出すことが必要であるとすればロキシー式にするとよいかと思ひます。

○

道具のはたらきと演出者のうごきとの關係では巴里のリビューがすばらしいものです。そこには何ら手持無沙汰の空間や間抜けた無駄がありません。實に兩方がぴつたり統制され、そして御互を生かして居ります。道具建はそれ程込み入つた手數をかけたものとは思はれませんがものゝ形、分量、プロポーション、奥行き、殊に色彩の生き〳〵した美しさ、舞臺作業の迅速などまことに息もつかせない有樣であります。

小劇場には花道などは別につける必要はあるまいかと思はれますが、實際花道をつけることによつて觀客席が縱に大きな區劃を生ずることは劇場の平面計劃に於いてかなりな苦痛であります。一方又舞臺の延長として花道の存在は色々に複雜な意味を持つことになり距離や又は時間の上にも面白い興味を保つて居ります。ことに舞臺での演出がまだ始まらぬ前に揚幕から花道への出は、はや一種の寫圖氣でもつて觀客席全體を包んでしまつて、それだけで又とない氣分で全觀客は陶醉してしまうようの場合もあるようであります。

○

恐らく日本の劇場に於いて花道はたしかに重大義のある存在で、これのあるとないとは全く劇場としての目的に添うか或はそぐわないかとも見られる程むつかしい役目をもつて居ります。尤も飜譯物や又は花道などに重きを置かない演劇にはむしろ邪魔になる程度のものでせうが、私だけは何故か花道にかなりな執着があつて、少くとも日本の劇場から一氣に消失さしてしまうことにはとても未練を持つて居るのであります。

先般寶塚歌舞場で問題になつた銀橋と云うものは、實は私は知らないのですが、多分かつて私はローマのテアトルアドリアノでオーストリーのシュワルツ一座のレビ

ユーを見ました時、舞臺の前方のオーケストラを取りめぐらして四尺五寸幅位の一種の花道が出來て居つて、その花道を足さばきの美しいそして愛嬌のある踊子の隊列が各々ほんの薄物一枚の姿で聲高に歌ひながら潑溂たる元氣を見せてそこを通つて行くのですが、その花道を銀橋と云ふのでは無いのでせうかと思はれます。然しかゝる種類の花道は舞臺を一層觀客に接近さしてるだけで、たゞ氣分を或る程度强めるためのものとしか思はれませんし、どうも純粹の演劇には不向きのように見えますけれ共、こう云うものを常に設備して置いてたへず使用して居れば何か又異なつた氣分が出て來るかとも想像されるのであります。

○

近年主としてドイツ方面では劇場についてきわめて新奇な計劃を發表してそれを具體的のものに邁進して居ることはまことにめざましいものです。殊にドイツの各大きな都市には必ず廣大な運動場があつて、そこには野球をのぞいたあらゆる種類の運動が出來る設備がありますほかに、野外劇場もその中に含められてあるのを屢々見ましたが、それらは至極簡單なもので芝草を植えた舞臺の前に精々三四百人分位の腰掛が置いてあるだけであります。舞臺の後方は日本の生垣式の植込みがあつて野外の散漫な氣持ちから區劃をして有ります。そして野外劇場の周圍は後上りに成つて一寸小高い土手で外郭を仕切ることに成つて居りますが、そのまわりは一杯に木を繁らして森にしてあります。つまり大きな森の中に劇場があると云ふわけであります。こんな野外劇場でなら日本でもすぐ出來ると思ひます。學校の運動場の片隅にでも利用出來たらと思うて居ります。尚運動場の中には野外劇場の外に野外舞踏場がありますが、これとて幾分盛り上げた圓形の土壇に芝草を植えてあるに過ぎない簡單なものですが、なにかそう云ふものを一寸見たゞけでもほがらかな健康美を想像させられます。

○

ニューヨークのパラマウントとかロキシーとか先年出來たジークフリードとかはすべて建築が米國式所謂大衆的になか〳〵大げさなもので、收容人員から見ても寶塚歌劇場の二倍或は二倍半もあらうかと思はれますので、たゞ澤山の人數を收容する建築として見れば申分のない設備を充分發揮して居るものでせうが、然しトーキーや寫眞はまあよいとしても、一度あのオーケストラや、男女俳優の唄や、踊り子の團體ダンスを見ると巴里などで見たものと比べて見て全くものにならつて居ないように私などにも感じられます。客席があまり多數あるために出し物がすべてそれに比例して大げさになつて來て、むしろ馬鹿〳〵しい位だらしのない程度にまで墮落して居るように見えるのであります。身振りなども多くの人に印象を與へなければならない爲には、より以上に誇張して來なければならなくなつて、それらが不自然なそして無理な表現となつて來るのでせう。オーケストラのコンダクターだつてあのタクトの一見馬鹿げた大けさな身振りでまるで何か蕃的な體操をして居るように見えます。スポットライトにしてもたゞむやみにけば〳〵しい色の光線を投げとばして、なんら藝術的表現になつて居ないようであります。

○

こう云ふものが演出されることになると至上の目的としての藝術價値からだん〳〵遠のいて來ることになるので、一時にあまり多人數を收容する劇場はよほど以上の點で考慮すべきものだと思はれます。巴里や伯林や羅馬などの歐洲の各都市にはカフエーでオーケストラを演奏する所がたくさんあります。中には僅か三四人で演奏して居る場合もありますが、それでもアメリカなどゝは比較にならぬ程音樂的だど思はれます、いそがしい生活者の大衆をあいてにすることになると音樂なども自然アメリカのようにジヤズでなければこたへないことに成るのでせうと思はれます。

一面アメリカの文化は歐洲のそれに比し極めて若いし又新らしいので、それだけ精氣に充ち又將來を期することが出來るのでせうが一面歐洲のように洗練された巧致や藝術味の深さには到達して居ないのはやむを得ぬことかも知れないのでせう。ことに日本に最も接近して居るアメリカ西部地方の文

化は同じアメリカの東部に比して大分懸隔があるので、それらの低級趣味が日本に澤山はいつて來て居るのは遺憾にたへません。活動やトーキーの都と云はるゝハリウツドなどでは何を見てもさして好ましい藝術味は見出せません。あそこで評判のチヤイニズシヤターやエジプシヤンシヤターなどはたゞ外觀を見たゞけでもたまらない不愉快さを感じます。無論かゝる種類のものばかりでは無いとしても、多くの場合低級趣味に墮してしまつて居るものを澤山見せつけられるのであります。

○

私は敢て大衆的の劇場として大劇場にしたがよいとか、又は寄席式にしたがよいとかの提案は持たないのでありますが、大きさに於てどうと云ふことで無しに本質に於て可成りな程度に整つた劇場を欲しいと云ふ念願を持つて居るので、かゝる場合には大劇場よりむしろ小劇場の方が實際的の仕事として幾分手取早いと思はれるのであります。私は今まで劇場方面の建築に二三從事した經驗はありますが、いつでも注文者側からの要求を取入れての、たゞ云はゞ容器の圖面をかいたゞけで、本質的に深く考慮しなかつたことは汗顏にたへません。のみならず、先般の外遊もとかく引込思案の私には專門的に突込んだ研究も致さなかつたのでまとまつた好資料を御土産にすることも出來ず、全くの漫筆で申譯けが無いのであります。

（十月十五日）

劇場及び映畫劇場の音響

佐藤武夫

（一）緒言

發聲映畫の出現が、映畫製作上の技術に著しい變革を齎したばかりでなく、その影響は及んで吾人の建築技術の上にも來て居るのである。即ち劇場建築に於ける音響問題之れである。從來の一般の劇場と雖も音響の問題は決して等閑に附せらるべきものでなかつたが發聲映畫を主として上映する映畫館にあつて、音響の問題は俄かに更にその重要性を高めたかに見受けられる。米國ではじめてトーキーが各映畫館に上映され出した頃の話だが、從來の無聲映畫に對して問題のなかつた幾多の劇場から音響技師の事務所に向つて每日のやうに電話が懸つて來た。「俺の劇場の音響を何とかして呉れ」と。發聲映畫にとつて劇場の音響の適不適は致命的條件だからである。

發聲映畫の擡頭が又ラヂオと相俟つて音響學の進歩を刺戟し始めた。こゝ數年來、應用音響學の活氣はめまぐるしい勢である。殊にアメリカに於けるこの方面の研究は他學界に見られぬ盛況を呈してゐる。筆者等每月の各學術雜誌或は報告書を入手して之れを讀了、消化するだけでの暇もない始末である。

吾國に於いても今日一流の映畫劇場では發聲映畫を主として上映し始めた。そして人々は從來の一般の劇場と發聲映畫劇場との間に音響的相異性のある事を認め出したやうである。事實其處には重大な相異が在るのである。在來の劇場音響學は、更に發聲映畫劇場の音響の特殊性にまで領野を展げ、其處に新しい課題を見出した。

筆者はこゝで室內に於ける音響現象を聽感の上から解剖し、終りに在來の一般の劇場と、發聲映畫劇場との間に於ける音響特性の相異を述べて見やうと思ふのであるが、問題の性質上多少專門的に根本的な方面から叙述を進めなくてはならないかも知れない。出來るだけ平易に書いて見度いが、それでも難解に見える點がありとしたら筆者淺學若輩の然らしむる處と御寬恕ありたい。

（二）聽感要素と明瞭度

一般に室内に於ける聽感は何によつて決定されるか。之を大別すれば

(一) 音源の性質
(二) 騒音の存在
(三) 室に固有な音響特性
(四) 聽者の聽覺機能

となる。(四)の項は先づ本問題の外にあるとして、前三者は室内に於ける聽感を決定する重要なる要素である。而して(三)の室に固有なる音響特性こそ劇場音響學が取扱ふ所ろの中心問題なのである。即ち室の大きさ、周壁の仕上材料、内にある什器の性質、及び室の形等によつて同一の音源を作用せしめても、室内の音響狀態が變化するのである。具體的に云へば、それ等の條件に從つて、室内の音量(Loudness)と餘響(Reveberation)が變化するのである。ロスアンゼルスのカリフォルニア大學教授クヌヅスン氏は、室内の聽感は次の諸要素によつて決定さるゝとなした。

一、音量(Loudness)
二、餘響(Reverberation)
三、騒音(Noise)
四、室の形(Shape)

而して、之等の諸要素によつて結果さるゝ室の聽感明瞭度は、言語音を聽く場合次の式にて表はさるゝと云ふのである。

言語明瞭度(Percentage Articulation)$=96K_1K_2K_nK_s$

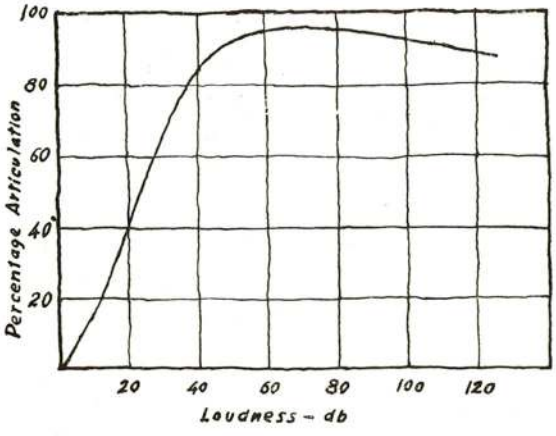
茲に 96 といふは、最も完全な狀態に於ける言語明瞭度試驗の常數を示して居り、K_1 は音量による減率、K_2 は餘響による減率、K_n は騒音による減率、K_s は形による減率である。即ち怎那完全な狀態であつても、言語明瞭度は九六%が最高であり、室内の諸條件によつてそれが段々減少する事を表示したものである。

音樂に就いては明瞭度といふ事は一寸言ひ悪い。それは著しく主觀的であり、且つ數量的に決定し難い問題だからであるが、略々言語明瞭度に近い性質を有つて居ることだけは明かである。以下右の聽感上の諸要素について述べて見やう。

(三) 音量

言語明瞭度に對する音量(ラウドネス)の効果については、ベル・テレフオン・ラボラトリーのフレッチヤー博士の信頼すべき研究が發表されて居る。第一圖を參照され度い。これに見て、音量と言語明瞭度との間に一定の關係がある事を知るのである。音量の單位はデシベル(Decibel 單に略して db)が一般に用ひられて居る。零デシベルといふのは、正常の耳を有つた人に聽きとれなくなつた音であると心得て戴ければよい。第一圖から見ると、七〇デシベル位の音量が最も

第一圖



吾人に良き明瞭度を與へて居り、五〇デシベル以下は急激に明瞭度を減じ、八〇デシベルを超えた大きな音は却つて又明瞭度を下げて居る事が判る。吾々が普通對座して會話を聞くときの音は四〇デシベル乃至六〇デシベル位である。七〇デシベル程度に於いて明瞭度は最高であり、九六%を示して居る事は、前にも述べた通りである。

所で劇場や大きなホールの内で演說を聽く場合、音量は聽き手の位置によつて異るが、何れの場所にあつても先づ三五デシベル以上の刺戟を聽者に與へるやうでなければなるまいとされてゐる。一般に人々は騒々しい場所では大きな聲を出し靜かな場所では小さい聲で會話すると同樣に大きな室で多數の聽衆を前にすれば大きな聲を張り上げ室が小さく聽衆が少なくなれば又それに應じて小さな聲に落すといふ風に、相手の聽覺を考へて自分で自分の音量を調節するのが普通である。併し乍ら人間の音量は、その人々によつて異り、又制限があるから、室の容積が大きくなり、聽衆が非常に多くなるやうな場合には到底滿足すべき音量

を聽者全體に行き亘らせる事が出來ない。其ときには電氣擴聲器を用ひて音量を增幅するのである。

が先づ今日の一般の劇場、千人乃至三千人程度の劇場では斯様な增幅裝置を有たずとも他の色々な工夫によつて、原音の補强を圖り略々滿足すべき結果が得られるのである。即ち室の形の工夫と、餘響を適度に調節する事によつて、又妨害となる騷音を出來るだけ低下させる事によつて達し得られるのである。

（四）形の問題

劇場の內部の形の問題は二つの意義に於いて充分考究さるべきである。

一、特殊なる有害現象としての反響（木魂）（Echo）の生じないため。

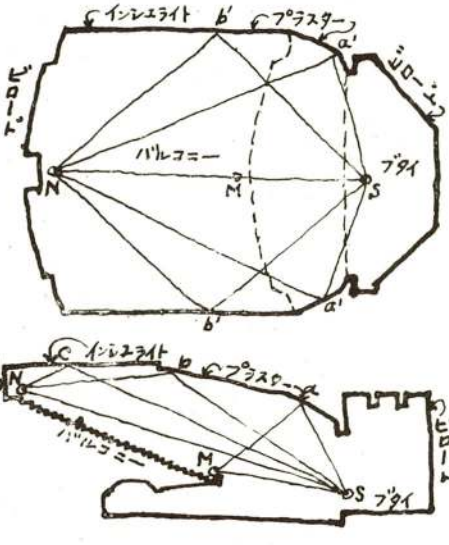
二、反射性を利用して原音を補强するため。

一は消極的な意味に於いて今日迄もよく論ぜられた事であるが、二は積極的なる意義に於いて近時漸く重要視さるゝに到つた。即ち前者は反射音が集中しつゝ直接音よりある限界以上に遲れて聽者の耳に達する場合の現象であつて、天井、壁等の形が大きな曲面を爲す場合に起り勝ちであり、殊に室の大きさが相當大きい場合に於てこの危險が屢々ある。後者は壁や天井から反射する音を以つてある時間的限界以內に於いて直接音を補强し、直接音が距離の二乘に逆比例して遞減するのを償ふのであつて、これは非常に効果がある。殊に大きな劇場で、後方の席は兎角音量が不足になるが、この方法によつて僅かでも音量を增し得る事は明瞭度に於いて著しき効果が得られるのである。例へば東京市日比谷公會堂に於いてはその天井壁等を斯様な意圖を以つて計畫されたため、（第二圖參照）M點に於いて直接音に對し八・一%の反射音の音量貢獻があり、N點に於いては實に七七%の反射音の音量貢獻があるのである。若し、直接音ばかりで二〇デシベルの感覺がN點に與へられて居るものとすれば反射音の補强によつて三五デシベルに達する事が出來ることを示して居る。これは單に一次の反射音のみの貢獻を計算したものであるが、事實はもつと澤山の反射音貢獻がある筈だから、これよりも以上の音量となつてN點は惠まれるだらう。

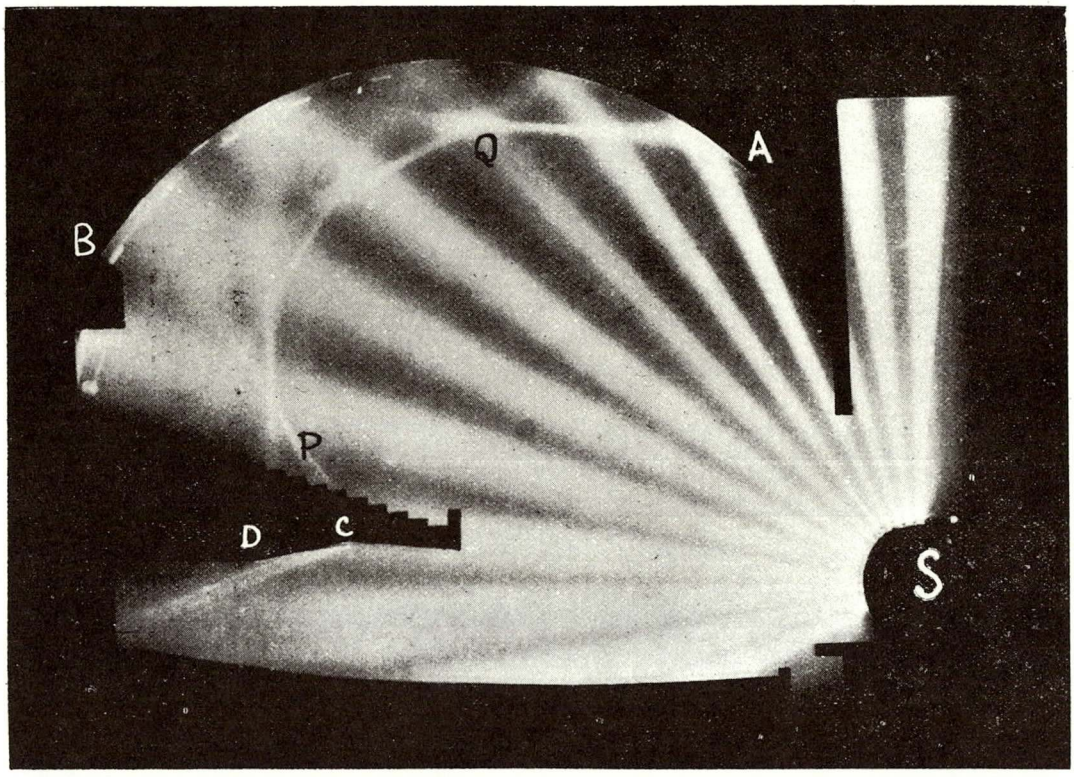
反射音の積極的利用は、右に述べた通り音量の增大のためであつて、メガホンを運動會あたりで用ひるのと同意義であるが、このために音質を多少損ねる事は否み難い。併し乍ら音樂を除いて演說に對しては、この音量增大の貢獻は音質の變歪を相殺して尙餘りあるのである。

斯の如き形の問題に就いて、如何なる方針によつて設計を進むべきかに就いて茲に詳述する餘裕がないが、筆者がこの問題について多少研究を進めた實驗の結果を寫眞としたものがあるから揭げておかう。（第三圖）この實驗は煙箱法と呼んでゐるもので、實驗しやうとする劇場の斷面を金屬鏡で作りこれに煙を充した箱の中に入れて音源に相當する處に光源をおき、その內の反射の性質を調べるのである。音の反射の性質が光のそれと同樣だからである。この寫眞に示したものは東京市に在る某大講堂の縱斷面內の實驗であるが、その天井に巨大なドームを有つてゐるために、棧敷の中程に著しく强大な反響を感ずる點があることを示したものである。これに對して第四圖の方は同樣の實驗である講堂のプランを調べたもの略々理想的に音束が分布されてゐる設計について行つたものである。即ち前者は惡き形態の例

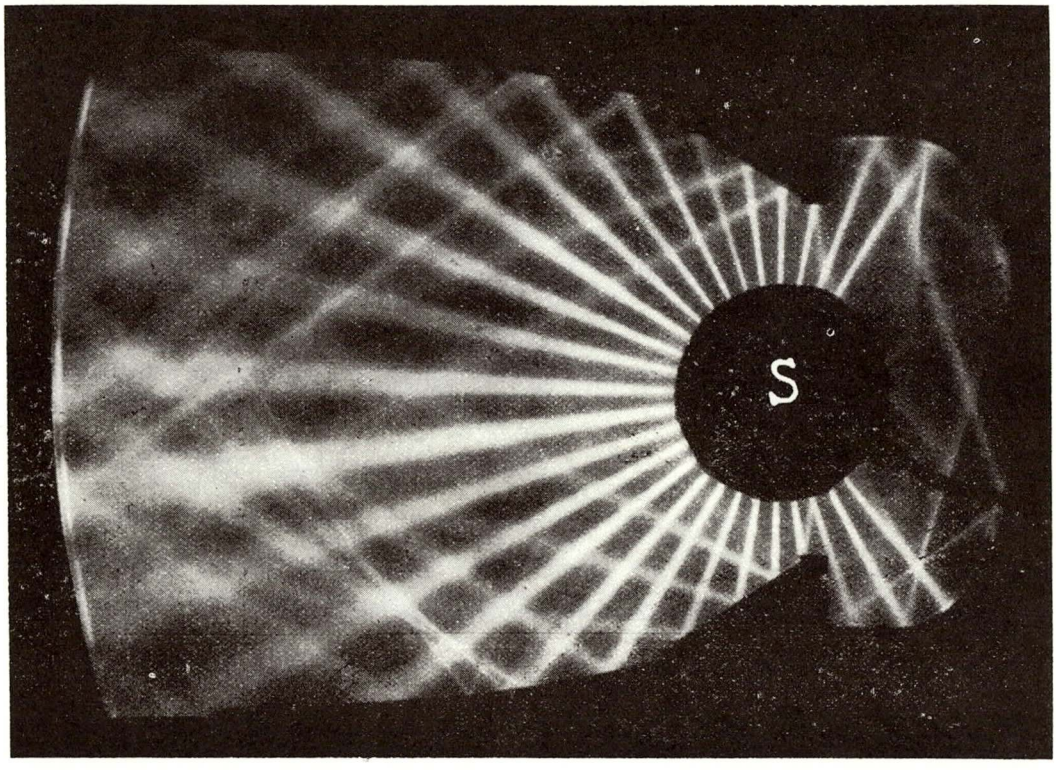
第二圖



第　三　圖



第　四　圖



であり後者は良き形態の例であるのである。

形の問題に關して、如何なる形態が最良であるかといふ質問をよくうけるが、單に音響の上から最良の形態と云ものが極められるものではない。最良の構造といふものが考へられないと同樣に。即ち他の要求と條件につれて夫々の場合について最良の形態が考へられるのであつて、其處に形態設計の面白味があるのである。又建築家にして初めて自由に大膽に全體の設計と相俟つて手腕を振ひ得るものなのである。歐州の新進建築家がその設計にアメリカ建築家の企て得ないやうな取扱ひを示してゐることなど、この間の消息を物語るものであらう。

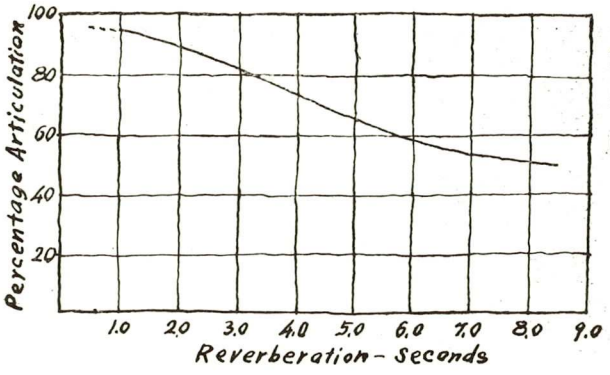
形態の設計に於いて同時に考慮されなければならぬ點は、各面の仕上材料の撰擇布置の問題である。有効なる反射面に音の反射率高き材料を當て、有効ならざる、乃至は有害なる反射面には吸音率高き材料を當てる處の計畫である。これもその場その場に當つて臨機應變に設計されなければならぬが概して發音點に近き方を反射性強き材料を以て仕上げ、漸時發音點より遠ざかる方を吸音性高き材料を以て仕上ぐるのが原則であつて聽感上有利である。

（五）餘響の調節

室の大きさと周壁の仕上材料又はそのうちにある什器等の性質による吸音力とによつて室内の餘響が異る事は已によく知られたことである。が、音源の大きさによつて餘響が變化することは兎角忘れられ勝ちのやうである。と今一つ、音量と餘響の間にもある必然的關係のある事がよく知られて居ないやうである。

餘響調節が、如何なる理由で必要なのかといふ問題に就いては、この間の理由を闡にしてかゝらないとよく判らない。

音のよく響く室、即ちよく音を反射する室では又餘響も必然永い。即ちよく音を反射する部屋では音量も增大するが、餘響も永くなるのである。一方に利益があるが、一方に妨害となるのである。兩者の間には或る限界があつて然るべきである。前記クヌヅスン教授はこの問題を言語明瞭度試驗によつて解決された。第五圖を見ていたゞき度い。この圖表は夫々餘響時間（音のエネルギー密度が百萬から一にまで減衰するに要する時間であつて、單なる餘響ではない。餘響時間といふは學術上の想定である事を注意あり度い）が異るいくつかの室に於いて試みられた言語明瞭度試驗の結果であつて餘響時間が增大するに從つて各秒毎に明瞭度が約六%位宛減少してゐる事が判る。尤もこの圖表は七



第五圖

〇デシベルの音量を何れの室に於いても保たしめた場合に訂正されて描かれたものである。併し實際にあつては大いさの異る室に於いては音量は決して一定しない。今若し室の大いさによる發音者の音の出力を一定とし夫々の室の大いさに對して生ずる餘響と言語明瞭度との關係を計算すれば第六圖の如くなるとクヌヅスン教授は提示した。即ち小なる室は大なる室よりも一般に明瞭度宜しく、又夫々餘響が增大するにつれて明瞭度が惡くなる事を示してゐるが、興味あるは何れもその明瞭度の最高値が一秒附近にあり、室が大きくなる程その峯が右に寄つて來る事である。言ひ換へれば、各曲線の縱軸に於ける最大値が横軸に於いて室の大きくなるにつれて大きくなつてゐる事である。更に判り易く云へば、室が大きくなるにつれて餘響が稍々增大する程、明瞭度が却つて增すといふ事實を見るのである。

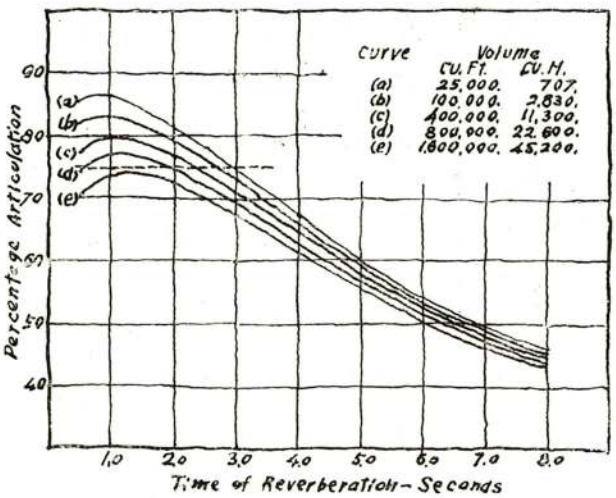
斯の如く餘響が室の大きさにつれて變化するとき、最大値の明瞭度が得られると云ふ現象に於いて、適度の餘響といふ問題が唱へられ

るのである。前にも述べた餘響の增大につれて音量が增大し、ある限度までは餘響の妨害を相殺して明瞭度を增す事實を茲に明に立證する事が出來る。ところでこの圖表の各曲線の頂點は點でなく相當平で幅がある。この事は適度の餘響が夫程峻嚴でなくある程度の許容すべき範圍がある事を示して居るのであつて、劇場や講堂の設計に當つて吸音力の取扱ひに際してこの許容し得べき範圍內に聽衆の多少による餘響の變化を收め得るやうにしたら宜しい事を暗示してゐる。

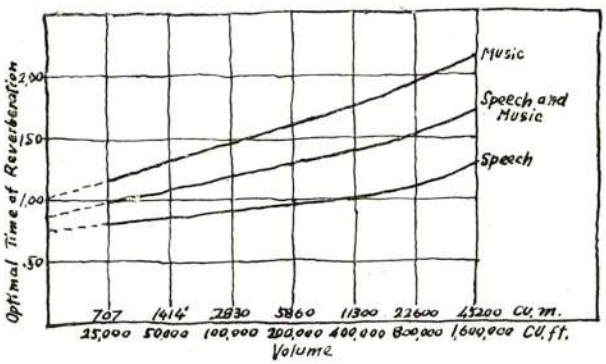
適度の餘響の問題は、已にワトソン教授、リフシツツ教授等によつて經驗的に或は理論的に取扱はれて來たが、クヌヅスン教授の明瞭度試驗によるデータは最も信賴すべきであらう。第七圖は室の大きさと、夫々に適度なる餘響時間との關係を示すもので、最下の曲線はクヌヅスン教授の前揭第六圖の各曲線の最大値を結んで得たものであり、演說に對する適度線である。上の曲線は、ワトソン及びリフシツツ教授の提示する音樂に對する適度線、中間の曲線は兩者の平均をとつたもので、音樂と演說の双方に妥協した適度線が示されてある

次に、演者の音聲の出力が異る場合、その結果室內の音響と餘響に變化を來し明瞭度に關係する事實に對してもクヌヅスン教授は第八圖を提示した。各曲線は圖中の書き入れにもある通り、音聲の出力の異つた夫々の場合であつて、聲の小さい人に對しては明瞭度が一般に少なく、その音量を增さしむるために稍々長目の餘響が望まれ、音聲の出力が大きくなるにつれて明瞭度は增大し、餘響はそれ程必要でなくなり、擴聲器を用ひた場合、殆んど餘響がない方が明瞭度が高い事を明かに示してゐる。この事實は後述する筈のト

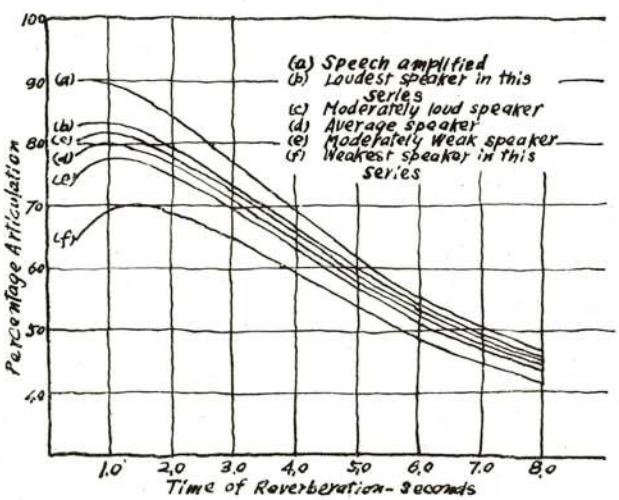
第 六 圖



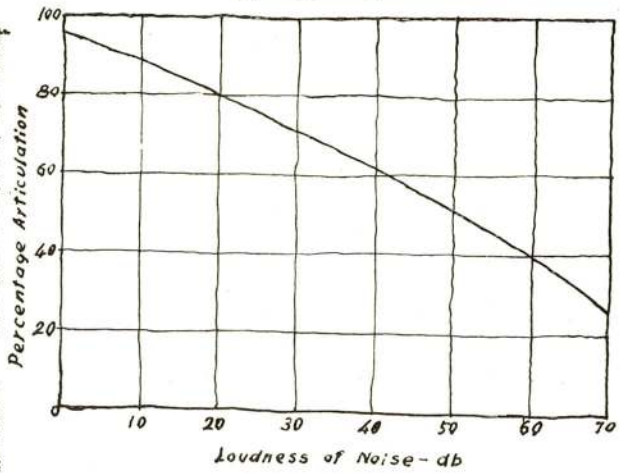
第 七 圖



第 八 圖



第九圖



で夫々の騒音度に對して爲された明瞭度試驗の結果である。即ち騒音度零のとき明瞭度は九六%を示し、以下騒音度を增す毎に略々直線的に明瞭度を減じてゐる事が認められる

靜かな場所にあり、且つよく外界と絶緣された防音構造をもつた室内では騒音度は五―一〇デシベル位であるから、明瞭度に著しい影響を與へないが、若し騒々しい場所にある劇場や講堂等ではこの妨害が頗る著大である。折角大聲を出し、形を考慮し、餘響を適度にして音量の增大を圖つても、そこにある騒音度が高ければ之に殺されて明瞭度は著しく低下するのである。雜閙のうちにある劇場等が防音構造に於いて忽せにしたゝめに音響効果の擧がらない實例を屢々見るのである。筆者が東京市内の各劇場講堂について内部の騒音を測定したものによると、大きいもので三〇デシベルに達する騒音度を保持したものがあつた。これでは如何に餘響調節、形態の考慮に力を入れても水泡である。

（七）トーキー劇場の特殊性

前項まで説明し來つたところによつて、一般の劇場講堂等に於ける音響現象を聽感の上から理解さるゝ處があつたと思ふ。聽感上の明瞭度を上げるために如何なる現象を吾人は利用するのであるかといふ問題に沿つてその概要を記したのであつた。

續いて發聲映畫劇場が、如何なる意味に於いて一般の劇場と音響取扱ひに相違を有つかに及ぼうと思ふ。具體的な設計指針にまで觸れられないにしても、新しく擡頭した特殊問題が、一般の劇場音響學と關連して理解さるゝ處あれば幸せである。

前にも述べた如く發聲映畫の出現が映畫劇場の音響問題に新たな領野を開いたのであつて、即ち前者では人とか樂器とかから發生せられたその儘の音を處理するのであるが、後者では一旦それを記錄し更に電氣的に再生したものを取扱ふのである。即ち電氣擴聲器が音源となるのであつて、この種の音源はその位置が一定の位置に固定され且つその出力を自由に電氣的に調節し得る特徴を有つてゐる斯る音源の優越性は必然的に劇場の音響的特性に影響し、此處に發聲映畫劇場の特殊性を生ずるに至つたのである

一般劇場にあつては、その大きさの小さいものは別として大きいものでは音源自體の出力に制限があるから、その不足を補ふための一法としてその形態に特に考慮が費されるが、トーキー劇場では音源の出力を自由に高める事が出來るし、又發聲器の指向性を利用して劇場の形に應じて音を均等に分散させる事がある程度迄出來る。然し音は距離の二乘に逆比例してその强度を弱めるから、之を補ふためには形態上の考慮を忽せにすべきでない。現在發聲器の位置はスクリーンの後部におかれるのが普通であるが、最近獨乙では之れを天井近くにおく方が距離による音量の不平等が尠くて良いとする說が唱へられてゐるが、視覺的印象と聽覺的印象とが方向を別にする事は心理的に面白くないから遽

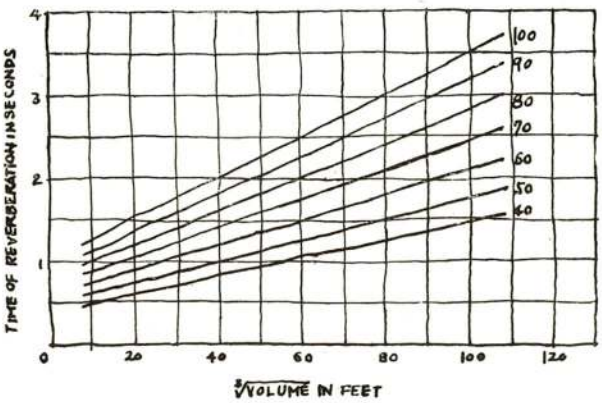
キー劇場に對して注目さるべき事柄である。

尙クヌヅスン教授は何れの場合に於いても、室内での明瞭度が七五%以上を保つべき事を推奬して居る事を附記しておかう。

（六）騒音の存在

騒音の存在する場所で聽感が妨害される事も周知である。この數量的關係も同じくクヌヅスン教授によつて完全な研究が爲されてある。第九圖は七〇デシベルの音量

第十圖



なる餘響を已に含んでゐるのであるから、劇場で再生される場合には二重の餘響効果を呈する事になつて餘響は愈々増大するに至るのである。其處で發聲映畫の出現當初は、一般の劇場よりも適度の餘響を小さくする事が唱へられたが近頃では出來るだけ室内の餘響を絶無に近からしむる事が、撮影の場合の豫期する藝術的効果を完全に純粋にするものとの見解のもとに提唱され始めた。斯の如く餘響を絶無に近からしむることは、室内の吸音力を絶大にする事を意味し、從つて野外に近き條件となる事を目標とするのである。例へば野外の場面の場合、そこで會話する人物の會話が全く餘響なく記錄されてゐても、それが劇場内で再生されて餘響を伴つて來るが如きは不自然である。穴倉の内のピストルの音はガン〳〵鳴り響く自然の狀態に於いて記錄され、それがその儘劇場内で再生されゝば充分である。といふ意味なのである。音響の自然的表出に於いて、トーキーは一般劇場内に於ける演出より斯の如き優越性を又一つ加へたのである。

一般の劇場が音量の増大のために形について苦心し、餘響を利用せんとしたに較べて、トーキー劇場は音源に於いて易々として音量を増大加減し得るばかりでなく、上述の如き音響の自然的寫實的効果を獲得し得るのであつて、茲に兩者の間に大いなる相違を見出すことが出來る。

扨て其處でトーキー劇場に於いて問題となる所のものは、音源の出力を如何にすべきやである。之に對して最近ベル・テレフオン・ラボラトリーの研究員ウルフ氏は次に略記するやうな考へ方によつて音源の出力を決定せんと試みてゐる。

トーキー劇場では餘響を絶無に近からしむるといふ事を前提として、從つて音源たる擴聲器が負擔する任務は、その直接音乃至せい〳〵一回の反射音が聽衆面をカバーすることであつて、この面に平均八〇デシベルの音量を貢獻せしめるものとし、擴聲器の最大出力を算定するのである。

茲に於てか、トーキー劇場では建築家の任務は著しく輕減せられたわけで、出來るだけ吸音力高く、且つ特殊の反響現象を生ぜざる而も積極的に有効なる反射面を有する形態を計畫する事が殘された課題となるのである。

(八) 結　論

以上數項に亘つて述べたところを簡約し、數言を加へておかう。

一般の劇場では、人及び樂器等が音源となるのであるから、その音響出力に一定の限度があり、音量を出來るだけ上げるためには、形態上の愼重なる設計と、餘響をある程度まで利用して効果を増す適度の餘響を附與しなければならぬ。

之に反してトーキー劇場では音響の出力を自由に増大し得るから餘響による助力は不要であり却つて藝術的効果に邪魔である。形態の問題は室内の吸音力が増すに從つてその重要性を高める（ラヂオの放送室等も近頃形の問題が重視さるゝに到つてゐる）。

形として理想型は音響の點からだけで決定出來るものではないが先づ今日の型としては第十一圖に示すやうなものが最も有効に反射面を有つたものとして推奨出來や

う。之れに必ずしも據らねばならぬといふのではない。

室内の餘響を計算するに當つて從來のセバインの公式は殊にトーキー劇場の如く小さい餘響を保たじめねばならぬものに對して誤差が大きくなるから、新しい公式を用ひて計算さるゝ事を希望する。即ち

舊公式

$$T = 0.05 \times \frac{V}{A} \quad \text{(foot system)}$$

新公式

$$T = 0.05 \times \frac{V}{-S\log_e(1-a)} \quad (=)$$

S…室の表面積

A…室の全吸音力

V…室の容積

$$a = \frac{A}{S}$$

第十二圖は兩公式で計算した場合の差を示すものである。

騒音の存在は兩者何れに對しても有害であるから、外界との遮音を絶對に必要とする。即ち防音構造の手法を取り込むことが緊要である。

トーキー劇場の音響に關して最近現はれた主なる文獻を特に結尾に添へて御參考に供する。

F.R. Watson, Acoustics of Motion Picture Theatres. (Transaction of the Society of Motion Picture Engineers, Vol. XI, No. 32, 1927)

S.K. Wolf, Theater Acoustics forSound Reproduction. (J. of the Society of Motion Picture Eng. Vol. XIV, No. 2, 1930)

Academy of Motion Picture Arts and Sciences, Sound Recording and Reproduction for Motion Pictures.

S.K. Wolf and W.J. Sette, Acoustic Power Levels in Sound Picture Reproduction. (J. the Acoustical Soc. of America, Jan., 1931)

同上、Factors Governing Power Capacity of SoundReproducing Equipment in Theatres. (J. Soc. Motion Picture Eng., 15, 1930)

E.W. Kellogg, SomeNew Aspects of Reverberation. (J. Soc. Motion Picture Eng., 14, 1930)

第十一圖

斷面圖

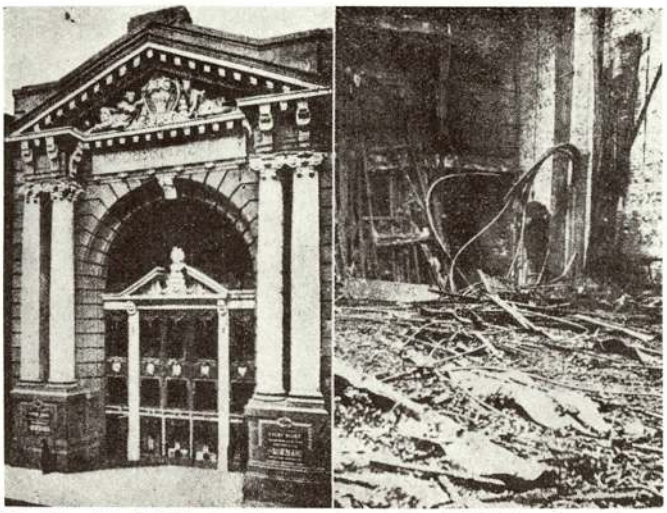
平面圖

第十二圖

劇場及映畵館の火災に就て

菅野久一

劇場及映畵館の災害には火災に因る燒破と、腐朽風害又は地震等に因る損壞との二形態があるが、これらの災害が若し上演中に勃發したならば、單なる建築物の被害に止らないで、或は劫火、或は倒壞、或は混亂の爲に觀客の燒死傷や壓死傷を併發し、歡樂愉悅の殿堂は忽にして阿鼻叫喚の修羅地獄に化する虞があり、就中日常惹起し易い火災に於て然りである。從つて劇場及映畵館に於る火災防止は、建築警察上は固より保安警察上忽諸に附し得ざる重要事案である。殊に時代の寵を恣にして居る映畵館の如きは、フイルムに本づく出火頻度極めて大なるものがあるから、其の防火對策の緊要頗る切なるものがある。



第一圖　北米合衆國シカゴ市のイロクイス座の火災狀況、左は災前の正面、右は災後の內部（一九〇三年十二月）
耐火構造であつたから外部には異狀なかつたが、內部は全燒して六百二名の死者と二百五十餘名の傷者とを出した。

一、我が國に於る劇場及映畵館の火災概況

我が國に於て最近六ケ年（自大正十四年至昭和五年）間に發生したる劇場及映畵館の火災を新聞紙の報ずる所に依り集計すれば

	大正十四年	大正十五年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年	計
劇場	六	七	四	二	六	二	二七
映畵館	二九	一五	二二	二一	二四	三四	一四五
合計	三五	二二	二六	二三	三〇	三六	一七二

備考（劇場欄の數字には映畵館との區分明かでないものも含む。）

であつて、これらの火災の內死傷者を出したものを列記すれば次の通りである。

大正十四年

○一月二日　天滿倶樂部（大阪市）負傷十九名
○十月四日　第一朝日館（大阪市）負傷一名
○十月九日　電氣館（新潟縣新津町）死亡一名、負傷多數
○一月三日　縱樂座（京都府舞鶴町）負傷一名
○三月三日　大黑座（廣島縣福山市）死亡二名
○四月五日　富士館（京都市）負傷三名
○十月二十一日　叶座（樺太大泊町）死亡一名
○十一月十四日　パーク劇場（大阪市）負傷一名

昭和三年

○三月二十九日　北野館　大阪市）負傷三名
○四月三十日　有樂座（愛媛縣松山市）

大正十五年

○三月二十日　林座（香川縣下高瀨村）死亡一名
○四月二十日　甲陽歌舞劇場（兵庫縣甲陽園）負傷十九名
○十二月五日　桐生キネマ（群馬縣桐生市）負傷十數名

昭和二年

負傷一名

○十月十六日　映畫クラブ（熊本縣八代町）死亡六名

昭和四年

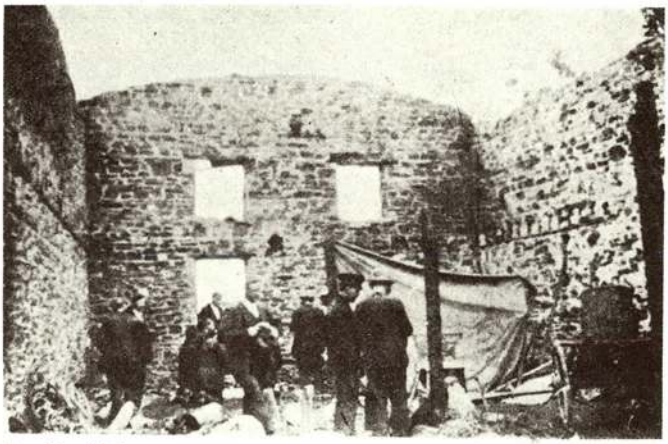
○六月二十七日　世界館（福岡縣八幡市）負傷三名

昭和五年

○一月六日　岡谷キネマ（長野縣岡谷町）負傷多數

○三月七日　二葉館（神戸市）負傷二名

○三月十日　陸軍營舍内假設映畫場（朝鮮鎭海）死亡百六名



第二圖　英國アイルランド、ドラムコローガーに於る映畫館の燒跡（一九二六年九月）

約五十名の燒死體が寫眞後方に見ゆるカンバスの後に積重なつて居た、出入口の近くに映寫機があつたこと、窓には鐵棒が嵌められてあつたこと、階段が狹かつたことが死者を出すに至つたのである。

○三月二十一日　原市座（群馬縣原市町）負傷十六名

○五月十二日　昇座（北海道夕張町）死亡三名、負傷二名

○八月十七日　寶永座（三重縣尾呂志村）負傷三名

尙本年に入つてから九月末までの出火件數は十四件であるが、其の主なるものは

○五月十二日　假設映畫場（北海道後志國東島牧村）死亡十六名、負傷二十二名

○五月十六日　假設映畫場（群馬縣金古町）死亡十三名、負傷五十六名等である。

二、外國に於る事例

歐米其の他の諸國に於る劇場及映畫舘火災の件數に付ては明確なものを擧げ得ないけれども北米合衆國の五大都市、ニューヨーク市バルチモーア市、フイラデルフイヤ市、サンフランシスコ市及ボストン市に於る最近十ケ年間の出火件數を左表によつて窺へば其の一斑を察知し得るであらう。

都市＼年	ニューヨーク市	ボストン市	バルチモーア市	サンフランシスコ市	フイラデルフイア市
一九一八年	……	……	……	三	……
一九一九年	四二	四	四	五	〇
一九二〇年	五一	七	六	三	二
一九二一年	六二	二	一四	一三	六
一九二二年	六七	二	一二	一一	七
一九二三年	六七	六	四	一二	一三
一九二四年	七四	六	一四	一二	一〇
一九二五年	九五	四	九	一一	一三
一九二六年	六四	五	六	八	一三
一九二七年	八九	一	二	一一	二〇
一九二八年	六一	八	二〇	……	一一
合計	六七二	四五	九一	八九	九〇

又、死傷者を出したる火災に付ては米國々民防火協會の調査によれば千七百九十八年より千九百三十年までの間に於て七十四件に及び、この内五十名以上の死者を出したものを摘記すれば次の通りである。

○千八百十一年十二月　北米合衆國ヴアージニア州リッチモンド市、サウス座（舞臺に於る燭火より出火）死者七十二名

○千八百二十九年二月　露西亞、セントピータスブルグ市、レーマン座（舞臺に於るランプより出火）死者八百餘名

○千八百四十五年五月　支那、廣東、支那座（室内の燈火より出火）死者千六百七十餘名

○千八百四十六年六月　加奈陀、キウベック市、ローヤル座（舞臺上のランプより出火）死者百餘名

○千八百四十七年二月　獨逸、カールスルーヘ、グランドヂュカル座（ガス燈より出火）死者六十三名、傷者二百三名

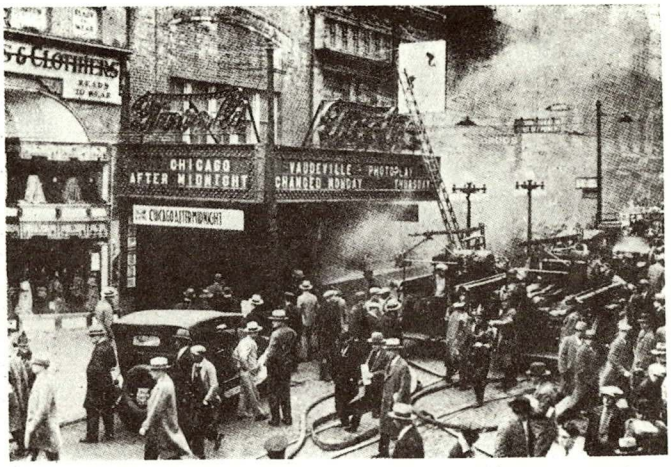
○千八百五十七年六月　伊太利、レグホーン市、デグリ・アキドフト座（舞

臺で使用の瓦斯より出火）死者四十三名、傷者百三十四名

○千八百七十六年十二月　北米合衆國ニューヨーク市ブルックリン、コンウエイ座（看板用の燈火より出火）死者二百八十三名

○千八百八十一年三月　佛蘭西、ナイス、マニシパル座（看板用ガス燈の爆發）死者二百餘名

○千八百八十一年十二月　埃太利、ウイン市、リング座（看板用ガス燈より出火）死者四百五十名、傷者無數



第三圖　北米合衆國ニューヨーク市ブルックリンに於るタイボリ座の出火現況（一九二八年四月）

火災は消防隊の迅速なる活動によつて大事に至らずして消止めたが、最初火の手が上るが否や混亂を來たして死傷者を出した。

○千八百八十三年一月　露西亞、ペルデツチーフ市、コスタリ曲馬團（厩舍の敷藁に煙草の吸殼落下）死者六百六十三名

○千八百八十三年三月　ニューオルレアンス、曲馬場（興行中にガス燈より出火）死者五十八名、傷者百名

○千八百八十七年五月　佛蘭西、バリー市、オペラコミック座（ガス燈より出火）死者百十五名、傷者六十名

○千八百八十七年九月　英吉利、エクスター市、ローヤル新劇場（開演中にガス燈から出火）死者八十六名、傷者百餘名

○千八百八十八年三月　ポルトガル、オポルト市、バケテ座（開演中ガス燈から出火）

○千八百九十二年四月　北米合衆國、ペンシルヴアニア州、フイラデルフイヤ市グランドセントラル座（開演中ガス燈から出火）死者十四名、傷者七十餘名

○千八百九十五年十二月　北米合衆國メリーランド州、バルチモーア市、セントフロント座（ガス燈の爆發）死者二十二名、傷者四十五名

○千八百九十七年五月　佛蘭西、バリー市、バザーに於る假設映畫場（フイルム映寫機より出火）死者百二十四名、傷者無數

○千九百三年一月　北米合衆國、ペンシルヴアニア州、オイエルタウン市ロードオペラ座（原因不詳）死者百七十名

○千九百三年十二月　北米合衆國、イリノイス州、シカゴ市、イロクイス座（アーク燈の火花より出火）死者六百二名、傷者二百五十餘名

○千九百九年二月　メキシコ、アカプルコ、ロードオペラ座（原因不詳）死者二百五十名

○千九百十一年五月　露西亞、ボロン某劇場（原因不明）死者百二十名

○千九百十二年五月　スペイン、フイラリール、某映畫館（原因フイルム？）死者八十名

○千九百十四年一月　瓜哇、スラバヤ某映畫館（原因フイルム？）死者七十五名

○千九百十九年六月　佛蘭西、ワランス、ローネ某劇場（原因不明）死者八十名

○千九百十九年六月　ポルトリコ、メヤギーゼ、某映畫館（電氣短絡より出火）死者八十餘名

○千九百二十三年四月　メキシコ、タキユバヤ（メキシコ市外）某映畫館（映寫機より出火）死者二十二名、傷者無數

○千九百二十四年七月　メキシコ、ベラクルツ、エスパラ座（映寫機より出火）死者二十餘名、傷者三十餘名

○千九百二十四年九月、土耳古、スミルヤ、某映畫館（フイルム引火）死者百餘名

○千九百二十七年一月　加奈陀、モントリアル市、ローリエルパレス座（フイルム引火）死者七十八名、傷者三十餘名

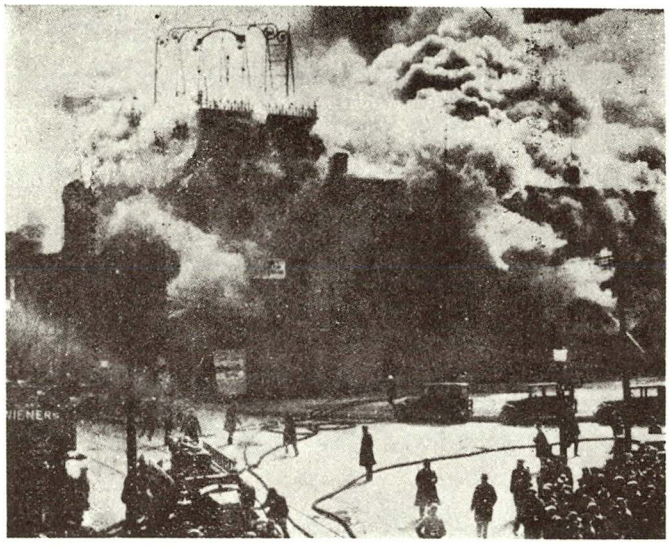
○千九百二十八年二月　伊太利、モリアゴ、某映畫館（フイルム引火）死者三十五名、傷者無數

○千九百二十八年九月　スペイン、マドリツド市、ノベダヅ座（原因不詳）死者六十名、傷者百七十餘名

○千九百二十八年十一月　露西亞、ホデネーフ、某映畫館（フイルム引火）死者五十名

○千九百二十九年三月　露西亞、ウラヂミル州、イゴルキノー村俱樂部（フイルム引火）死者二十名

○千九百二十九年十二月　スコツトランド、ペースレー、グレンキネマ（



第四圖　北米合衆國メリーランド洲バルチモーア市に於るフオリー座の火災現狀（月三年八二九一）

素人細工の爲に舞臺の電線が短絡を起して出火したと傳へられて居る。

フイルム引火）死者百七十名

○千九百三十年三月　滿洲、吉林、電影館（フイルム引火）死者七十六名、傷者無數

三、死傷者

劇場及映畫館の火災に於ては往々多數の死傷者を出すことは既記の事例の示す所であるが、我國の如きも大正十四年より昨年までの僅々六ケ年間に約百五十名の死者と二百數十名の傷者とを出して居るが、サツク氏及米國々民防火協會記錄部の調査に本づき千七百九十七年より千九百三十年に至る百三十二年間に世界各國に於て劇場又は映畫館の火災に於て其の犧牲となりたる者の概數を擧ぐれば左表の通りである。

北米合衆國		五五二六
歐洲	英吉利	一〇〇
	獨逸	四五五
	佛蘭西	三七九
	埃太利	二五一
	伊太利	
	西班牙	
	露西亞	
	其他	
亞細亞洲	土耳古	一一七九一
	英領諸國	一六七一
	かりぶ諸國	二八五
	其他	九八
合計		五六五
		四五八
		六六
		一四〇
		一四九〇
		三〇七
		三四〇九

而してこれらの死者を出したる經路を大別すれば燒死及壓死と中毒死の二種となる。即ち前者は多數の觀客が或は周章狼狽の爲、或は避難階段、安全通路、非常口等の缺如、不足、不完全若は避難誘導の不良等の爲に混亂雜踏して避難の機會を失ひ、其の極或は火傷を蒙り、或は燒死し、若は蹂躙壓殺せらるゝに至るものであつて、後者は主として映畫館若は映畫上映の劇場に往々現出するが如く、フイルムの分解瓦斯に因りて中毒死に陷るものであるが、殊に後者の場合は一時に比較的多數の死傷者を出すのを常として居る、既記のレーマン座（死者八百餘名）、支那座（死者千六百七十餘名）、コンウエイ座（死者二百八十餘名）、リング座（死者四百五十餘名）、コスタリ曲馬場（死者六百六十餘名）、イロクイス座（死者六百餘名）の如きは主として前者に屬するものであつて、概ね十九世紀前の劇場火災の犧牲者であるが後者に屬する火災は二十世紀に入りて頓に增加し、約二十五件の火災に於て千餘名の死者を出して居る。即ち死傷者の數に於ては減少せるも、件數は益々增加の趨勢にあつて、其の著名なるものはフイラリール（スペイン）の映畫館（死者八十餘名）、メヤギーゼ（ポルトガル）の映畫館（死者八十餘名）、ヴイラリア（スペイン）の映畫館（死者八十餘名）、スミルヤ（トルコ）の映畫館（死者百餘名）、イゴルキノー倶樂部（ロシア）の假說映寫場（死者百二十餘名）、ペースレー（スコツトランド）の映畫館（死者百七十餘名）、鎭海（朝鮮）假說映畫場（死者百餘名）、モントリアル（カナダ）の映畫館（死者七十餘名）、吉林（滿洲）の映畫館（死者七十餘名）等である。

今、前揭の事例其の他の劇場及映畫館火災に於る死者二千四百二十六名に付き其の悲慘なる運命に斃るゝに至つた原因を細分すれば

原因	劇場	映畫館	合計
建物關係			
不適當なる出口と混亂	六六二	四六五	一一二七
迅速なる火勢の出口遮斷	九	七〇	七九
窓よりの飛降	一	—	一
計	六七二	五三五	一二〇七
着衣關係			
燃燒フイルムが着衣に點火	—	一〇	一〇
裸火接觸により點火	一	—	一
計	一	一〇	一一
消防關係			
消防中燃燒建物に墜落	一	一	二
壁體の倒壞	八	一	九
計	九	二	一一
不詳	二四五	九五二	一一九七
總計	九二七	一四九九	二四二六

		劇場			映畫館			合計		
		觀客	其他	計	觀客	其他	計	觀客	其他	計
男		〇	一九	一九	一〇	一三	一三	一〇	一三	一三
女		六三	〇	六三	三五一	〇	三五一	三五一	〇	三五一
小兒	性別、年齡不明（主として婦人小兒）	〇	一	一	一九	一九	一九	一九	一	一九
	性別、年齡身分の記載なきもの	〇	〇	〇	一八九	〇	一八九	八五一	〇	八五一
合計		六三	一九	八二	五四一	一三	五五四	五四四	一四	五五八
		二四五	〇	二四五	一八九	〇	一八九	一八九	〇	一八九
		九二七	〇	九二七	九二三	〇	九二三	九二三	〇	九二三
合計		九七〇	一九	九八九	七二七	一三	七四〇	七四〇	一四	七五四

尙直接火災に因るに非らずして其の虛報の爲に觀客の恐慌狀態を惹起して、死傷者を出したる事例及建物の倒壞、其の他の災害によつて死傷者を出したる事例を揭ぐれば左の通りである。

○千八百八十四年十一月　スコツトランド、グラスゴー市のスター座に於ける死者十四名（出火虛報）

○千八百八十七年六月　英吉利、ロンドン市のヘブリウ・ドラマクラブズ座に於ける死者十七名（出火虛報）

○千八百九十三年六月　北米合衆國、コロンビア地方、ワシントンのフオード座に於ける死者二十二名（倒壞）

○千九百十一年八月　北米合衆國、ペンシルヴアニア州、カノンスバーグのオペラ座に於ける死者二十六名（出火虛報）、

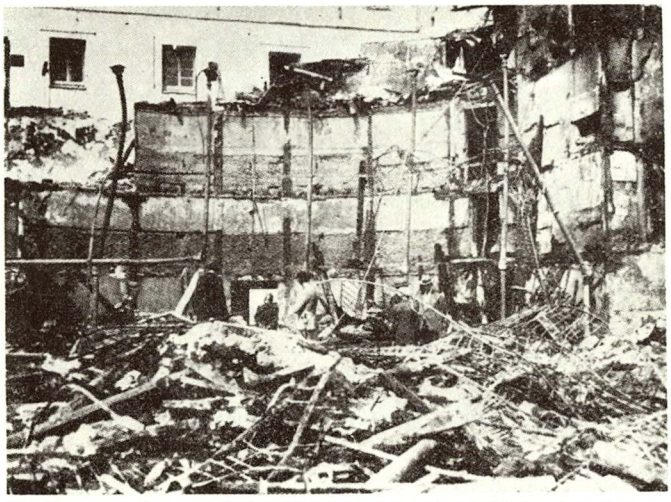
○千九百十三年十二月　北米合衆國、ミシシツピー州、カルメツトのイタリー館に於ける死者七十二名（出火虛報）

○千九百二十二年一月　北米合衆國、コロンビア地方、ニツケルのボツカー座の死者九十七名（倒壞）

四、出火原因

劇場及映畫館の出火原因として一般に認められるゝものは、第一火の不始末であつて、殊に我が國の如く跪座本位であつて暖房設備不完全なるもの多い場合に於ては、火鉢又は煙草の吸殼の不始末に本づく出火が尠くない。第二は舞臺照明其の他の目的に使用せらるゝ電氣設備の故障、例へば漏電、短絡等であるが、映畫館にあつては電燈又はアーク燈の如き高熱の光源體の爲にフイルムを發火せしむることが多い。

今、參考の爲に米國々民防火協



第五圖　スペイン、マドリツド市のフベタヅの座の燒跡（一九二一年十月）六十八名死亡。

會記錄部、マサツチユセツツ州及英領コロンビアに於て調査したる出火原因を表示すれば次の通りである。

（イ）米國々民防火協會記錄部

原因	劇場	映畫館	計
特別危害	八	二九〇	二九八
喫煙及燐寸	七九	五〇	一二九
電氣的原因	三四	二七	六一
暖爐、爐、汽罐及其のパイプ	一四	一一	二五
襤褸及紙屑	一五	七	二二
自然發火	九	八	一七
加熱裝置又は電氣照明裝置に依る可燃性物の燃燒	一〇	二	一二
重油バーナー	三	七	一〇
爐又は暖爐の飛火	七	二	九
煙突及煙道の破損又は過熱	〇	八	八
引火性液體	七	〇	七
點火せる瓦斯	三	二	五
電氣アイロン	四	〇	四
落雷	二	二	四
其の他	八	五	一三
裸火	一三	九	二二
放火	一三	二二	三五
合計	二二九	四五二	六八一
不明	一〇四	七八	一八二
累計	三三三	五三〇	八六三

（ロ）マサツチユセツツ州（一九一九―一九二八年）

原因	件數	原因	件數
喫煙及燐寸	四〇	摩擦	九
電氣的原因	一六	破損せるオイルバーナー	四
自然發火	七	加熱裝置又は照明裝置	四
		子供の燐寸弄り	三
		引火性液	三
		過熱せる抵抗器	二
		過熱せる爐	二
		煙火	二
		故意の惡戲	二
		フイルムの長期暴露	一〇
		其の他	六
		不明	三五
		記載なきもの	一四六
		合計	

（ハ）英領コロンビア（一九二四―一九二九年）

原因	件數	損害（弗）
破損フイルム	九	五三六七
喫煙及燐寸	四	七六八
裸火	三	四八六
暖爐の火の粉	二	九〇〇五
破損せる映寫機	二	六八六
電氣的原因	一	一二八一
破損せる煙突	一	八一八
爐の過熱	一	七六
不明	二	一〇九七三
合計	二九	二九四六〇

出火原因を表示すれば次の通りである。

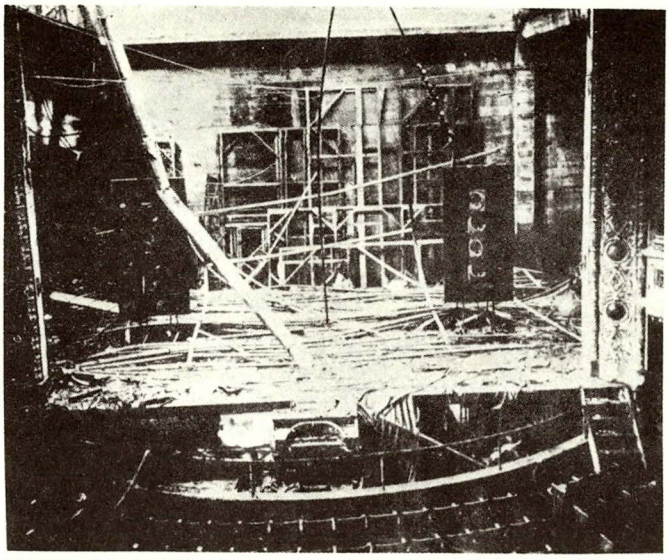
これの原因中（イ）表の特別危害（ロ）表の電氣的原因の大部分及フイルムの長期暴露、（ハ）表の破損せるフイルム及破損せる映寫機は何れも映畫館の火災原因であつて（イ）表中の特別危害二百八十四件を更に細分すれば、映寫機操縱中にフイルムの引火せるもの百十五件、映寫機の熱又はアーク燈の過露出に依りフイルムの燃燒せるもの四十七件、映寫中にフイルムの切斷せるもの二十八件であつて、其の他のものも何れもフイルムが出火の媒體を爲し、其の如何に危險なるかを如實に示して居るのである。

五、フイルムの發火

現今映畫に用ひられつゝあるフイルムは『九ミリ半』又は『十六ミリ』の如き小型物を除き、興行其の他一般に用ひらるゝ標準物、即

ち『三十五ミリ』フイルムは熱に對する抵抗性極めて薄弱であつて、而かも燃燒性の頗る著大なるセルロイドをベースとしたるものである。

由來、セルロイドは周知の如く之に點火すれば最も迅速且つ猛烈に燃燒するのみならず、攝氏百十度以上の溫度に遭遇すれば次第に分解し、二百度を超ゆれば遂に發火するに至るものであるが、フイルム用セルロイドの如きは其の組成が普通のセルロイドと聊か趣を異にして不安定なると、其の形態薄膜狀なる爲に容易に發火延燒するものであつて、其の發火點は普通百七十度前後であり、甚しき場合に於ては既に百二十度前後に於て發火する。從つて五百ワツト乃至千ワツトの電球又はこれらに相當する光源に直射せらるれば數秒にして發火するに至るものであるが、其の誘因となるものは多く映寫機の不良又は故障操縱者の怠慢又は不注意等である。今其の二三に付て左に簡記する。



第六圖　北米合衆國カリフオルニア州ユーリカに於ける州立劇場の内部燒跡(一九二九年九月)

損害十萬弗、小兒の爲めマチーネ開演數分前に出火。

(1) **映寫機の機構**

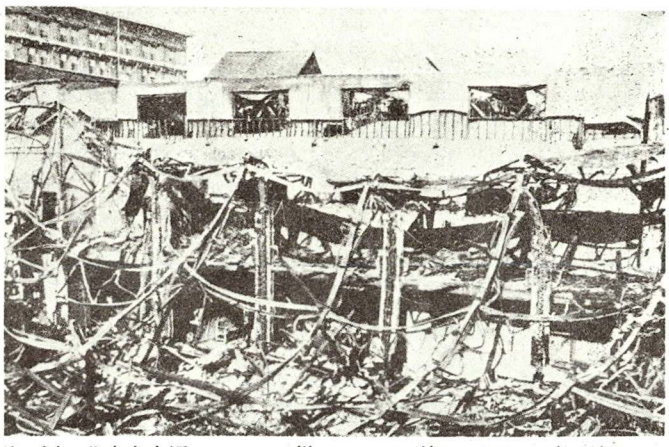
普通、映寫機中に於てフイルムの最も發火し易き部分は光線投射口である所謂アパーチユアであるから、之に附屬せる光線遮斷用のシヤツターが迅速に而かも完全に閉鎖し得る映寫機を選擇し、且つ其の操縱前に之が機能を充分に點檢する要がある。又フイルム卷取用のリールの露出せる映寫機にありてはフイルムがアパーチユアの部分に於て發火せる場合、若は光線の投射を誤つてフイルムを發火せしめたる場合に其の延燒を容易ならしめるものであるから、アーバン、ワイツグ、パテー等の如き映寫機の使用は努めて之を避け、ラツチエン、シンプレツクス、アクメ、バワー等の如く、其のリールを鐵板製ケースを以て被覆したるものか、若は携帶用のものにありてはローヤル、デプライの如く、機構内に於てリールの隔離遮斷されたるものを選擇すべきである。

(2) **操縱中の故障**

映寫機回轉用電動機のベルト切斷若は輸動中のフイルムが不時切斷したるが如き故障は、映寫中に於て往々起り得るものである、然るにこの場合光源の遮斷が遲延すればアパーチユアの部分に於て停滯せるフイルムが發火し、更に其の附近に垂下停滯せるものに延燒して遂に大事に至るものであるから、映寫機はかゝる場合直にシヤツターの自動的に閉鎖するものを選擇使用すべき必要があるのであつて、其の然らざるものにあつては、操縱者自らが直にシヤツターを閉づると共に光源を消滅せしむべきである。又映寫中に停電したる場合の處置も亦フイルムの發火に密接なる關係がある。即ち停電の場合と雖もシヤツターを閉鎖するか或は滅燈を行はざれば、復舊と同時にアパーチユアの部分に於て、フイルムが光線の急激放射を受け發火せしめるものである。

(3) **操縱者の技能**

操縱者が其の技能未熟なる場合にありては、往々ピントを誤りてフイルムに直射光線を放射して發火せしむる處があり、アーク燈を光源に使用する場合にありては、炭素棒の調整不良の爲に飛散する火花がフイルムに點火する處があるから操縱者はこれらの技術に熟練し置くの要がある。又連續物映寫に際し次卷フイルムを裝備せる



第七圖　北米合衆國イリノイス州オーロラに於るリアルト座の燒跡
この火災の爲に附近一帶の商業地域は殆んど全部燒拂はれたのである。

尙セルロイドベースより成るフイルムは、前記の如く映寫中に往々發火して大事を釀すものであるが、更に惧るべきは其の受熱に伴ふて分解生成する瓦斯の中毒である。固よりこの分解生成瓦斯の種類及分量は、フイルム其のもの、本質と其の數量によつて相違することが尠くないが、特に甚しく影響する要素は分解する場所の狀況である普通フイルムが四周開放の場所又は換氣良好なる場所に於て分解するときは酸化炭素、炭酸ガス、メタン、水素、窒素等を生成するのであつて、この内の有害成分たる酸化炭素量も比較的少量であるが、密閉場所又は換氣不良なる場所、例へば映畫館の如き、地下室や倉庫の如き場所に於て分解すれば、酸化炭素量が增加するの外、有害性の顯著なる亞酸化窒素、過酸化窒素、四酸化窒素等を生成するものであつて、映畫館火災に際し多數の死者を出したる場合ありとすれば、其の大部分はこれらの有害瓦斯に中毒したるものと斷じて誤がない。例へば既記の加奈陀モントリアル市のローリエルパレス座の火災に於て出したる死者七十八名中五十二名は中毒死なりし事實、或は又朝鮮鎭海事件に於ても火焰が映寫場外に現はれて始めて出火を覺知したる程靜寂裡に、百餘名の少年少女が死亡したりと傳へらるゝが如きも、明に瓦斯中毒の事實を物語るものである

豫備機に切を急いで豫め光線を放射するが如き不注意を敢へてして危險を好んで招來することがあるから其の間僅々數秒の場合と雖必ず之を避けフイルム輸動後に於て始めて光線を放射すべきである。其の他映寫機室に於る喫煙の絶對禁止や採暖用火鉢の取扱心得等は一見瑣事なりと雖映畫館の安全を期する上に於ては極めて重要なることである。

六　對　策

劇場及映畫館の火災にあつては建築物や設備等の燒失に依る被害は固より尠くないけれども、開演中に若し發火すれば、或は其の火焰の爲に、或は混亂雜踏の爲に、若はフイルムの分解瓦斯の爲に觀客中より多數の死傷者を出す虞があるから、其の防火對策に付ては愼重に研究考慮する必要がある。今、左に其の重要事項の三四を揭げる。

（イ）建物の構造

劇場及映畫館は多くの場合、人家其の他の建築物の密集せる所謂繁華地域に存在するのを常とするから、火勢を局限して附近への延燒を防ぐ上に於ても、又附近よりの類燒を避くる上に於ても、其の構造の木造であることは危險である。從つて市街地建築物法の適用を受くる場合は當然耐火構造ならしむべきであるが、其の他の場合に於ても可成的に其の構造を耐火化せしむべく、殊に映畫館に於て然りである。

（ロ）避難設備

多數の觀客を收容せる劇場又は映畫館に於て一朝思はざるの事故突發したりとすれば、其の避難に際し所謂群集心理の動く所に從ひ或は階段・或は出入口に雪崩を打つて殺到し來つて往々死傷者を出すものであるからこれらの個數、大さ、高さ等は建物の構造・竝に大小、附近の狀況等を參酌して決定し、且つ其の配置は二ヶ所以上に分置し、可成的短時間に全員を屋外の安全なる場所に避難せしむべきであるが、特に其の標識を明瞭にし又避難の誘導宜しきを得ることも亦肝要である。同時に常に

閉鎖せる非常口や映畵館に於ける映寫機室に近き出入口の如きは極力排斥すべきである、又非常口や出入口に外開戸を附することも避難上有効である。

(八)換氣裝置

劇場及映畵館の內部は平時に於ても觀客の呼氣又は喫煙の爲、或は火鉢の炭火の爲に著しく空氣を汚染せられるものであるから、通風裝置を完全ならしめることは觀客の衞生上、閑却し得ないことであるが、特に映畵館にあつてフイルムの燃燒に伴ひ各種の有害瓦斯を生成するから、之を緩和する必要上換氣裝置に意を用ひ、最も入念に設計施工すべきであるが、單に新鮮空氣を供給するに止めないで酸素の如きを添加すべきである。

(ニ)火氣の取締

火氣の取締も亦忽諸に附することは出來ない、先づ第一、劇場及映畵館に於ては、喫煙室を特設して觀覽席に於る喫煙を嚴禁すべく殊に跪座式觀覽席の劇場の如きにあつては然りである。第二に採暖用火鉢の使用は可成的に之を撤廢し、蒸氣又は電熱に依る暖房裝置の採用に努むべきである。第三に映畵館に於る光源は多くの場合電燈又はアーク燈であり、又劇場に於ても近來舞臺照明等に電氣を用ひらるゝこと多きを以て、其の送電線及電氣器具等の檢査を密にして漏電、短絡等の事故を未然に防止すべきである。

(ホ)映寫機操縱者の技能

映畵館に於る上映中、其の安全の鍵を握る者は映寫機操縱者なりと斷じて必ずしも過言でない。多くのフイルム火災の殆んどすべてが操縱者の無智、怠慢、不注意によつて誘發されて居る現狀に鑑み特にこの感が深い。然るに從來の映畵取締は其の檢閲といひ、又解說者の資格制限といひ、何れも風俗警察、思想警察の立場に重點を置けるかの觀があつたが、更に之に加ふるに操縱者に一定の試驗を課して、其の技術に熟練せざる者は勿論、之に伴ふ知識の缺如せる者の映寫機操縱を拒否すべきである。

(ヘ)消防設備

火勢が猛烈を極めて大事に至りたる場合は、固より公設消防隊の來援活動に待たなければならないけれども、出火の當初(殊に映寫機室內)の火焰の如きは方法よろしきを得れば其の鎭壓も容易であるから、劇場及映畵館の內部にはスプリンクラーを配置するか、場內適當なる場所に防火栓を設置するを安全とする。其の他相當量の水槽、バケツ、應急消火器の備付も亦望ましいことであるが、英國のキネマトグラフアクトの第四條に規定せる濕潤毛布の備付の如きも亦一法と稱すべきである。

之を要するに劇場及映畵館に於る火災の如く比較的頻繁に、而かも集團的に死傷者を出すものは他に類例が尠い。從つて其の設計、施工、管理に付ては、建物自體の火災防備に意を用ふる以上に、非常時に於る安全避難を第一義と爲すべきであるが、大阪府の劇場取締規則や觀物場及遊覽所取締規則にはこの點に付ての規定として相當見るべきものがある。又劇場及映畵館に於る使用人に對し平素、非常措置に付て充分なる訓練を施し置き、觀客の避難誘導に、人命救助に或は應急消防に萬遺漏なきを期すべきである。何れにしても劇場及映畵館の防火問題に付ては建築家、演藝關係者は固より一般世人が今少しく之に關心を持つて歡樂愉悅の殿堂をして益々其の眞面目を發揮せしむべきである。

(了)

訂正

十一月號山本和夫氏「發聲映畵館內の音響中」

A三十八頁「適度の餘響時間」八行より Sabine 等によつて得られた適度の餘響時間を有する劇場が再生音に對しては(誤)却つて(正)(期待した程)良好なる音響狀態を(誤)示す(正)(示さない)事が屢々觀察される」

B同四一頁人名 Alex Woof(誤) (Alex. Wood)(正)

以上訂正致します

劇場建築に關する文献錄

佐藤武夫

劇場の發達史について道樂に始めた勉强の折、拂攝した文献をいくらか整理してお目にかける。尤も雜誌類に現れた文献を加へれば餘程に尨大なものになるだらうが、玆には單行本として纏つたものゝ範圍に止めた。

日本の劇場史文献の方は早大建築科學生須田進治君の蒐集になるものである。

（一九三二・一〇・一八）

第一篇

1. General Works.

Allen, B. S.—Chinese theatres Handbook. (1925)

Arnold, R. F.—Bibliographie der deutschen Bühnen seit 1830. (1909)

Bapst, G.—Essai sur l'histoire du théâtre. (1893)

Béquet, C. M. E.—Encyclopédie de l'art dramatique. (1888)

Brown, A. A.—Catalogue of the Allen A. Brown collection of books relating to the stage. (1919)

Gaehde, C.—Das theater vom Altertum bis zur Gegenwart. (1921)

Hastings, C.—The theatre. (1902)

Hessen, R.—Geschichte des theaters und der schauspielkunst. (1921)

Hofmannstal, H. V.—Denkmäler des theaters. (1925)

Jourdain, E. F.—The drama in Europe in theory and practice. (1924)

Klein, J. L.—Geschichte des Drama's. (1865-86)

Levinson, A.—La danse au theatre. (1924)

Mantzius, K.—A history of theatrical art in ancient and modern times. (1903-21)

Matthews, J. B.—A Study of the drama. (1910)

Merbach, P. A.—Bibliographie fur theatergeschichte, 1905-10. (1913)

Niessen, C.—Das Bühnenblild. (1925)

Pichel, I.—Modern theatres. (1925)

Pougin, A.—Dictionaire Historique et pittoresque du theatre et des arts.

Streit, A.—Das theater. (1903)

Tscheng-Ki-Tong.—Les Chinois peints par eux-mêmes: (1886)

Urban, E.—Das welttheater. (19-?)

Weisstein, G.—Theater. (1913)

Winds, A.—Der Schauspieler in seiner entwicklung vom mysterien-zum kammerspiel. (1919)

2. Greek and Roman Stage.

Andre, P.—Theatre et forum d'ostie. (1891)

Bergk, T.—Griechische literaturgeschichte. (1872-87)

Bieber, M.—Die denkmäler zum theaterwesen im altertum (1920)

Bodensteiner, E.—Das antike theater. (1902)

Bottiger, C. A.—Die furienmaske. (1801)

Brown, G. B.—The ancient Greek theatre. (1900)

Brumoy, P.—Le theatre des Grecs. (1820-25)

Buckham, P. W.—The theatre of the Greeks. (1830)

Capps, E.—Vitruvius and Greek stage. (1893)

Capps, E.—The chorus in the later Greek drama with reference to the stage question. (1895)
Capps, E.—The Greek stage according to the extant dramas. (1891)
Caristie, A. N.—Conference sur le theatre antique d'orange faite devant le congres de la Societe-francaise d'archeologie. (1883)
Crete.—Ancient theatres in Crete. (1901)
Defrasse and Lechat.—Épidaure. (1895)
Dörpfeld, W. und Reisch, E.—Das griechische theater. (1896)
Dumon, K.—Le théâtre de polycléte. (1889)
Dumon, K.—Le théâtre de polycléte. (1889)
Dyer, L.—Vitruvius' account of the Greek stage. (1891)
Engelhardt.—Illustrationen der terenzhandschriften. (1905)
Falkener, E.—A description of some important theatres. (1854)
Fiechter, E. R.—Die baugeschichtliche entwicklung des antiken theaters. (1914)
Flickinger, R. C.—The Greek theater and its drama. (1922)
Flickinger, R. C.—Plutarch as a source of information on the Greek theatre. (1904)
Floegel, K. F.—Geschichte des groteskekomischen. (1788)
Fossum, A.—The theatre at Sikyon. (1905)
Gerkan, A. von.—Das theater von priene. (1921)
Granziani, F.—I personaggi dell'atellana. (Rivista di filologia, 1896, XXIV)
Gsell.—Monuments antiques de l'algérie. (1901)
Haigh, A. E.—Attic theatre. (1907)
Haigh, A. E.—The tragic drama of the Greeks. (1896)
Hense.—Die modificirung der maske in der griechischen tragödie. (1905)
Janvier, T. A.—The Christmas kalends of provence. (1902)
Körting, G.—Geschichte des griechischen und römischen theaters. (1897)
Maffei, R.—Le favole atellane. (1892)
Magnin, C.—Les origines du théâtre moderne. (1838)
Mau, A.—Pompeii. (1899)
Ménard, R. J.—La vie privée des anciens.
Michel, F.—Le théâtre antique d'orange et ses représentations modernes. (1894)
Munk, E.—De fabulis atellanis. (1840)
Noack.—Skene tragik. (1915)
Niemann, G, Herberdey, R. and Wilberg, W.—Das theater in ephesos.
Navarre, O. L. L.—Le théâtre grec. (1925)
Öhmichen, O.—Das antike theatre. (1902)
Opitz, R.—Schauspiel und teaterwesen der griechen und romer. (1889)
Pollux.—Onomastikon. (1502)
Petersen, E.—Die attische tragödie als bild-und-buhnenkunst. (1915)
Puchstein, O.—Die griechische buhne. (1901)
Ribbeck, O.—Comicorum romanorum fragmenta. (1898)
Rizzo, G. E.—Il teatro greco di siracusa. (1923)
Rostrup, E.—Attic tragedy in the light of theatrical history. (1923)
Saint-Saëns, C. C.—Note sur les decors de theatre dans l'antiquite romaine. (1886)
Sautel, J.—Le théâtre romain de Vaison. (1909)
Schanz, M.—Geschichte der romischen litteratur. (1909)
Schneider, G. C. W.—Das attische theaterwesen. (1835)
Sittle, K.—I personaggi dell'atellana. (Rivista di storia antica, 1895)
Strack, J. H.—Das altgreichische theatergebäude nach sämmtlichen bekannten ueberresten dargestellt. (1843)
Toutain, J.—Le théâtre romain de Simitthu. (1892)
Van Eck, D. A. H.—Quaestiones scenicae romanae. (1892)
Vitruvius.—De architectura. (1486)
Weil.—E'tudes sur le drame antique. (1896)

Weissmann.—Die scenische aufführung der griechischen drama. (1893)
Wiegand, Th.—Das theater zu priene. (1898)
Wiegand, Th.—Ueber die thymele des griechischen theaters. (1846)
Wiegand, T.—Das theater zu priene. (1898)
Drerup, E.—Das griechische theater in Syrakus. (1901)
Arnold, B.—Das altrömische theatergebäude. (1873)
Formigé, J.—Remarques diverses sur les théâtre romains, à propos de ceux d'Arles et d'orange. (1914)
Bocchi, O.—Osservazioni sopra un antico teatro scoperto in Adria. (1739)
Bazin, H.—Le théâtre romain d'Antibes. (1887)
Mallard, G.—Le théâtre gallo-romain de Drevant. (1906)
Piranesi, F.—Teatro di Ercolano. (1783)
Bazin, H.—Villes antiques. (1892)
Vitet, L.—Monuments antiques de la ville d'orange. (1861)
Révoil, H. A.—Conférence sur le théâtre antique d'orange. (1883)
André, P.—Théâtre et forum d'Osite. (1891)
Stratico, S.—Dell'antico teatro di Padova. (1795)
Ortiz Y Sanz, J.—Viage arquitectonico-antiquario de Espana. (1807)

3. Mediaeval Stage.

Alt, A. H.—Theater und kirche in ihren gegenseitigen verhältniss. (1846)
Bell, H.—Contributions to the history of the English play-house. (1913)
Blanchard, E. L.—History of the Adelphi theatre. (1877)
Blanchard, E. L.—History of the Haymarket theatre. (1873)
Blanchard, E. L.—History of the Lyceum theatre. (1875)
Blanchard, E. L.—History of the Olympic theatre (1879)
Blanchard, E. L.—History of the Prince of Wales theatre. (1874)
Blanchard, E. L.—History of the Princess theatre. (1876)
Blanchard, E. L.—History of Sadler's Well's theatre. (1872)
Blanchard, E. L.—History of the Strand theatre. (1872)
Blanchard, E. L.—History of the Surrey theatre. (1876)
Borsa, M.—The English stage of To-day. (1908)
Bourdon, G.—Les théâtres anglais. (1900)
Bulloch, J. M.—A hew theory of stage production. (1903)
Calliachius, N.—De ludis scenicis mimorum et pantomimorum. (1713)
Chambers, E. K.—The mediaeval stage. (1903)
Ciampi, I.—Le rappresentazioni sacre nella parte comica. (1865)
Chapman, J. K.—A complete history of theatrical entertainments, dramas masques, and triumphs, at the English court, from the times of King Henry the eighth to the present day. (185-?)
Coffmann, G. R.—A new approach to mediaeval latin drama. (1925)
Coffman, G. R.—A note concerning the Cult of St Nicholas at Hiddescheim. (1922)
Cohen, G.—Histoire de la mise en scène dans le théâtre religieux francais du moyen age. (1926)
Coussemaker, E.—Drames liturgiques du moyen âge. (1861)
Craig, E. G—Towards a new theatre. (1913)
Dieterich, A.—Pulcinella. (1897)
Dibdin, J. C.—The annals of the Edinburgh stage. (1888)
Doubet, J.—Dictionnaire des mystéres. (1854)
Downes, J.—Roscius anglicanus. (1886)
Endepol, H. J. E.—Het decoratief en de opvoering van het middelnederlandsche drama volgens de middelnederlandsche tooneelstukken. (1903)
Fairholt, F. W.—Lord mayors' pageants. (1843-44)
Fitzgerald, P. H.—A new history of the English stage. (1882)

Fournel, F. V.—Curiosite's théâtrales anciennes et modernes, francaises et etrangeres. (1859)
Ficoroni, F.—Dessertatio de larvis scenicis et figuris comicis antiquorum romanorum. (1750)
Froning, R.—Das drama des mittelalters. (1891)
Führ.—De mimis graecorum (1860)
Gaste, A.—Drames liturgiques de la cathédrale de Rouen. (Annales de la faculté des lettres de caen, 1888)
Giudici, E.—Storia del teatro italiano. (1863)
Golden, W. F.—A brief history of the English drama from the earliest to the latest times. (1890)
Hartzheim, J.—Concila Germaniae. (1759-90)
Heller, F. von Hellwald.—Geschichte des holländischen theaters. (1874)
Jubinal, M. L. A.—Mystères inédits du quinzième siecle publiés pour la première fois avec l'autorisation de M. le ministre le l'Instruction publique. (1837)
Julleville, P. de.—Les mystères. (1880)
Julleville, P. de.—La Comédie et les maeurs en France au moyen âge. (1886)
Julleville, P. de.—Les Comédiens en France au moyen âge. (1889)
Julleville, P. de.—Répertoire du théâtre comique en France au moyen âge. (1886)
Jusserand, J. J.—English wayfaring life in the middle age. (1892)
Kempe, A. J.—The loseley manuscripts. (1836)
Kondakov, N. P.—О Фрескахв лѣстницъ Kiebo-ОоФійскаро собора.
Lange, C.—Die lateinischen osterfeiern. (1887)
Leibing.—Die inscenierung des zweitägigen luzernes osterspiels. (1869)
Lowe, R. W.—A bibliographical account of English theatrical literature from the earliest times to the present day. (1888)
Lumini—Il drama nelle sacre rappresentazioni dei XIV, XV, & XVI. (1875)
Mauermann, S.—Die buhnenanweisungen im deutsche drama bis 1700. (1911)
Mansi, J. D.—Sacrorum conciliorum nova..... collectio. (1769-92)
Méril, E. du.—Histoire de la comédie. (1864)
Méril, E. du.—Origines latines du théâtre moderne. (1849)
Milchsack, G.—Die obster und passionsspiele. (1879)
Morice, É.—Essai sur la mise-en-scène depuis les mystères jusqu'au cid. (1836)
Mone, F. J.—Schauspiele des mittelalters. (1846)
Morozov, P. O.—Историа праматической литературbi и Театра. (1903)
Morozov, P. O.—Счеркb историй театра в Заралной Европе и Россий. (1911)
Mori, C. E.—Estudios sobre la historia del arte escénico en Espana. (1896-97)
Nyrop, K.—En theater forestillung i middeladeren. (in studier fra sprog-og oldtidsforskning, 1892)
Ormerod, G.—The history of the country palatine and city of chester. (1819)
Paris, L.—Le theatre a reims depuis les romains jusqu'a nos jours. (1885)
Paushkin, M.—Срелневековій театръ. (1914)
Roy, E.—E'tudes sur le théâtre français du XIVe et du XVe Siécle. (1902)
Ryan, R.—Dramatic table talk. (1825)
Sepet, M. C. A.—Les drame chrétien au moyen age. (1878)
Sepet, M. C. A.—Les prophètes du christ. (1867)
Scherillo, M.—Die atellanen und das heutige volkslustspiel neaples. (Das Ausland, 1884)
Sharp, T.—A dissertation on the pageants or dramatic mysteries anciently performed at coventry, by the trading companies of that city. (1825)

Straeten, E. V.—Le theatre villageois en flandre. (1881)
Stuart, D. C.—Stage decoration in France in the middle ages. (1910)
Symonds, J. A.—Shakspeare's predecessors in the English drama. (1900)
Veselovski, A.—Старинній Театръ Въ Европе. (1870)
Wynne, A.—The growth of English drama. (1914)
Wright, J.—Historia histrionica. (1874-76)
Wyndham, H. S—The annals of covent garden theatre from 1732 to 1897 (1906)
Yxart, J.—El arte scenico en espana. (1894-96)

4. Commedia dell'Arte.

A gresti, A.—Studii sulla commedia italiana del secolo XVI. (1871)
Bartoli, A.—Scenari inediti. (1880)
Bertelli, F.—Il carnevele italiano mascherato.
Biancolelli, J. D.—MS Paris, Bibl. de l'opéra. (1760)
Brouwer, S. de. F.—Capitan fracassa. (1880)
Capasso, M. O.- Goldoni e la commedia de l'arte. (1912)
Callot, J.—Balli di sfessania.
Ciampi, I.—Studio sulla commedia italiana nel secolo XVII. (1856)
Cocchi, G.—Studio sulle maschere italiane. (1891)
Constantini, A.—La vie de scaramouch. (1695)
Croce, B.—Pulcinella e il personaggio del napoletano in commedia. (1899)
Croce, B.—Lo spagnuolo nelle commedie. (Atti dell'acc. Pont, XXVII).
Dieterich, P.—Op. Cit.
Driessen, A.—Op. Cit.
Fainelli, V.—Chi era pulcinella? (Giorn. stor. d. lett. ital., 1909, Liv).
Ferretti, E.—Le maschere italiane nella commedia dell'arte e nel teatro di goldoni. (1904)
Fleres, U.—Ancora del capitan francassa. (1880)
Gillot, C. Le théâtre italien.
Goldoni, G.—Memoire. (Translated by Symond J. A. 1890)
Graf, A.—Arlecchino. (Giornale storico della letteratura italiana, 1896, IX).
Jarro, G.—L'origine della maschera di stenterello. (1898)
Louis, P.—La comédie italienne. (1926)
Maddalena, E.—Uno scenario inedito. (Sitzungsberichte der wiener K. Akad. der wissenschaften; phil.-hist. Klasse, 1901, CXI ii).
Miclashevski, C.—La commedia dell'arte. (1914; in Russian).
Moland, L.—Molière et la commédie italienne. (1867)
Neri, A.—Una commedia dell'arte. (Giorn. stor. d. lett. ital., 1883, i).
Petraccone, E.—La commedia dell'arte: Storia, tecnica, scenari. (Naples, 1927)
Perrucci, A.—Dell'arte rappresentativa premeditata ed all' improvvisa. (1699)
Porta, de la G.—Delle commedie. (1726)
Rasi, L.—I comici italiani. (1897-1905)
Rossi, V.- I suppositi dell'aristo ridotto a scenario. (1895)
Sand, M.—Les masques et bouffons de la comédie italienne. (1859)
Scala, F.- Il teatro delle rappresentative. (1611)
Scherillo, M.—La commedia dell'arte in italia. (1884)
Senigaglia, G.—Capitan spavento. (1899)
Signorelli, N.- Storia critica dei teatri antichi e moderni. (1813)
Stoppato, L.—La commedia popolare in italia. (1887)
Valeri, A.—Gli scenari inediti di basilio locatelli. (1894)

5. English Stage.

Barker, H. G.—The examplary theatre. (1922)
Bourdon, G.—Les théâtres anglais. (1903)

Farquharson, R. S.—A short history of the English stage. (1909)
Matthews, B.—A history of the Birmingham Repertory. (1924)
Playfair, N.—The story of the Lyric theatre, Hammersmith. (1925)
Saunders, G.—A treatise on theatres. (1790)
Sherson, E.—London's lost theatres. (1926)
Watson, E. B.—Sheridan to Robertson, a study of the nineteenth century London stage. (1926)

6. Elizabethan Stage.

Adams, J. Q.—Shakespearean playhouses. (1917)
Albright, V. E.—The Shakespearian stage. (1909)
Barker, H. B.—The London stage. (1889)
Boas, F. S.—University drama in the Tudor age. (1914)
Bradley, A. C.—Shakespeare's theatre and audience. (1909)
Brooke, C. F. T.—The Tudor drama. (1911)
Caffin, C. H.—The appreciation of the drama. (1908)
Chambers, E. K.—The Elizabethan stage. (1923)
Creizenach, W. M. A.—The English drama in the age of Shakespeare. (1916)
Creizenach, W. M. A.—Geschichte des neueren dramas. (1893-1909)
Dekker, T.—The non-dramatic works of Thomas Dekker. (1884-86)
Delius, N.—Ueber das englische theater wesen zu Shakespeare's zeit. (1853)
Drake, N.—Shakespeare and his times. (1843)
Graves, T. S.—The court and the London theatres during the reign of Elizabeth. (1913)
Hatcher, O. L.—A book for Shakespeare plays and pageants (1916)
Jonas, M.—Shakespeare and the stage. (1918)
Koppel, R.—Die unkritsche behandlung dramaturgischer angaben und anordnungen in den Shakespere-ausgaben und die beirrung der erkenntnisse in bezug auf die archaische gestaltungsweise der altenglischen dramatik (Englische Studien, Bd. 34) (1904)
Lathrop, E. L.—Where Shakespeare set his stage. (1906)
Lawrence, W. J.—The Elizabethan playhouse, and other studies. (1912-13)
Ordish, T. F.—Early London theatres. (1899)
Reynolds, G. F.—Some principles of Elizabethan staging. (1905)
Rhodes, R. C.—The stagery of Shakespeare. (1922)
Schelling, F. E.—Elizabethan drama, 1558-1642. (1908)
Sisson, C. J.—Le goût public et le théâtre elisabethain jusqu'a la mort de Shakespeare. (1922)
Thaler, E.—From Shakespeare to Sheridan. (1924)
Thorndike, A. H.—Shakespeare's theatre. (1916)
Waldron, F. G. The origin of the English stage.
Whanslaw, H. W.—The bankside stage-book. (1924)

7. Post Elizabethan Stage.

Brotanek, R.—Die englischen Maskenspiele (Wiener Beiträge zur englischen philologie, Bd. 15). (1902)
Campbell, L. B.—Scenes and machines on the English stage during the Renaissance. (1823)
Cibber, C.—Apology. (1740)
Lowe, R. W.—Thomas Betterton. (1891)
Odell, G. C. D.—Shakespeare from Betterton to Irving. (1924)
Reyher, P.—Les masques anglais. (1909)
Shower, A. E.—The English stage during the restoration period. (1913)

8. American Stage.

Cheney, S.—The art theatre. (1917)
Dunlap, W.—A history of the American theatre.

Murdoch, J. E.—The stage. (1880)
Sayler, O. M.—Our American theatre. (1923)
Birkmire, W. H.—The planning and construction of American theatres. (1896)
Mackay, C. D'Arcy.—The little theatre in the United States. (1917)
Cheney, S.—Modern art and the theatre (1921)
Sexton, R. W.—American theatres of To-day. (1930)

9. French Stage.

Apollinaire, G.—Le théâtre italien, avec une étude sur le théâtre italien en France. (1910)
Arnavon, J.—Les misanthrope. (1914)
Arnaldi, E.—Idea di un teatro nelle principali sue parti simile a' teatri antichi all' uso moderno accomodato. (1762)
Baschet, A.—Les Comédiens italiens à la cour de France sous Charles IX, Henri III, Henri IV et Louis XIII. (1882)
Fernardin, N. M.—La comédie italienne en France et les théâtre de la foire et du boulevard (1570-1791). (1902)
Branchart, A.—Traité pratique sur l'art de la mise en scéne. (1912)
Carini, M. F.—Trattato sopra la struttura de' teatri, e scene, che a' nostri giorni si costumano. (1676)
Copeau, J.—Un essai de renovation dramatique. (1921)
Dacier, E.—La Mise-en-scène à Paris au Xviie siècle. (Mémoires de la soc. de l'hist. de Paris. 1901)
Despois, E.—Le théâtre français sous Louis XIV. (1874)
Despierres, G.—Le théâtre et les comédiens à alençon au seizième et au dix-septième siècle. (1892)
Dickinson, T. H.—The case of American drama. (1915)
Dumont, G. P. M.—Paralléle de plans des plus belles salles de spectacles d'Italie et de France avec détails de machines théâtrales. (1774)
Fillippi, J. de.—Essai d'une bibliographie générale du théâtre.
Gaiffe, F.—Le drame en France au XVIII[e] siècle. (1910)
Houssaye, A.—Le Comédie Française.
Klingler, O.—Die comédie italienne in Paris nach der sammlung von Gherardi. (1902)
Lancaster, H. C.—Mémoire de mahelot. (1920)
Lintilhac, E.—Histoire générale du théâtre en France.
Loiseau—Rousseau, P.—Les théâtre de Paris.
Rigal, E.—Le théâtre français avant la période classique. (1901)
Rouché, J.—L'art theatral moderne. (1910)
Roubo, the Younger.—Traité de la construction de théâtres, et des machines théâtrales. (1777)

10. German Stage.

Calm, Hans.—Kulturbilder aus der deutschen. (1925)
Fuchs, G.—Die revolution des theaters. (1909)
Gerhaeuser, E.—Stuttgarter buhnenkunst. (1917)
Giesenberg, E.—Das opernhaus zu Frankfurt. (1883)
Gregor, J.—Wiemer szenische kunst. (1924)
Grube, M.—Geschichte der meininger. (1926)
Hagemann, C.—Modern bühnenkunst. (Bd. 1.) (1916)
Kienzl, H.—Die bühn ein echo der zeit (1905-1907). (1907)
Kutscher, A.—Die ausdruckskunst de bühne. (1910)
Langhans, C. F.—Stadt-theater in Leipzig. (1870)
Lehner, G.—Theater-dekoration. (1891)
Lessing, T.—Theater-seele. (1907)
Littmann, M.—Das prinzregenten-theater in München, erbaut vom baugeschäft Heilmann und Littmann. (1901)
Littmann, M.—Das grossherzogliche hoftheater in weimar. (1908)
Martersteig, M.—Die bühne der neuzeit. (1904)
Reimers, C. E.—Die deutsche buhnen und ihre angehörigen. (1911)

Sayler, O. M.—Max Reinhardt and his theatre. (1924)
Semper, G.—Das königliche hoftheater zu Dresden. (1849)
Schmidt, P. E.—Die bühnenverhältnisse des deutschen schuldramas und seiner volkstümlichen ableger in sechzehnten jahrhundert. (Forschungen zur neueren litteraturgeschichte. Bd. 24). (1903)
Winds, A.—Drama und bühne. (1923)
Carter, H.—The theatre of Max Reinhardt. (1914)
Frisch, E.—Von der kunst des theaters, en Gespräch. (1922)

11. Italian Stage.

Ancona, A. d'.—Originil del teatro in Italia. (1877)
Chiaramonti, S.—Delle scene e teatri. (1675)
Croce, B.—I teatri di Napoli. (1891)
Durm, J.—Die Baukunst der renaissance in Italien. (1914)
Ferrario, C.—Scenografia. (1919)
Flechsig, E.—Die dekoration der modernen bühne in Italien. (1894)
Ingegneri, A.—Della poesia rappresentativa e del modo di rappresentare le favole sceniche. (1598)
Lamberti, V.—La regolata costruzion de'teatri. (1787)
Lawrence, W. G.—The stage year book. (1926)
Magrini, A.—Il teatro olympico. (1847)
Milizia, F.—Del teatro (1773)
Montenari, G.—Del teatro olympico.
Ricci, C.—Figure e figuri del mondo theatrale. (1920)
Ricci, C.—I teatri di bologna nei secoli XII e XIII.
Riccoboni, L.—Histoire du theatre italien depuis la decadence de la comédie latine. (1728)
Royer, A.—Histoire universelle du théâtre. (1869-78)
Serlio, S.—The second books of architecture. (1611)
Solerti, A.—Musica, ballo e drammatica alla corte medicea dal 1600 al 1637. (1905)
Sirigatti, L.—La pratica di prospettiva. (1596)
Trioli. G.—Paradossi per pratticare la prospettiva senza saperla. (1683)

12. Russian Stage.

Bakshy, A.—The path of the modern Russian stage. (1916)
Carter, H.—The new theatre and cinema of Soviet Russia. (1924)
Efros, N.—Московский Художественнний Театр 1898-1923. (1924)
Efros, N.—Московский Большой Театр 1825-1925. (1925)
Sayler, O. M.—Inside the Moscow Art Theatre. (1925)
Sayler, O. M.—The Russian theatre. (1922)
Sayler, O. M.—The Russian theatre under the revolution. (1920)
Stanislavski, C.—My life in art. (1924)
Varneke, B.—Ocherki iz istorii drevnerimskavo. (1903)

13. Spanish Stage.

Bonillay, S. M. A.—Las bacantes. (1921)
Rennert, H. A.—The Spanish stage in the time of Lope de Vega. (1909)
Schack, A. F.—Geschichte der dramatischen literatur und kunst in Spanien. (1845-46)

14. Oriental Stage.

Adam, J.—Japanese story-tellers. (190-?)
Ball, J. D.—Things Chinese. 1925.
Barrow, S. J.—Travels in China. (1806)
Bazin, A. P. L.—Chine moderne. (1853)
Brinkley, F.—Japon; its history, arts and literature. (Cop 1901-02)
Buss, Kate.—Studies in the Chinese drama. (1922)
Chamberlain, B. H.—Things Japanese. (1905)
Chod'zko, A. B.—Théâtre persan. (1878)
Chu-Chia-Chien.—The Chinese theatre. (192-?)
Chu-Chia-Chien.—Le théâtre chinois. (1922)

Edwards, O.—Japanese plays, and playfellows. (1901)
Hearn, L.—Glimpses of unfamiliar Japan. (1894)
Johnston, R. F.—The Chinese drama, with six illustrations reproduced from the original paintings by C. F. Winzer. (1921)
Kincaid, Z.—Kabuki. (1925)
Maybon, A.—Le théâtre japonais. (1925)
Muensterberg, O.—Masken und theater. (1905)
Porter, R. P.—Japan, the new world power. (1915)
Regamey, F. E.—Japan in art and industry, with a glance at Japanese manners and customs. (1893)
Stopes, M. C. C.—Plays of old Japan. (1913)
Stewart, B.—Subjects portrayed in Japanese colour-prints. (1922)
Vassal, G. M.—On and off duty in Annam. (1910)
Victoria and Albert Museum.—The Japanese theatre. (1922)
Zucker, A. E.—The Chinese theatre. (1925)

15. Scenery and Scene Painting.

Appleton publishing co.—Theatrical scene painting. (1916)
Cheney, S.—Modern art and the theatre. (1921)
Craig, E. G.—The theatre. (1919)
Duranty, L. F. E.—Theatre des marionettes. (1880)
Fischel, O.—Das moderne buhnenbild. (1923)
Macgowan, K. and Jones, R. E.—Continental stagecraft. (1922)
Macgowan, K.—The theatre of To-morrow. (1921)
Moderwell, H. K.—The theatre of To-day. (1913)
Rehm., H. S.—Das buch de marionetten. (1905)
Rehm., H. S.—Der minus. (1903)
Sabbattini da Pesaro, N.—Some extracts from the practice of making scenes and machines in theatres. (1926)
Zucker, P.—Die theater dekoration des Barock. (1925)

16. Little Theatre.

Smith, C G.—The little theatre of the old square. (1923)

17. Lighting and Lighting History.

Carter, H.—The new spirit in drama and art. (1913)
Luckiesh, M.—The lighting art. (1917)
Rouché, J.—L'art theatral moderne. (1924)

18. Machinery, Equipment, Effect, Etc.

Poullet.—Essai sur l'art de construire les théâtre, leurs machines et leurs mouvemens. (1801)
Brayley, E. W.—Historical and descriptive accounts of the theatres of London. (1826)
Buckle, J. G.—Theatre construction and maintenance.(1888)
Chetwood, W. R.—A general history of the stage. (1749)
Cook, D.—A book of the play. (1876)
Donnet, A.—Architectonographie des theatre de Paris. (1840-57)
Filippi, J. de.—Parallèle des principaux théâtres modernes de l'enrope et des manhines theatrales françaises, allemandes, et anglaises. (1859)
Fyles, F.—The theatre and its people (1900)
Garnier, J. L. C.—Le nouvel opera de Paris. (1878—81)
Hammitzsch, M.—Der moderne theaterbau. (1906)
Hopking, A. A.—Magic. (1901)
Horstmann, H. C. and Tousley, V. H.—Motion picture operation. (1914)
Krows, A. E.—Play production in America. (1916)
Moynet, G.—La machinerie theatrale. (1893)
Moynet, J.—L'envers du theatre. (1873)
Prunières, H.—Le ballet de cour en France avant benserade et lully, suivi, du ballet de la délivrance de renand. (1914)
Sachs, E. O. and Woodward, E. A.—Modern opera house and theatres. (1896-98)

Smith, W.—Commedia dell'arte (Columbia Univ. press). (1912)
Trélat, E.—Le theatre et l'architecte. (1860)
Vaulabelle, A. de. and Hémardinquer, C.—La science au theatre. (1908)
Stephenson, R M.—Machinery for theatres. (1917)

19. Miscellaneous.

Arago, J. E. V.—Foyers et coulisses. (1852)
Arago, J. E. V.—Physiologie des foyers de tous les théâtres de Paris. (1841)
Bayliss, L.—The old vic. (1925)
Bonnassies, J.—La comedie-francaise: histoire administrative. (1874)
Blaze, F. H. J.—L'académie impériale de musique. (1855)
Banck, O. A.—Aus der deutschen bühnenwelt. (1865)
Bierbaum, O. J. Fünf und zwanzig jahre münchner hoftheatergeschichte. (1892)
Bahr, H.—Wiener theater, 1892-98 (1899)
Bahr, H.—Die theater wiens. (1893-1909)
Bächtold.—Scweizerische schauspiele des 16. Jahrhunderts. (1890-93)
Beetschen, A.—Das theaterwesen in der schweiz. (1897)
Brown, T. A.—A history of the New York stage from the first performance in 1732 to 1901. (1903)
Berstein, N. D.—Russlands theater und musik zur zeis peters des Grossen. (1903)
Carter, H.—The new spirit in the European theatre, 1914-1924 (1925)
Copeau.—A new French theatre in America: Theatre du vieux colombier. (1917-18)
Corvin, P. de.—Le théâtre en Russie depuis ses origines jusqu'à nos jours. (1890)
Desarbres, N.—Deux siècles à l'opéra, 1668-1868. (1868)
Darzens, R.—Le théâtre libre illustré. (1890)
Etienne, C. G. and Martainville A. L. D.—Histoire du théâtre-française. (1902)
Giesenberg, E.—Das opernhaus zu Frankfurt a. M. (1883)
Herkt, G.—Tonfilmtheater.
Heulhard, L. O. A.—Jean Monnet. (1884)
Huret, J.—Le thèâtre libre illustré. (1890)
Heim, L. and Buss, G.—Das königliche opernhaus für Berlin. (1910)
Holbein, F. L. von.—Deutsche buhnenwesen. (1853)
Jullien, A.—Les spectateurs sur le théâtre. (1875)
Joannidès, A.—La comédi-francaise, 1901-14. (1902-15)
Kahle, P. E.—Zur geschichte des arabischen schattentheaters in Egypten. (1909)
Kinsila, E. B.—The modern theatre construction. (1917)
Langhans, C. F.—Das stadt-theater in Leipzig. (1870)
Littmann, M.—Das grossherzogliche hoftheater in weimar.
Lothar.—Das wiener burgtheater (1899)
Mendès, C. A.—L'art au théâtre. (1897-1900)
Muriel, A.—Le théâtre au jourd'hui. (1855)
Mc Bride, T. J.—Diagrams of the leading New York theatres. (1879)
Playfair, N.—The lyric, Hammer-smith. (1925)
Parfaict, F. and C.—Histoir du théâtre-françois. (1875-49)
Parfouru, P. D. and Monval, G. H M.—L'odéon: histoire administrative, anecdotique et littéraire. (1876-82)
Petersen, J.—Das deutsche national-theater. (1919)
Reden-Esbeck, F. J. von.—Caroline neuber und ihre zeitungenossen. (1881)
Richards, L P.—Oberammergau. (1910)
Royer, A.—Histoire de l'opéra. (1875)
Semper, G.—Das königliche hoftheater zu Dresden. (1849)
Stumcke, J. C.—Die deutsche theaterausstellung. (1910)
Schliepmann, H. C. G.—Die neuen Entwürfe zum Berliner koniglichen opernhaus. (1913)
Schlager, J. E.—Wiener kaiserliche akademie der missen-

schaften. (Phil.—hist. Klasse, 1851, VI)
Seilhamer, G. O.—History of the American theatre. (1888–91)
Shand, P. M.—Modern theatre and cinema.
Thalasso, A.—Molière en Turquie : étude sur le théâtre de karagueuz. (1888)
Travenol, L. and Durey de Noinville, J. B.—Histoire du théâtre de l'opera. (1753)
Urban, J.—Theatres.
Van der Nuell, E. and A. von s. von Siccardsburg.—Das kaierlich-königliche hof-opernhaus in wien. (1885)
Wagner.—Handbuch der architektur. (1885)
Weilen, A. W. von.—Geschichte des Wiener theaterwesens von den ältesten zeiten bis zu den anfängen der hof-theater. (1899)
Zucker, P. - Theatre und lichtspielhauser. (1926)
Zucker und Stindt, G. O.—Lichtspielhäuser und tonfilm-theatre. (1931)
Herkt, G.—Das tonfilm theater. (1931)
Appia, A.—La mise-en-scéne du drama wagnérien. (1895)
Appia, A.—Die musik und die inscenierung. (1899)
Aghion, M.—Le théâtre à Paris au Paris ou XVIII^e siécle (1925)
Bragalia, A. G.—Del teatro teatrale. (1926)
Bragalia, A. G.—La maschera mobile. (1926)
Bibiena, F.—Direzioni della prospettiva teorica. (1732)
Bibiena, F.—Disegni delle scene. (1714)
Bibiena, G.—Architettura e prospettive. (1740)
Bibiena, G.—Theatre-Dekoaationen. (1888)
Devrient, E.—Geschichte der deutschen schauspielkunst. (1848)
Ferrario, G.—Storia e descrizione de' principali theatri antichi e moderni. (1830)
Gilliland.—Dramatic mirror. (1808)
Gori, P.—Scenografia. (1927)
Gregor, J.—Monumenta scenica. (1925 in progress)
Laumann, E. M.—La machinerie au théâtrale depuis les grecs jusqu'à nos jours. (1897)
Lefevre, J.—L'Electricité au théâtre. (1894)
Patté, P.—Essai sur l'architecture tbéâtrale. (1782)
Petersen.—Schiller und die buhne. (1904)
Piermarini, G.—Teatro della scala in Milano. (1826)
Pozzo, A.—Prospettiva dei pittori e architetti. (1692–1700)
Piranesi, G. B.—Opere varie di architettura e prospettiva. (1750)
Pavolini, C.—Arte teatoale (le arti plastiche, 1925)
Prampolini, E.—Rivista d'arte futurista. (1924)
Scherillo, M.—Storia letteraria dell' opera buffa napolitana (1883)
Craig, E. G.—A living theatre. (1913)
Craig, E. G.—The art of the theatre. (1905)
Baker, H. G.—The exemplary theatre. (1922)
Patte, P.—Essai sur l'architecture théâtrale. (1782)
Wyatt, G.—A compendious description of a design for a theatre. (1812)
Landriani, P.—Osservazioni sui difetti prodotti nei teatri dalla cattiva construzione del palco scenico, e su alcune inavvertenze nel dipingere le decorazioni. (1815)
Apuzzo, N. d'.—Cenni interno ai teatri moderni. (1817)
Ferrario, G.—Storiae descrizioni de' principali teatri antichi e moderni. (1830)
Trélat, E.—Le théâtre et l'architecte. (1860)
Garnier, C.—Le théâtre. (1871)
Gosset, A.—Traité de la construction des théâtres. (1886)
Bucklet, J. G.—Theatre construction and maintenance. (1888)
Sturmhoefel, A.—Scene der alten und buhnen der neuzeit. (1889)
Fecker, H.—Das antik und moderne theater in R cksicht auf schauen und Hören.

Sachs, E. O.—Modern opera houses and theatres. (1896-98)
Streit, A.—Das theater. (1903)
Semper, M.—Gebäude für Erzichung, wissenscaft und kunst, V. theater.
Hammitzsch, M.—Der moderne theaterbau. (1906)
Pichel, I.—On building a theatre. (1920)
Meloy, A. S.—Theatres and motion picture houses. (1916)
Shand, M. P.—Modern theatres and cinemas. (1930)
Weiser, A.—Das theater in der Josefstadt. (1927)

Open Air Theatres.

Caristie, A.—Notice sur l'état actuel de l'arc d'orange et des théâtres antiques d'orange et d' arles. (1839)
Cheney, S.—The open air theatre. (1918)
Davol, R.—A handbook of American pageantry.
Savits, J.—Das Naturtheater. (1910)
Waugh, F. A.—Outdoor theatres. (1917)

第 二 篇

A 舞臺史に關する文献

一、舞臺總觀

古事記　日本書紀
續日本記　續日本後記
古語拾遺　釋日本記（卜部懐賢）
類聚國史（菅原道眞以下）　類聚三代格
三代實錄　令集解（惟宗眞本）
江家次第　中右記
玉葉　公事根源
古今著聞集　吾妻鏡
古事類苑　群書類從（塙保己一）
續群書類從（同上）　續々群書類從（同上）
新群書類從
大日本史粹　史學雜誌
學美史林　民俗藝術（雜誌）
花祭（早川孝太郎）
國史辭典　大日本百科辭典
大日本人名辭典

二、樂舞史論

歌舞音樂略史（明治21 小中村清矩）
歌舞音曲考說（大正4 高野辰之）
日本歌謠史（高野辰之）　日本音樂講話（田邊尚雄）

三、演劇史論

宋元戲曲史（王國維）　Natyacastra (B. C. 3th C—印度劇)
日本演劇の研究 高野辰之　日本演劇史論（吳文炳）
近世日本演劇の源流（原田孚二）

四、舞樂

內裏式（弘仁年間）　儀式
新儀式
教訓抄（天福年間 狛近眞）　體源抄（豊原統秋）
樂家錄（安倍季尚）　歌舞品目
舞樂圖　舞樂圖說（大枝如電）
雅樂通解（田邊尚雄）

五、伎樂

教訓拜
聖德太子傳曆　續日本記
延喜雅樂式

法隆寺伽藍緣起並資財帳　東大寺流記資材帳
西大寺流記資財帳　觀世音寺資財帳
班鳩古事便覽　東洋學報（第五卷第五號）

六、神　樂

三代實錄　中右記
類從三代格　公事根源
類聚名物考　樂家錄
神樂催馬樂入綾　神樂催馬樂通解（明治22）
神樂の研究　雅樂通解
舞樂圖說　日本音樂講話

七、能舞臺に關する參考文獻（散樂—猿樂—猿樂能）

唐會要　通典
日本記略　三代實錄
今集解　明月記
中右記　玉葉
江家次第　當代記
言談卿記　至德二年記
春日神主師盛記　藤涼軒日錄
光臺一覽　譚海
翰林葫蘆集　甲陽軍鑑
歌舞名目名類抄

舞猿樂記（藤原明衡）　傀儡記
世阿彌十六部集（世阿彌口述）　世子六十以後申樂談儀
花傳書　禪竹集
紀河原勸進猿樂記　異本紀河原勸進猿樂記
竣樂沿革考（川崎重恭）　猿樂傳記
謠曲と元曲（七里重惠）　能樂全史（大正6 橫井春野）
能樂盛衰記（大正十四 池內信嘉）

建築雜誌　三好筑前守朝臣亭法成之記（永祿四）
奉公覺悟之事　大內問答
雍洲府志　能之圖式
能道具寸法圖　續視聽草
能花傳書（寬文五）　舞樂葉葉大全（元祿十二）
能訓蒙圖繪（元祿十四）　謠訓蒙圖繪（享和二）
能樂講義（大正二）　能樂大辭典（明治四十一）
民俗藝術（雜）　日本風俗史講座
謠曲講座　能樂畫報
能樂　能樂旬報
能樂新報
謠曲界

八、田　樂

中右記　東大寺別當次第
榮華物語　玉葉
洛陽田樂記　滿濟淮后日記
太平記　花營三代記
文安田樂記　田樂故事
田樂法師由來之事

春日社若宮祭禮格式　春日大宮、若宮御祭禮圖
嘉慶元年春日臨時祭記　明德二年室町殿春日詣記

九、延　年

東大寺續要錄　滿濟淮后日記

蔭涼軒日錄　興福寺延年舞式
圓光大師行狀盈翼贊(元祿年中、華頂山誓山)
東鑑　嬉遊笑覽

B 歌舞伎劇場の變遷に關する文献

一、江戸時代の一般文献

江戸名所記(寛文二、淺井了意)　江戸眞砂六十帖廣本
人倫訓蒙圖彙(元祿三)　畫証錄(喜多村信節)
俗耳鼓吹(天明八、大田南畝)　橘窓自語(享和元、橋本經亮)
羇旅漫錄(享和二、瀧澤馬琴)　著作者一夕話(享和三、馬琴)
後日むかし物語(享和三、平澤平格)　嬉遊笑覽
還魂紙料(文政九、柳亭種彦)　貞丈雜記
柳亭記　事跡合考(柏崎具元)
寸錦雜綴　壑塚談(小川顯道)
金曾木(文化六、大田南畝)　尚古造紙揷(文政十三)
用捨箱(天保十二、柳亭種彦)　寛文見聞記
雲錦隨筆(文久元、曉晴翁)

燕石十種　德川文藝類聚
近世文藝叢書　近世風俗見聞集
古今要覽稿　百家說林
浪華叢書　百家隨筆

日本風俗史　近世日本世相史
名人忌辰錄(關根只誠)　東京市稿
武江年表　武江年表補正略

二、一般の劇書

舞曲扇林(河原崎權之助)　劍野老
野郎三座詫　芝居野槌
古今役者大全(寛延三、八文字舍其笑)　明和伎鑑(明和六、淡海子)
戲財錄(初代並木五瓶)　中古戲場說
聲曲類纂　戲場むかし話
芝居茶話　繪本戲場年中鑑
芝居乘合船　傳奇作書
南水漫遊(濱松歌團)　皇都午睡(西澤一鳳)
脚色余錄(西澤一鳳)　歌舞伎叢書
演劇文庫
演劇大全

逍遙選集 坪內雄藏)　歌舞伎細見(飯塚左一郎)
歌舞伎劇場の經濟史的考察　歌舞伎研究(雜誌)
歌舞伎劇講話(高野辰三　歌舞伎概論(飯塚左一郎)
歌舞伎繪大成　歌舞伎圖說

淨瑠璃史(高野辰三)　繪入淨瑠璃史(水谷不倒)
近世邦樂年表(義太夫之部)　竹豐故事
義太夫大系圖　義太夫大鑑

三、歌舞伎劇一般史

日本演劇史(伊原敏郎)　近世日本演劇史(同上)
歌舞伎年代記(立川焉馬)　續歌舞伎年代記(豐芥子)
續々歌舞伎年代記(大正十一、田村成義)　猿若年代記
明治劇壇五十年史(關根只誠)

四、創始期歌舞伎劇場に關する文献

大日本史料　慶長見聞集

慶長年錄　慶長著聞集
骨董集（文化十、岩瀨京傳）　東海道名所記（淺井了意）
嘉月庵國書漫抄（尾崎雅嘉）
德永種久紀行（元和、德永種久）　そゞろ物語（寬永十八）
當代記　懷橘談（承應二）

五、江戸時代の劇場に關する文獻

秀鶴日記　舞扇要用記（明和六、七世中村勘三郎）
事來山記（都傳內）　三座家狂言並由緒書
芝居町御觸書　樂屋圖會（寬政十二）
樂屋圖會拾遺（松好齋）　戲場訓蒙圖繪（享和三、式亭三馬）
三座例遺志（繪本榮家種）
劇場漫錄（文化八、默々漁隱）　繪本舞臺扇（文政二）
扁額帆範（文政二、文書堂）　戲場一覩顯微鏡（文政十二）
半日閑話、大田蕙）　劇場新話
三芝如樂屋雜記　尾陽戲場事始
三升屋二三治書留（三升屋二三治）　紙屑籠（同上）
賀久屋壽々免

六、歌舞伎劇場の變遷に關する研究

東都劇場沿革誌（關根只誠）　劇場圖會（明治卅一）
日本劇場史（後藤慶二）　歌舞伎書證史話（坪內雄藏）

以上

劇場建築と法規

（四頁下段よりつゞく）

非常口（つゞき）

併しながら後方二箇所の非常口は敷地周圍の狀態によつては非常に困難なる場合が少くない。此點に就ても大いに研究する必要を認める。又非常口の扉は外開にせよと規定してあるが、その趣意は主として內開を禁じたる意味であつて外開はときにその開閉に際して建築線を侵す缺點を生ずる場合があるので、外開に代ふるに引分戶を是認すべき場合もある。

其他の構造の制限

其他種々なる構造制限が現行取締規則に設けられてゐるが、現行規則は主として木造建築に對する必要上の制限であつて、現時の如く耐震耐火建築に係る劇場にあつてはその制限を根本的に改正すべき必要がある。いま一々之を說明し又批判することは却つてその煩に堪へない嫌があるので此處に之を省略す。

只最後に一言附記する必要があると認むる事は、劇場政策として十數年又は數十年以前の建築に係る舊式の劇場は須らく期間を定めて根本的に改築せしむるか、又は劇場たるの資格を剝脫するの必要があると思ふ。之は新築せられ行く劇場をして、構造上並に設備上益々改善せしむる機運を促進せしむると共に、大いに之を保護奬勵する政策として、舊來の不完全なる劇場に對しいたづらにその既得權尊重等の僻論に拘泥することなく、劇場改善の策を講ずべきであることを高唱して筆を擱する。

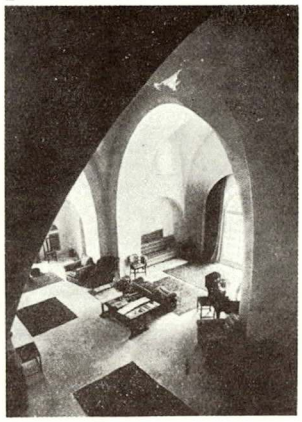
（完）

1

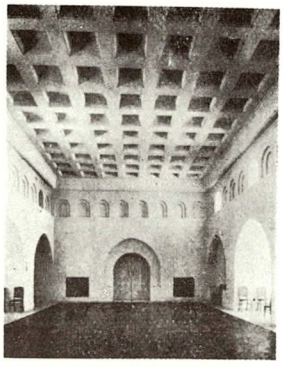




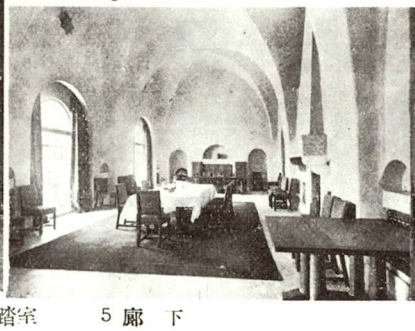
2



4



3



5



1 外　觀　　2 應接室　　3 食　堂　　4 舞踏室　　5 廊　下

ジエルサレム新政廳

設計　ハリソン氏

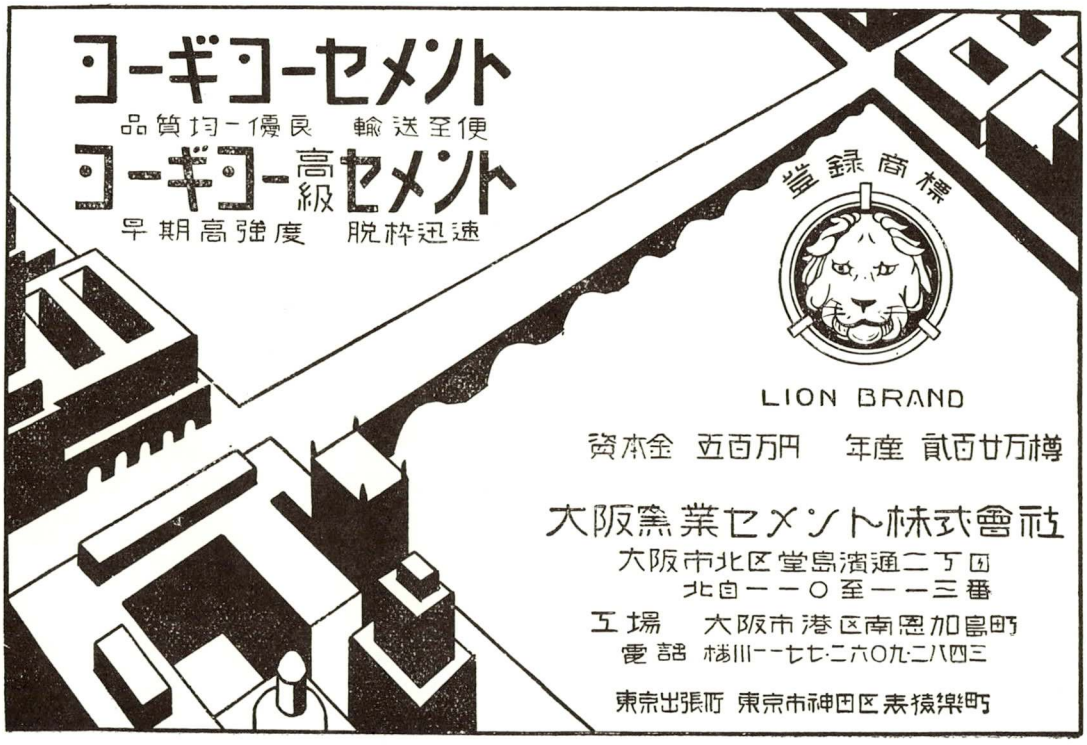
切取線

ヨーギヨーセメント

品質均一優良　輸送至便

ヨーギヨー高級セメント

早期高強度　脫枠迅速



資本金　五百万円　　年産　貳百廿万樽

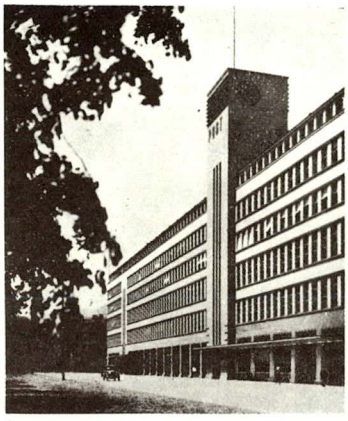
大阪窯業セメント株式會社

大阪市北区堂島濱通二丁目
北自一一〇至一一三番

工場　大阪市港区南恩加島町

電話　桜川一一七七・二六〇九・二八四三

東京出張所　東京市神田区表猿楽町

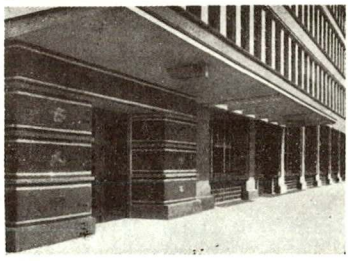


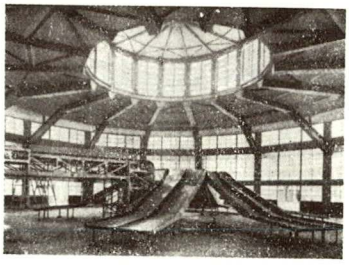
1



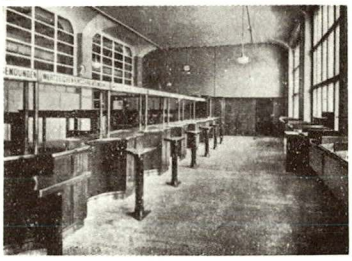
2

3





4



5

1—2 外　觀　　3 入　口　　4—5 內　部

瑞西　チユーリツヒ・中央郵便局　　設計　ブレーム氏

切　取　線

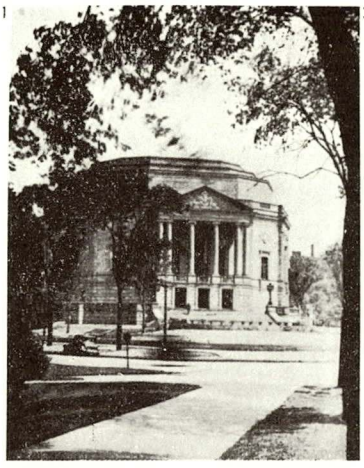
新刊　日本趣味を基調とせる　最近建築懸賞圖集　定價 70錢 稅 10錢

新刊　世界最新建築圖集　定價 50錢 稅 8錢

補增三版　學校建築圖集　定價 100錢 稅 18錢

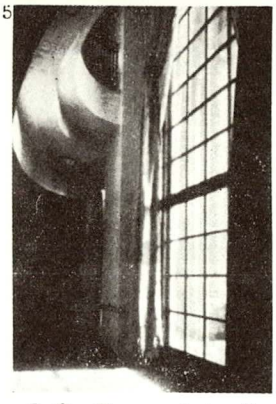
婦人と住宅知識　定價 100錢 稅 12錢

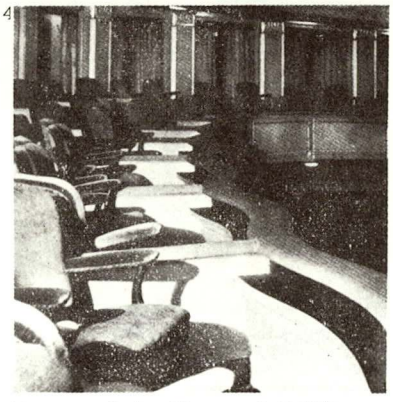
社團法人 日本建築協會發行　大阪西區大同ビル720 振替口座大阪39975　賣捌 丸善本支店 柳々堂書店













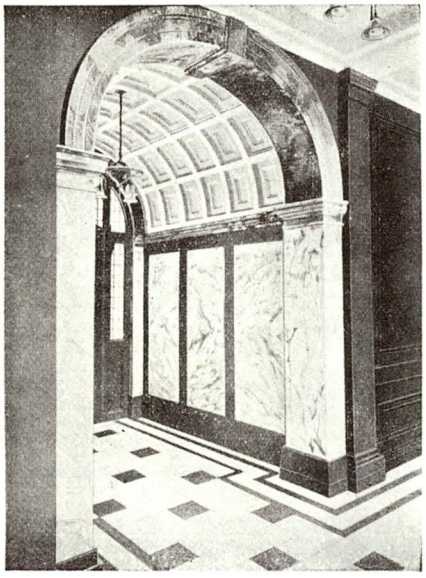
1 外觀　2 グランド・ホワイエー　3 内部　4 中二階ボックス　5 大窓　6 音樂室

米國　クリーブランド・セベレンス・ホール

設計　**ウオーカー＋ウイーク兩氏**

切取線

DUNLOP RUBBER FLOORING





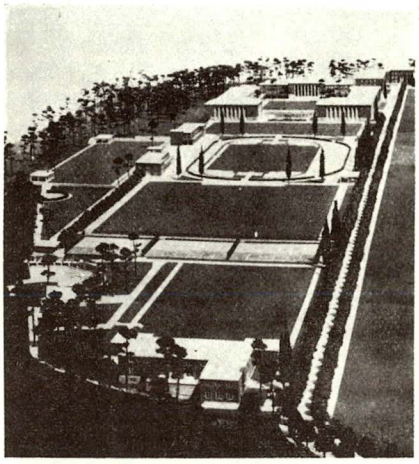
弊社製ゴム床敷は既に數多の官衙、會社、汽船並に諸家庭に敷込まれ、快適なる其の感じは御使用家各位の御滿足御賞讃を得つゝあります。御必要に應じ何時にても社員を派し詳細に亘り御要求事項を御說明申上げます。

神戸市脇之濱

ダンロップ護謨(極東)株式會社

各地出張所

ダンロップ護謨床敷

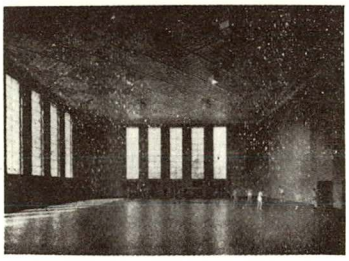


1

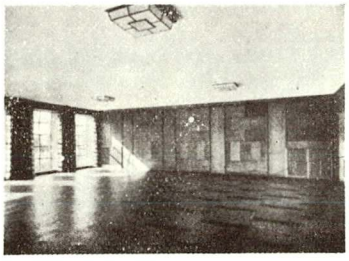


2

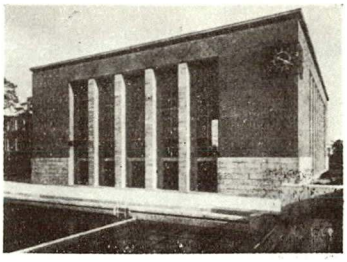
4



5



3



1 全景　　2—3 ジムナジューム　　4—5 内部

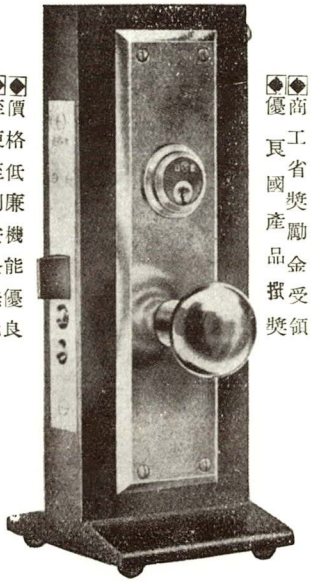
獨逸　伯林・スポーツ・フォーラム　　設計　マーチ氏

切取線

純國産日金印シリンダー錠

シリンダー錠の種類及寸法

種類	寸法	ケース	バックセット	フロント
五〇一號	長	一四五粍	六三粍	二〇三粍
	巾	九二粍		三二粍
	深	二八粍	（二吋半）	（一吋四分ノ一）
五〇二號	長	一四五粍	六七粍	二〇三粍
	巾	九四粍	（二吋八分ノ五）	（一吋）
	深	一九粍		
五〇三號	長	一〇六粍	五〇、五粍	長一四八粍
	巾	七〇粍	（二吋）	巾二二粍
	深	一六粍		（八分ノ七吋）
特殊安全裝置付五〇四號	長	一四五粍	六七粍	二〇三粍
	巾	九四粍	（二吋八分ノ五）	（一吋）
	深	一九粍		
一〇〇二號	長	一〇八粍	六三粍	一五二粍
	巾	八六粍	（二吋半）	（一吋）
	深	一九粍		



◆價格低廉機能優良
◆至便至利安全無比

◆商工省奬勵金受領
◆優良國産品擢奬

◆合鍵絶無、盗難除完全生命財産の安全無類
◆ボタン一つの作用にて外部よりは鍵無くしては開扉不能なるも内部よりは鍵を用ひずして開扉自由なる故地震火事等の非常時に安全且便利至極
◆貸事務室、アパートメント、ホテル、住宅玄關、應接室用として絶好必須
◆不體裁なる棒鍵に代ふるに優美高雅なるニッケル製鍵となる
◆五〇四號は特殊裝置を施し安全の上にも更に安全の構造となつて居りますから重要室、玄關用として天鎖の福音マスター鍵は御希望に應じます

特徴及用途



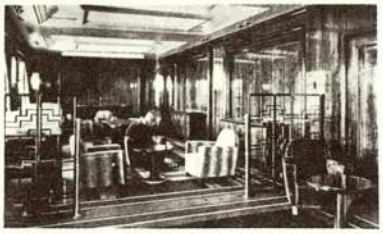
本社　大阪市西淀川區大仁東二丁目
電話土佐堀(44)五八五番二八五〇番
五八六番四一〇六番

出張所　東京市丸ノ内有樂町報知ビル
電話丸ノ内(23)四九七二番
三六〇四番

日本金具株式會社










1 廣　間　2 主階段　3 大食堂　4 一等食堂　5 二等サロン　6 特等寢室　7—8 特等サロン

"アトランテツク" 號の裝飾と家具

切　取　線

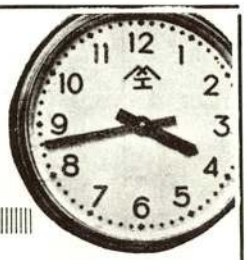
『國產』

大阪 合資會社 藤田工業所製

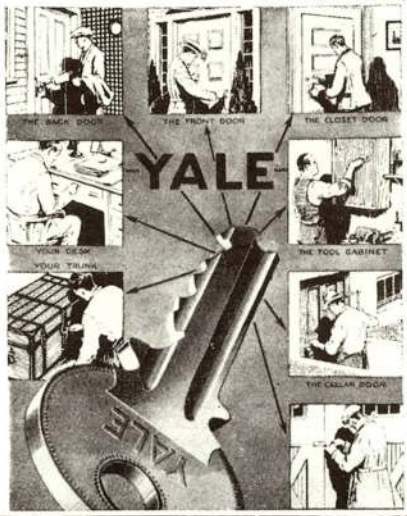
磁石式千歲型電氣時計

特徵　磁石式ニツキ電池ノ必要ナシ

運轉費用輕微
時間絕體正確



YALE & TOWNE MFG CO., U. S. A.



高級建築金具類

總代理店

御申送　新型錄御越次第呈

株式會社 安宅商會機械部

ホーン株式會社

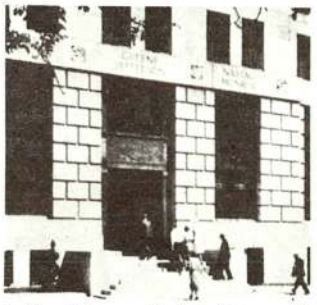
本社　大阪市東區今橋五丁目十四番地
電話本局 1509-12, 3275-76, 3912-13

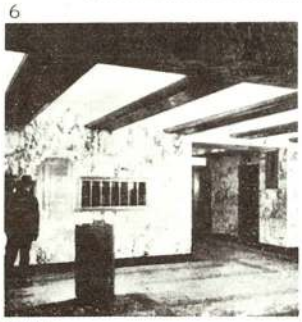
支店　東京・名古屋・大連・京城
博多・紐育・倫敦













1 外觀　2 主入口　3 橫入口

1—3 米國 紐育州 アルバニー・州廳ビル

設計 ジョーン＋ホーガード兩氏

4 外觀　5 入口　6 廣間

4—6 米國紐育 タイムリ取引塲ビル

設計 スローン＋ロバートソン兩氏

切取線

最新發明　防水工事界之革命

專賣特許

セメファルトプライマーに就て

發明者　阪口芳三郎

防水工事の施工に際し從來アスファルトをコンクリートに完全に密着せしむるにはアスファルトプライマー（アスファルトを輕油等にて稀釋したるもの）をコンクリート面に塗布しこれに依りてコンクリートとアスファルトとの密着を容易ならしむる方法を採り來りたるも該方法は某國人の有する特許權（特許第四八、〇三一號）に抵觸するものにして識者の等しく患ひつゝある處なりしが發明者は此コンクリート面にアスファルトプライマーを塗布する事の前述の如く既特權に抵觸する事は吾が國防水工事界に取りて由々しき問題なる事に留意し何等該特許權に觸れずして從來の缺陷を除去し且つ施工簡易なるプライマーを發見する事に努力し遂に今回優秀なる理想的プライマーの本邦獨自最初の特許權を穫得するに至れり。

次に從來のアスファルトプライマーは次の如き缺陷あり。

1、コンクリートが完全に乾燥せざる場合はこれに塗布する事を得ず即ち水氣の爲浮上りてその用を爲さざればなり。（施工能率低下）

2、アスファルトプライマーは塗布後猶相當時間の經過を待たざれば防水工事を施工することを得ず。（施工能率低下）

3、アスファルトプライマー塗布後防水工事前に於て降雨等ありたる時は洗ひ流さるゝ處あり。（膠着性不足、防水能力不備）

4、コンクリートとアスファルトとの密着性弱し。（膠着性小）

セメファルトプライマーはアスファルトと最も完全に融合する特性を有し且つ以上の缺陷を補ふべく案出せられたるものにして次の特徴を有す

1、特性　コンクリートに水氣あるもアスファルトを完全に密着せしむ。

2、施工能率の增進　塗布後一時間內外にて防水工事を施工することを得。

3、防水性　セメファルトプライマーはそのもの自身にて大なる防水能力を有するを以て塗布後降雨等の爲絶對に洗ひ流さるゝことなし。

4、膠着性　セメファルトプライマーはコンクリート內部へ迅速に浸透し、且其上に塗布したるアスファルトと强く結合する故にコンクリートと防水層とを完全に膠着するものなり。

5、施工簡易　セメファルトプライマーは淡精なる液體にして乾燥早きが故に刷毛引きにて施工最も簡易なり。

別途使用

1、本劑は防濕防蟲の特性を有するが故に建築物床下等に塗布すれば衛生上最もよし。

2、右の外（糊が非常によくつく）の特性をも有する爲リノリウム下塗用として最も推賞さるべきものなり。

發賣元

工材社

本社　〈大阪市西區京町堀通一丁目四〇番地　〈電話 土佐堀五八〇九番

出張所　〈東京市芝區南佐久間町二丁目三番地　〈電話 芝二五〇六番

昇降機速度に就いて

日本エレベーター製造株式會社
工學士 長野文一
同社 藤川保

昇降機の輸送能力を增進し所謂能率を高むる手段は幾多あれども先づ第一に考へられる方法は其の速度を增す事である。『スピード』の現代に於ては當然の事ではあるが、然し乘降客の出入り又は昇降機及通路扉の開閉に相當の時間を要するのみならず、昇降機の始動停止には乘客に不愉快の衝撃を感ぜしめざる樣に速度を漸次に增減すべきものであるから其時間中の平均速度は大體最高速度の二分の一にしか當らず、然もその加速及減速の時間が昇降機の運轉時間の大部分を占むる事實を併せ考ふれば、速度を倍にするも決して能力の倍にならぬ事は明白である、速度が早くなればなる程單なる速度の增加は輸送能率增進の割合を段々減少するので、此の點より見れば速度には一定の合理的な程度があることが想像されるのである。

外國の建築物の樣に數十階の高さで、急行用昇降機の必要ある際は別問題とするも、我國の樣に建築物の高さが百尺と法規で限定され、其の使用狀態が主として各階停止のエレベーターではその速度を餘程よく吟味するに非ざれば、早い昇降機が遲い昇降機よりも却つて能力が悪いと云ふ奇現象を呈する場合も生ずる、これ等は外國の高層建築用昇降機と餘程趣を異にし居れば、單に外國の例を其のまゝ我國の建築に應用せんとして却つて不利となることがあり得るのである。

地階から屋上まで停止せず昇降する急行用昇降機では無論、如何なる場合でも早い速度の是降機は早く目的階に到着するのが當然であるが、各階毎に停止せしむる條件がつけば上述の如き矛盾が起るのである。或る建築物に毎分三百五十呎と二百五十呎の二通りの昇降機が併置され、實際に其の使用狀態を精しく調査したるに『ローカル』用(各階停止)としては二百五十呎のものが三百五十呎のものより早い事實を見出した事さへもある。

速度を增せば其の比例で原動力の馬力數は增加し、最初の設備費は著しく增大するのみならず、其の昇降機の使用さるゝ間は電力の著しき不經濟を敢へてしなければならぬのである。若し此の事實が十分に諒解さるゝならば斯る計畫をなすものなき筈なるに、最近我國では一般に斯る不經濟なるエレベーターが可成り多く使用されつゝある事は誠に不思議な現象であると考へらるゝのである、これは畢竟高速度と云ふ事に幻惑されて速度と能力との關係即ち平均速度の考察が不充分であるから起る矛盾とも言ひ得るのである。故に昇降機の計畫に際しては最高速度よりも寧ろ平均速度を十分研究してその仕樣を決定すべきでないかと思はれる。

今此の最高速度と平均速度との關係を數字的に研究するに先ち、第一に考ふべき事はエレベーターの電動機による加速と制動機による減速度合であつて、その兩方を出來る丈け早くすれば平均速度は早くなるも、餘り早くすれば乘客が著しき衝撃を受け、不愉快に感ずるのである、此の度合にはその點から一定の限度があることを知らねばならぬ。故に實際は加速及減速度合の變化を研究することが必要なるも、斯くては餘り問題が複雜となるから此處では始動及停止の速度の增減は『ユニホームアクセラレーション及リターデーション』の法則によるものとして問題を取扱ふことゝする。從來の實驗によれば、此の度合は兩者共每秒每秒四呎の加速度が普通であつて其以上の加速度は先づ實用上不便であり且つ不利益と考へられる外國では幾分これよりも早きものを使用するところあれども、我國では未だ一般の大衆が昇降機に慣れざる爲めにこれ以上の度合にす

ることは實用上全く必要なしと斷じても差支はない。

今階高十三尺の場合その平均加速及減速度合を毎秒毎秒四呎とすれば、最高速度を何處まで出し得るかを考ふるに

但し極限の最高速度とは十三尺の昇降間に於て最高速度になつた瞬間の速度にしてその瞬間より減速を始め十三尺の距離を昇降するものと見做す。

S　加速及減速時間中に通過した距離（呎）

F　毎秒毎秒の加速及減速度合（呎）

T　加速及減速の時間（秒）とすれば

$S=\frac{1}{2}FT^2$

$13'=2\times\frac{1}{2}\times4\times T^2$

$T^2=\frac{13}{4}=3.25$

$T=\sqrt{3.25}=1.8$ 秒

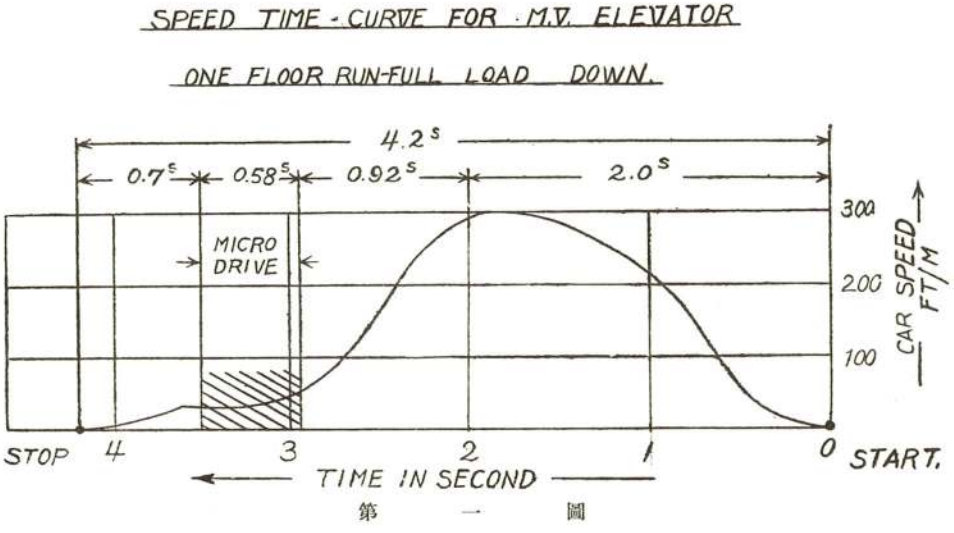
即ち加速及減速に夫々一、八秒を費し此の時間中に到達し得る昇降機の最高速度は

$4\times1.8\times60=432$ 呎/毎分

となる、つまり最高速度毎分四百呎のエレベーターでは各階停止の條件がつく時は、最高速度に達したる其の瞬間よりすぐ停止をせざれば床面を通り越し、最高速度で走る時間は全くないのである。是れを言ひ換ふれば一階昇降時間中の平均速度は約二百呎に相當するのであつて、誰しも平均速度の餘りに低きに以外の感を抱くのであるが、昇降の距離は平均速度と時間との相乘によることを知る時は更に其の結果の小なるに驚かざるを得ない。

以上は單なる理論的考察に過ぎないが、實際に於ては制動機なるものは時に調子が悪くなり勝ちであるから、實際の運轉にはこれより更に低き速度に定むることを必要とする、殊に停止の際床面を一致せしめる事は可成り困難な仕事であつて、上りすぎ又は下りすぎになることを防ぐ爲に尚更最高速度は上記のものより小さく定むるのが實際上設備並に維持の點よりも適當なる處置である。

曲線第一圖は本社が實際使用して居る昇降機に就き研究したる毎分三百呎の『マルチボルテージ』式昇降機の一階昇降に對する速度時間曲線で、前述の様に最高速度に達すると同時に減速を初め居る事が明白に示されて居る、停止に際しては圖中『ハツチング』を施されたる場所は『マイクロゾーン』で『フオールスストップ』を防ぐ爲め自働的に『モーター』が『マイクロドライブ』さるゝ事を示し此の種『エレベーター』には是非此裝置が必要であるから、それを考慮すれば、この表によりて見る通り『ローカルサービス』用では最高三百呎見當が實際の極限最高速度と云ふ事になる、理論的計算の場合と餘程相違するようであるが、各種の點を考へて調整するのでこれ丈の差を生ずる。



第一圖

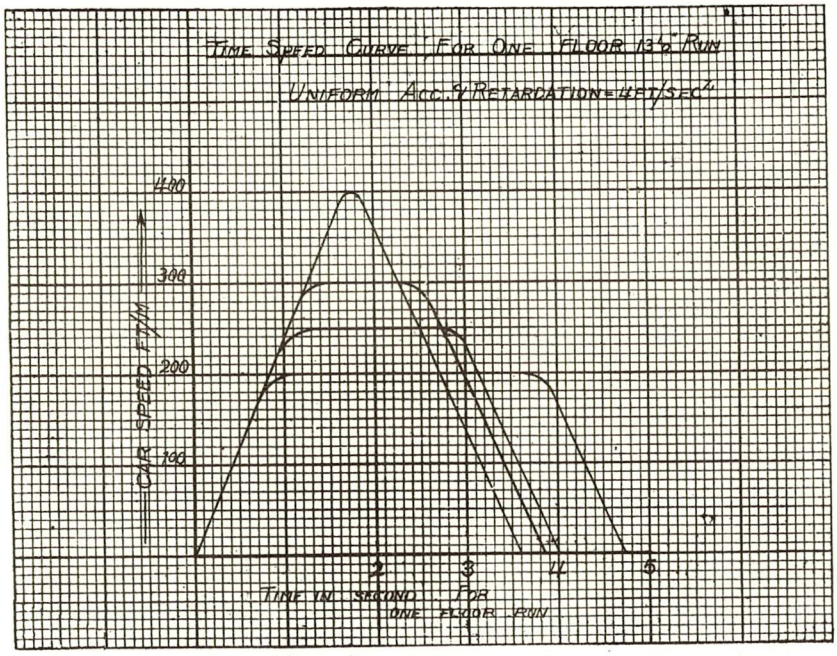
次に理論的計算に依る各種速度の昇降機に對する一階昇降の時間及平均速度を表並に曲線にて示せば。

次表並に曲線第二圖、第三圖の通り。

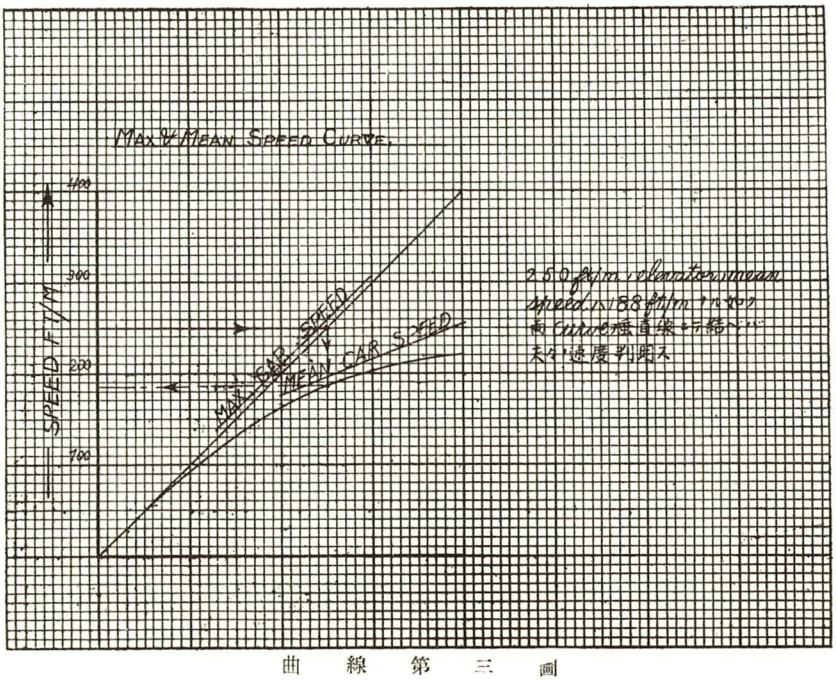
第二圖は第一圖同樣各種昇降機の速度時間曲線で、平な部分が最高速度で走つて居る部分で、之が

最高及平均速度表（計算に依る）

最高速度（呎—毎分）	十三尺の昇降に要する時間（秒）	平均速度（呎—毎分）
400	3.62	217
300	3.87	202
250	4.15	188
200	4.74	165
100	8.18	95
50	15.72	49.5



圖二第線曲



圖三第線曲

長い程平均速度を高め能率はよくなる。第三圖は最高速度と平均速度の割合を明示する物で、速度が早くなればなる程平均速度との差が甚しくなる事實を明瞭に示して居る。

最高四百呎の昇降機といへば如何にも早き様なれど平均速度は僅か二百呎餘りで一階昇降では二百五十呎のものに比し僅か半秒丈計算上早く目的階へ到着し得る可能性がある丈で實際的には『フオールスストツプ』等の關係より上述せし通り、二百五十呎のものより却つて能率が悪いのが實例である。所が昇降機の構造の上より見るに、最高二百五十呎以上になれば、加速及減速度の調節の點より交流電動機は使用出來ず、直流型マルチボルテージ式にしなければならぬので、此の速度を境として凡ての設備が一變されるのである。

昇降機の交流電動機を利用する事が最初の設備及維持費の上に於て經濟的であり、構造は簡單堅牢なる爲故障少なき事直流電動機型より數等優れることは特に注意を要する點である。

唯最高速度を二百五十呎以上にせんが爲めに

種々の點に於て利益ある交流電動機も使用するを得ず、直流昇降機を採用するのであるが、その際はこの速度の增加と云ふ事が餘程輸送能力を增進せざれば折角多大の經費及故障をも度外視して速度增加を企てた事が無意義となるのである、然るに前述の通り此の二百五十呎の速度を境として、これ以上の高速度は餘り實際の能率を增進せぬ事實を併せ考へると『ローカルサービス』用に此の種エレベーターを採用する事は餘程研究すべき餘地があると考へられる、

建物が少くとも數十階で急行用昇降機の必要ある外國の建築物で六十尺乃至七十尺位無停止のまゝ昇降するものにありては、マルチボルテージ式の速度三百呎以上六百呎見當のものが一般に採用され百貨店の如き昇降共に各階停止をする必要のあるものは二百五十呎を限度とすると『ローナルドグリーソン』氏も其の著書に論じて居るが、其の結論の基礎は以上の樣な見地からだと考へて差支はない我國に於ける『オフヒスビルヂング』等に就て調査するに、晝の閑散時には無停止の儘運轉するも最も多く昇降機の能力を發揮すべき朝夕の混雜時には各階停止をせざれば役に立たないのであるから、現在の軒高百尺以下、十階足らずの建物では先づ速度を二百五十呎程度にすることが輸送能力には理論上及實際上最も適當であると信ずる。

次に比較的閑散で昇降機に運轉士を專屬せしむる必要のない個人住宅又は近時盛んに計畫されて居る『アパートメントハウス』等に利用する自働式昇降機の速度は最高百五十呎を適當とする、制動機の關係からこれ以上の速度にすれば停止した時に建物との床面を一致せしむる事が困難であるから實際それを一般の標準として居るようである。上述の如く經濟的及構造上の見地から我國の建築物の實狀より見て速度の上から昇降機を區分する場合には

低速度　百五十呎まで
中速度　百五十呎以上二百五十呎まで
高速度　二百五十呎以上

とし、一分間二百五十呎の速度を最高速度及び經濟速度と見做して差支はない。卽ち特殊な用途に屬するもの丶外この中速度昇降機が最も廣く用ひられ、凡ての目的を完全に達するのである。

昇降機の速度を增加すれば設備費、電力費及維持費を著しく增加する、その割合を大體表示すれば右表の如し

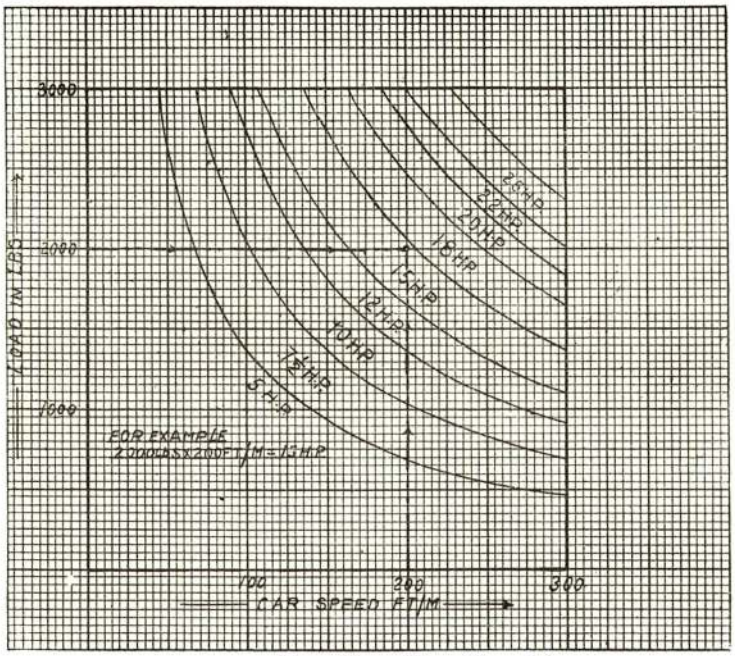
（例として積載量二千封度ケージ大さ五尺角停止個所九個所總高一一五、〇尺のエレベーターを取り、通路側にはパネル扉を使用するものとす）
（電力費はエレベーターを一日十時間使用し、維持消耗品の內にはカーボン、油、ワイヤロープ等の取替費を見込み人件費は一切除外す）

積載量	速度	馬力數	設備費(圓)	電力費（ヒロワット時間/月）	維持消耗費(圓)（一ヶ月）	摘要
2000封度	300呎	DC 20 HP	21.400.00	1700 KWH	42.00	ギヤードマルチボルテージ式
2000封度	250呎	AC 20 HP	12.500.00	450 KWH	20.00	
2000封度	200呎	AC 15 HP	11.800.00	400 KWH	16.00	
2000封度	125呎	AC 10 HP	11.300.00	330 KWH	14.00	

尙昇降機の故障は從來の統計によれば、制禦裝置及保安裝置の電氣接觸の不備より生ずるものが大部分を占め、此の電氣接觸の完全を期するためには、其の構造は勿論其の接觸片の數を減少せしむる事に各製作者は大に努力して居るのである、其の意味より云へば、速度の增加は馬力數の增大を伴ふも同じ交流式のものなれば餘り其の接觸の數は變化なきも、直流式になれば急に增加して故障の可能性が著しく多くなる『カースキツチコントロール』で停止個所十個所の昇降機に例を取り接觸片の數を示せば次表の如し。

之を要するに同じ交流式のものなれば、經濟的方面の速度の增加に伴ふ增進率は極めて少く、多くは其の比率が速度比の二乘根以內にある。最高速度二百五十呎を限度としてそれ以上になれば其の構造が全然相異する爲め高速度昇降

馬力數	型式	接觸片の數				摘要
		制禦盤	ケージ	通路	總計	
5	交流式	9	7	14	30	停止階數十個所にしてカースキッチコントロール式操縦法とす
10	〃	13	7	14	34	
15	〃	13	7	14	34	
20	〃	13	7	14	34	
20	直流式チルマ・ルテージ型	79	26	22	127	



曲線第四圖

機に伴ふ經濟的負擔は急に增加する事は表示により明かである。

二百五十呎のエレベーターを三百呎にすれば設備費維持消耗費は倍となり、電力費及接觸片數は大略四倍に增加し、速度も此の程度になれば僅かの速度增加が如何に經濟的負擔を大ならしむるかを知るのである。

最後に昇降機速度に關する參考資料として馬力曲線を第四圖に示す、圖中縱線は積載量、橫線は昇降速度で適當の垂直及水平線の交叉點が馬力數を表はし、二千封度二百呎交叉點は十五馬力ゾーンにある故に十五馬力とする如く應用する、但し本表は交流式で計算され、試驗荷重は規定積載量の二割增し迄は安全である、もし直流電動機を使用する場合は直流式は交流電動機よりも起動トルクが大なるため、交流式の場合の八十五%に相當する馬力數で十分である。

(完)

訂正

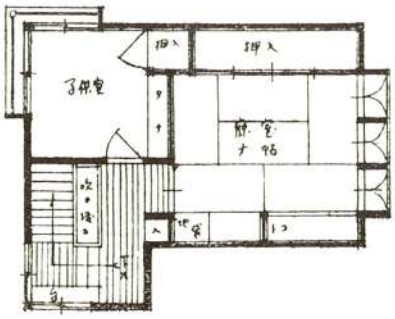
京阪神新建築集の通し頁は左の通り正誤致します。

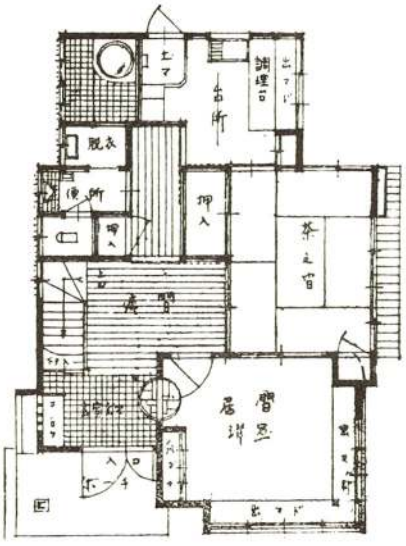
十月號
四七頁は五一頁
四八頁は五二頁
の誤り

十一月號
四九頁は五三頁
五〇頁は五四頁
の誤り

第二號住宅



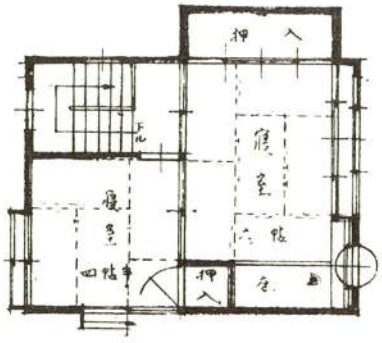


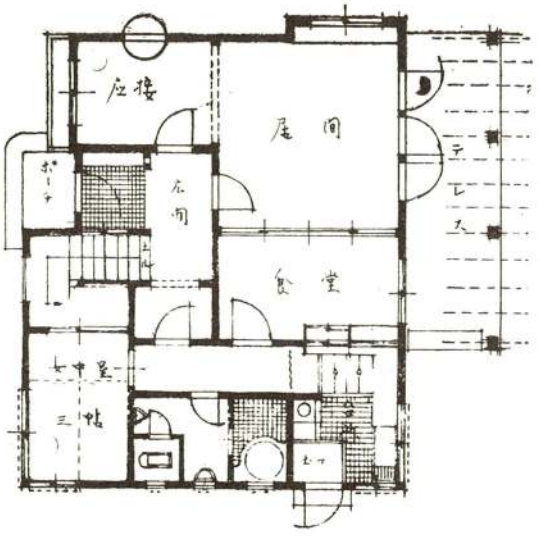


第二號住宅　木造洋風二階建
出品者　大林組
建坪　一階　17.5坪
二階　10.55坪
賣價　(庭園共)但し敷地を除く　5,300圓

第一號住宅







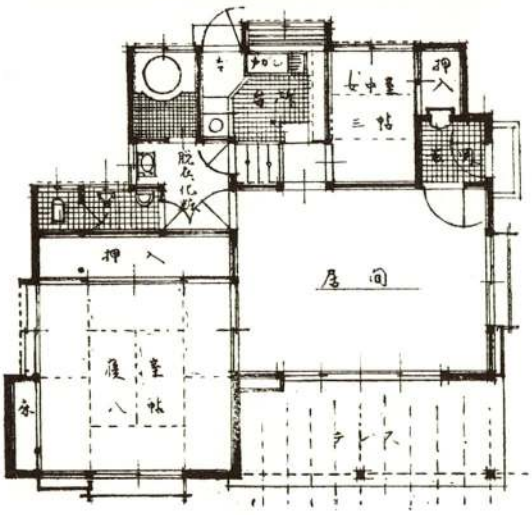
第一號住宅　木造洋風二階建
出品者　大林組
建坪　一階　17.96坪
二階　10.15坪
外にテラス　5.6坪
賣價　(庭園共)但し敷地を除く　5,450圓

神戸鈴蘭臺生活改善健康住宅展覽會出品實物住宅

第四號住宅





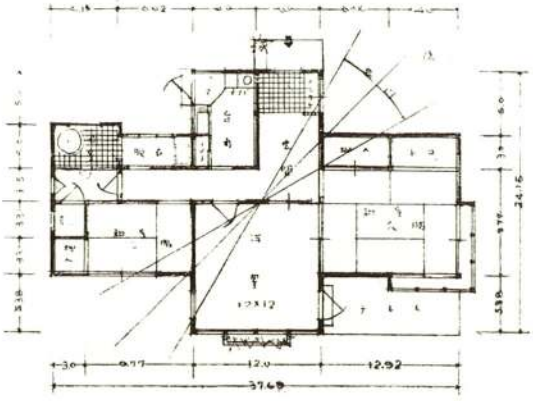


第四號住宅　木造洋風平家建
出品者　新興土地建物株式會社
建坪　18.73坪
外にテレス 3.05坪
賣價　(敷地を除く)　3,880圓

第三號住宅







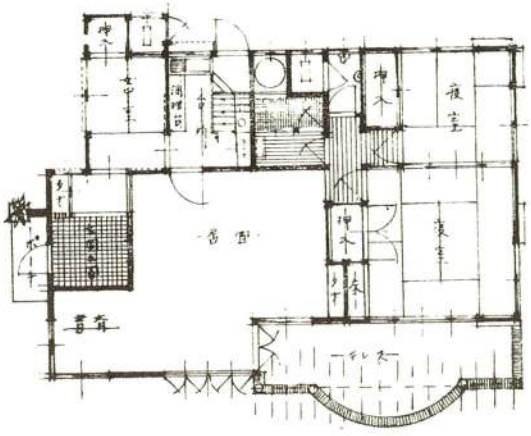
第三號住宅　木造洋風平家建
出品者　大林組
建坪　17.36坪
外にテレスポーチ 2.4坪
賣價　(庭園共)但し敷地を除く　3,290圓

神戸鈴蘭臺生活改善健康住宅展覽會出品實物住宅

第 六 號 住 宅

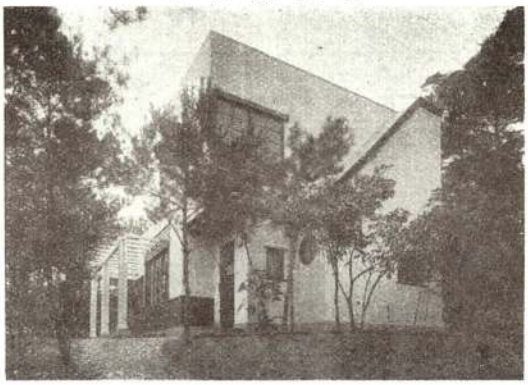


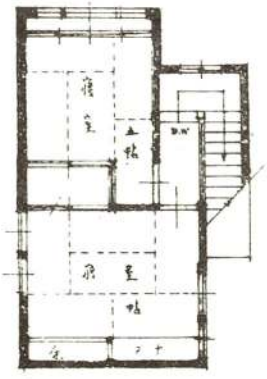


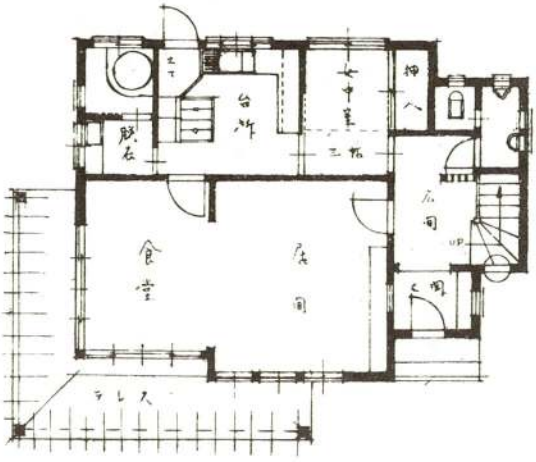


第六號住宅　木造洋風平家建
出品者　新興土地建物株式會社
建　坪　一階　26.74坪
外にテレス　3.00坪
賣　價　（敷地を除く）　5,240圓

第 五 號 住 宅







第五號住宅　木造洋風二階建
出品者　新興土地建物株式會社
建　坪　一階　17.1 坪
二階　7.92坪
賣　價　（敷地を除く）　4,840圓

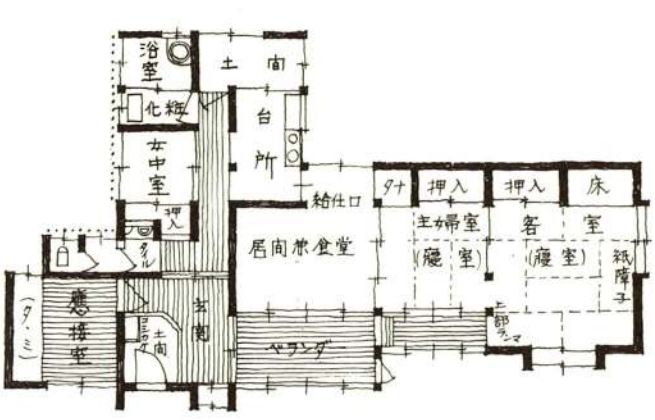
神戸鈴蘭臺生活改善健康住宅展覽會出品實物住宅

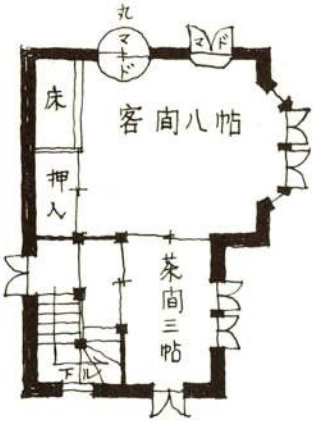
第八號住宅



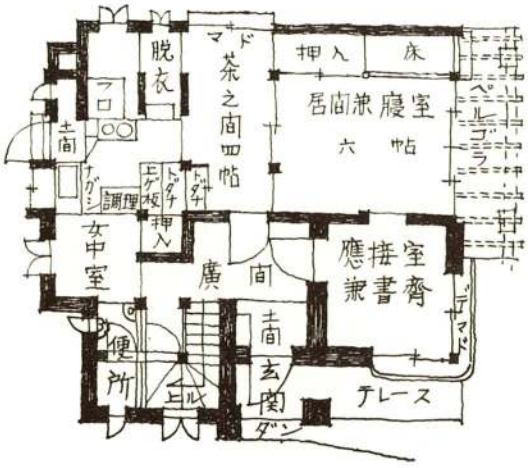
第七號住宅







第七號住宅　木造洋風二階建
出品者　金森工務店
建　坪　一階　16.93坪
　　二階　8.46坪　外にテレス 2.66坪
賣　價　（敷地を除く）　4,050圓



第八號住宅　木造和風平家建
出品者　神戸高等工業學校
建　坪　31.5坪
賣　價　（敷地を除く）　4,250圓

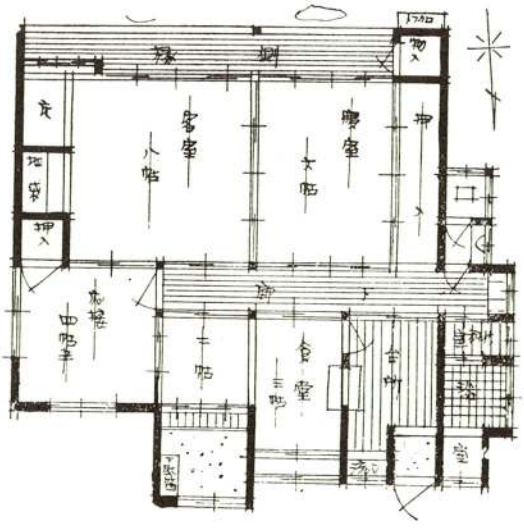
神戸鈴蘭臺生活改善健康住宅展覽會出品實物住宅

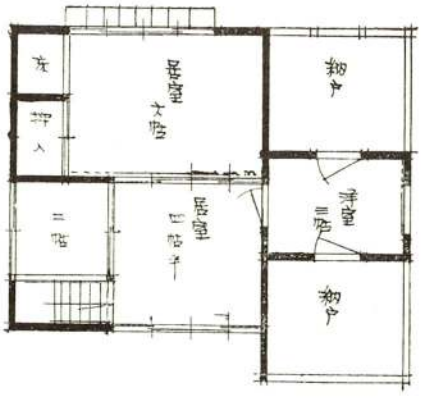
B 號 住 宅



A 號 住 宅









A 號 住 宅　木造和風二階建
出品者　竹井工務店
敷地坪數　57.20坪
建坪數　32.33坪
賣價　(敷地共) 5.000圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

B 號 住 宅　木造和風平家建
出品者　竹井工務店
敷地坪數　72.28坪
建坪數　25.92坪
賣價　(敷地共) 3.850圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

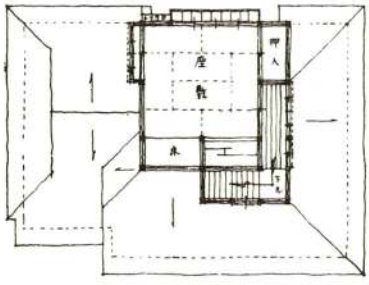
京阪香里園改善住宅展覽會出品實物住宅

D　號　住　宅

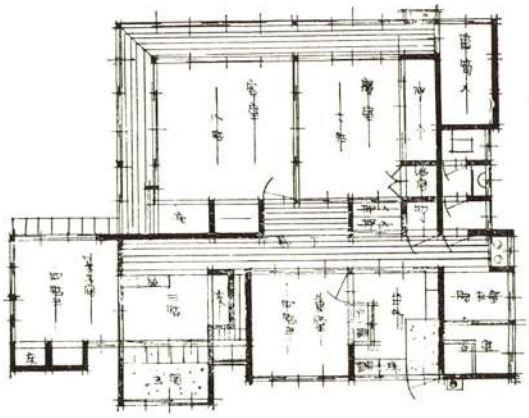


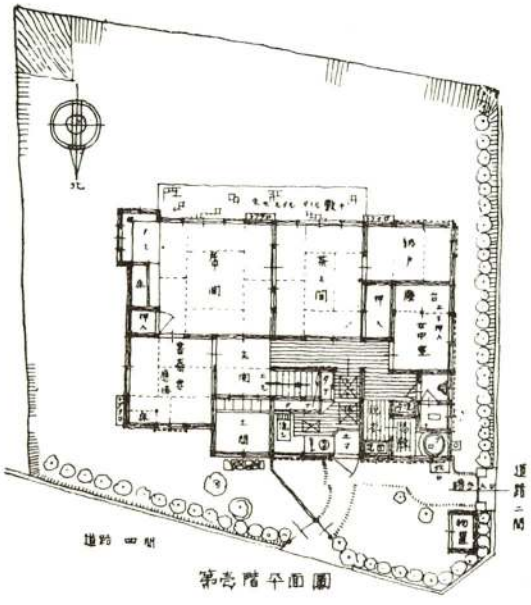
C　號　住　宅





第貳階平面圖





第壹階平面圖

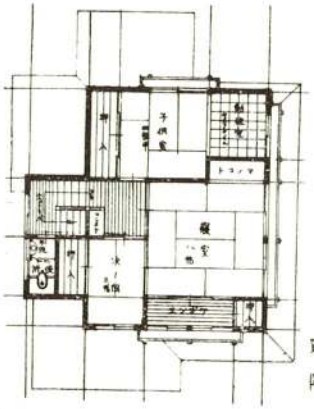
C　號　住　宅　　木造和風二階建
出品者　竹井工務店
敷地坪數　132.62坪
建坪數　33.54坪
賣價　(敷地共) 6.000圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、塞所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

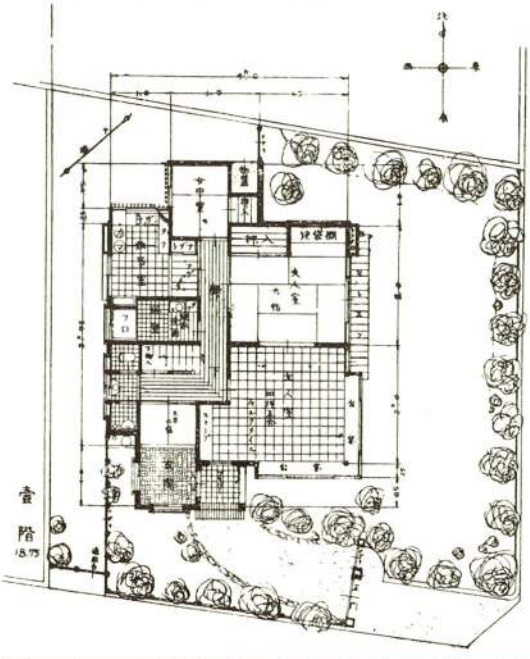
D　號　住　宅　　木造和風二階建
出品者　竹中工務店
敷地坪數　82.16坪
建坪數　28.25坪
外に物置　0.375坪
賣價　(敷地共) 4.500圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、塞所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

京阪香里園改善住宅展覽會出品實物住宅

F 號 住 宅

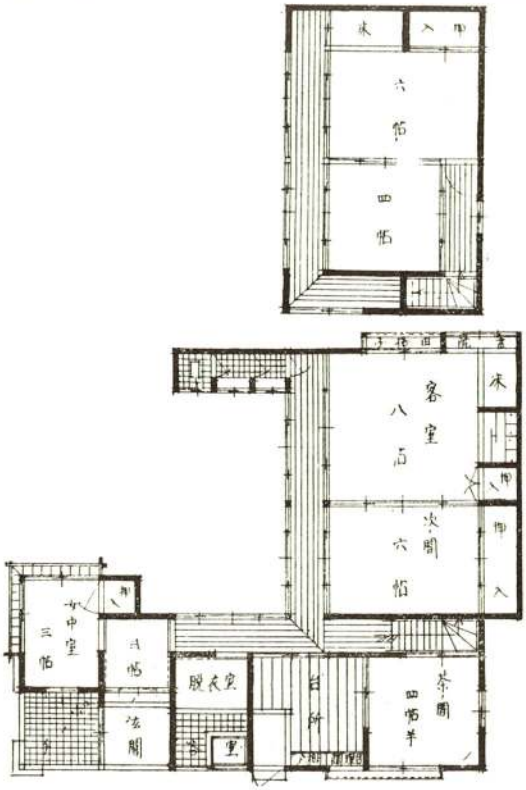






E 號 住 宅





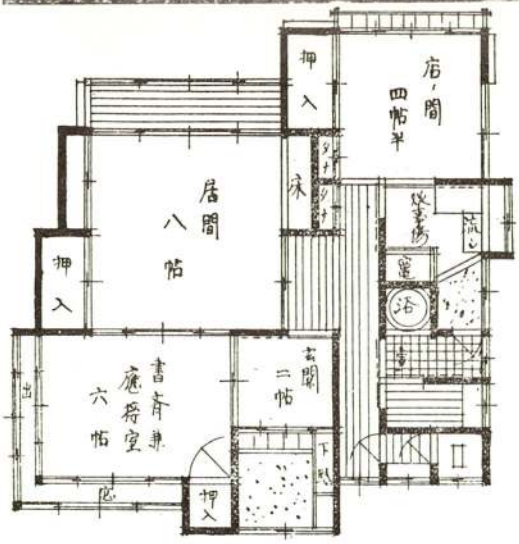
E 號 住 宅　木造和風二階建
出品者　前田組
敷地坪數　79.59坪
建坪數　39.03坪
賣價　（敷地共）5.700圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

F 號 住 宅　木造和風二階建
出品者　清水組
敷地坪數　75.01坪
建坪數　32坪
賣價　（敷地共）4.500圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

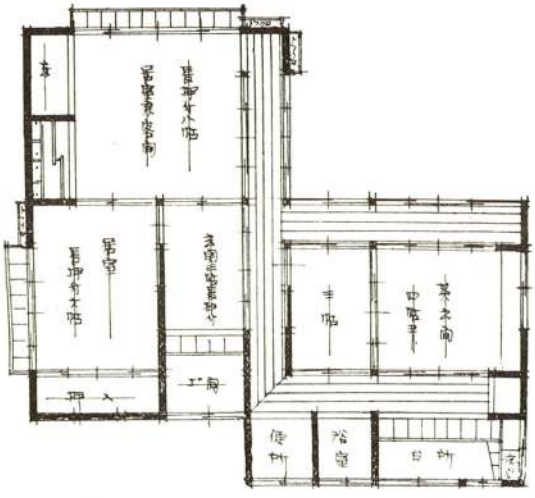
京阪香里園改善住宅展覽會出品實物住宅

H　號　住　宅



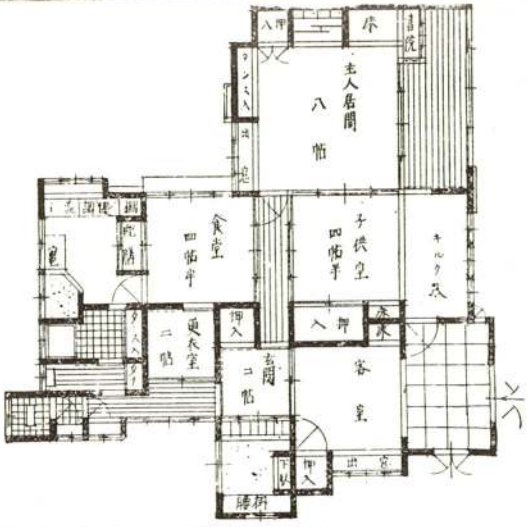


H　號　住　宅　　木造和風平家建
出品者　　大林組
敷地坪數　　82.92坪　　建坪數　27.2坪
賣　　價　　（敷地共）　4.500圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む



G　號　住　宅





G　號　住　宅　　木造和風平家建
出品者　　朝永建築工務店
敷地坪數　　76坪　　建坪數　30.62坪
賣　　價　　（敷地共）　4.850圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

I　號　住　宅



I　號　住　宅　　木造和風平家建
出品者　　納谷富藏
敷地坪數　　68.30坪　　建坪數　26.45坪
賣　　價　　（敷地共）　3.600圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

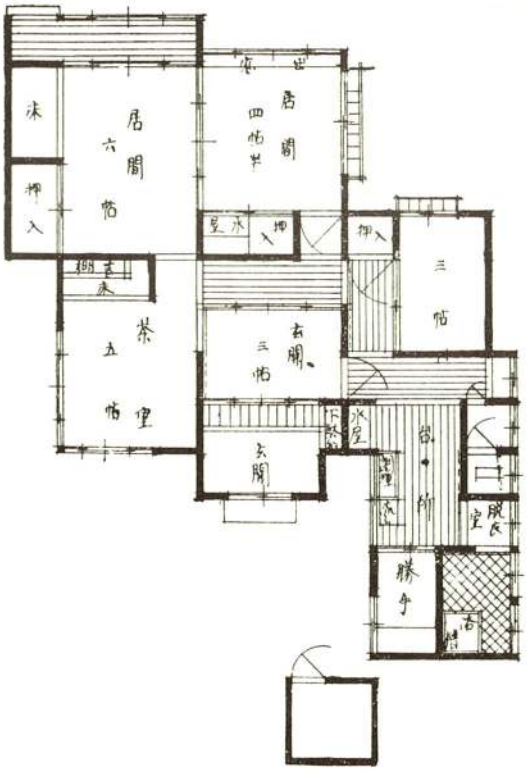
京阪香里園改善住宅展覽會出品實物住宅

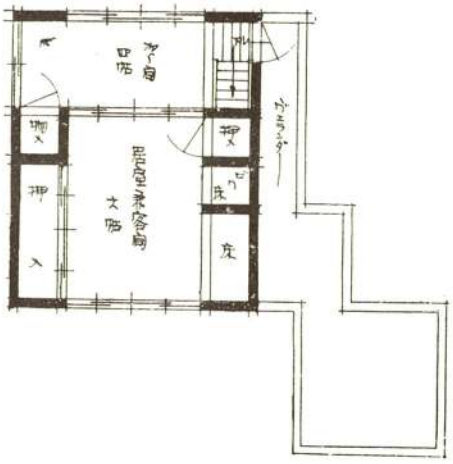
K 號 住 宅

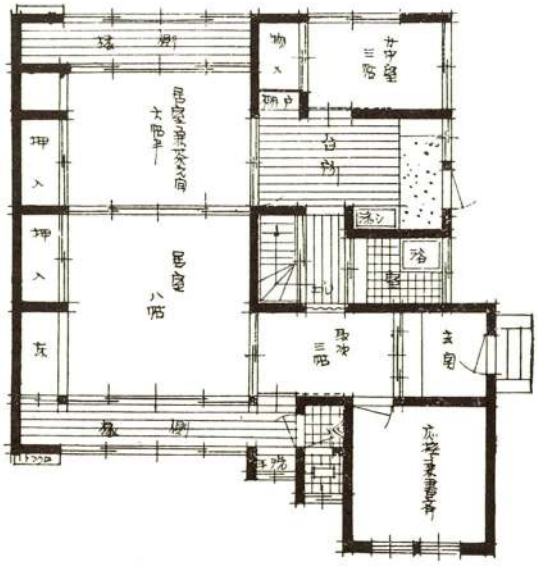


J 號 住 宅









J 號 住 宅　木造和洋風二階建

出 品 者　大 昭 組

敷地坪數　82.33坪　建 坪 數　30.5坪(京間)

賣　價　敷地共 4,200圓

但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備

庭園工事、門塀工事一切を含む

K 號 住 宅　木造和風平家建

出 品 者　高 橋 組

敷地坪數　68.76坪　建 坪 數　22.875坪

賣　價　(敷地共) 3,670圓

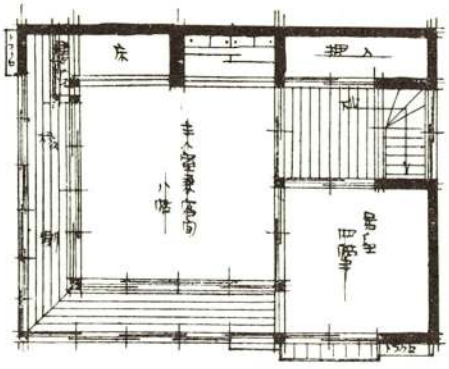
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備

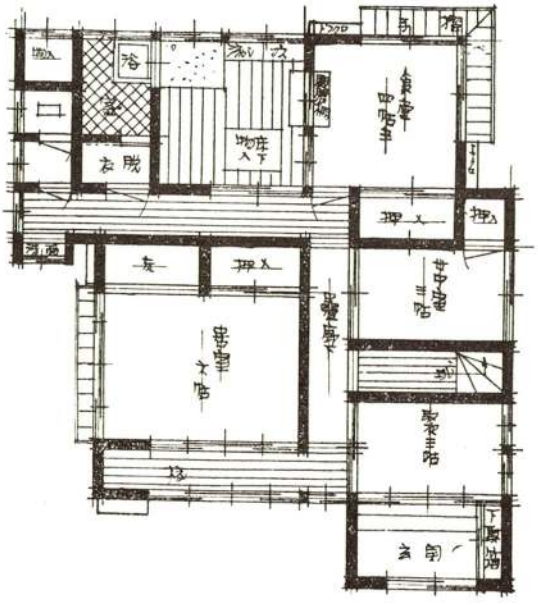
庭園工事、門塀工事一切を含む

京阪香里園改善住宅展覽會出品實物住宅

M　號　住　宅



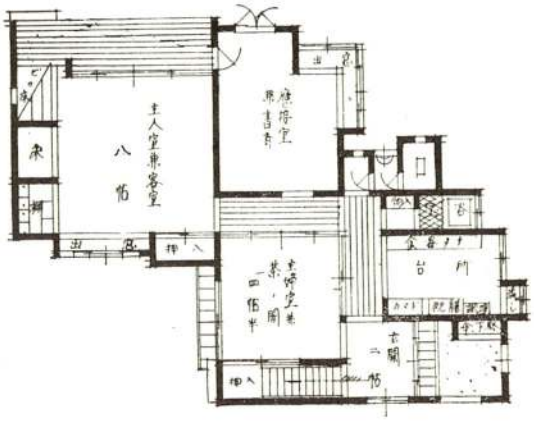




L　號　住　宅







L　號　住　宅　　木造和風二階建
出品者　　中道猪三郎
敷地坪數　68.07坪　　建坪數　27.86坪
賣　價　（敷地共）3,400圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

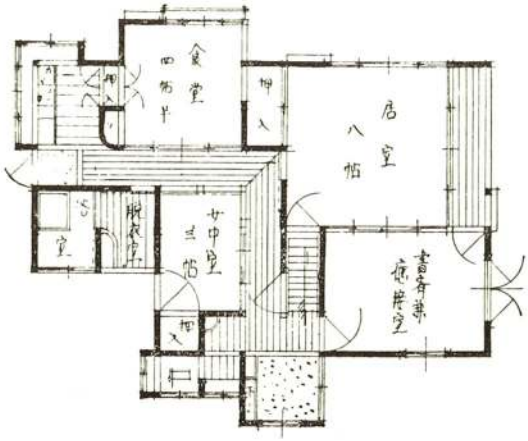
M　號　住　宅　　木造和風二階建
出品者　　井倉五左衛門
敷地坪數　67.72坪　　建坪數　37.16坪
賣　價　（敷地共）4,500圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

京阪香里園改善住宅展覽會出品實物住宅

P 號 住 宅







P 號 住 宅　木造和洋風二階建
出品者　有山組
敷地坪數　68.76坪　建坪數　27.75坪
別に物置　0.75坪　賣價（敷地共）4.095圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

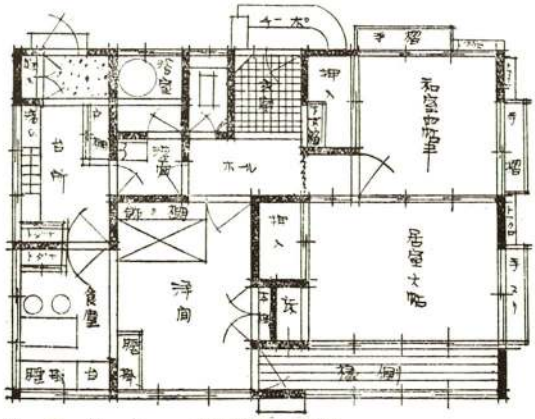
N 號 住 宅



N 號 住 宅　木造和洋風二階建
出品者　山本組
敷地坪數　69.28坪　建坪數　30.9坪
賣　價　（敷地共）4.200圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

O 號 住 宅



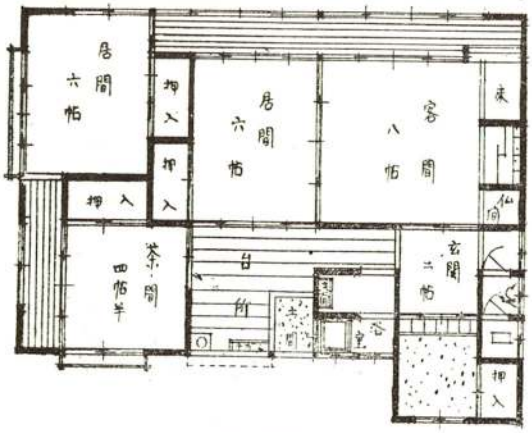


O 號 住 宅　木造洋風平家建
出品者　あめりか屋
敷地坪數　65.45坪　建坪數　20.54坪
賣　價　（敷地共）3.919圓20錢
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

京阪香里園改善住宅展覽會出品實物住宅

R 號 住 宅

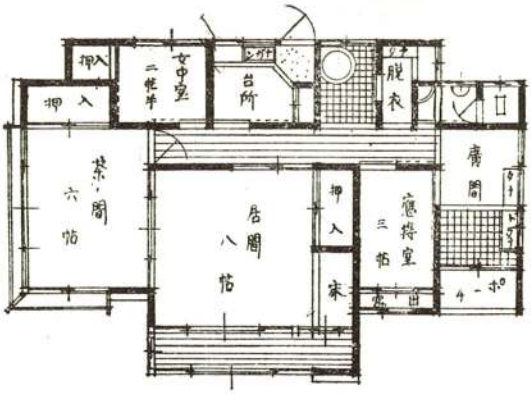




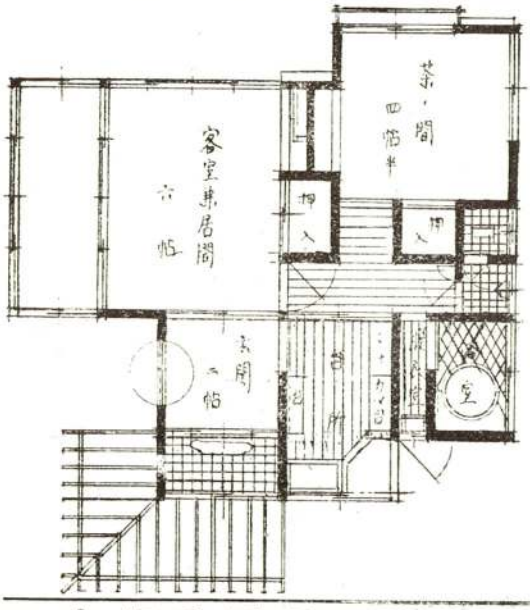
R 號 住 宅　木造和風平家建
出品者　由上鶴藏
敷地坪數　78.92坪　建坪數　25.12坪
賣　價　（敷地共）3.650圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

Q 號 住 宅





Q 號 住 宅　木造洋風平家建
出品者　大林組
敷地坪數　68.50坪　建坪數　22.29坪
賣　價　（敷地共）4.500圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む



S 號 住 宅



S 號 住 宅　木造和風平家建
出品者　中島忠兵衛
敷地坪數　74.75坪　建坪數　14.9坪
賣　價　（敷地共）3.470圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

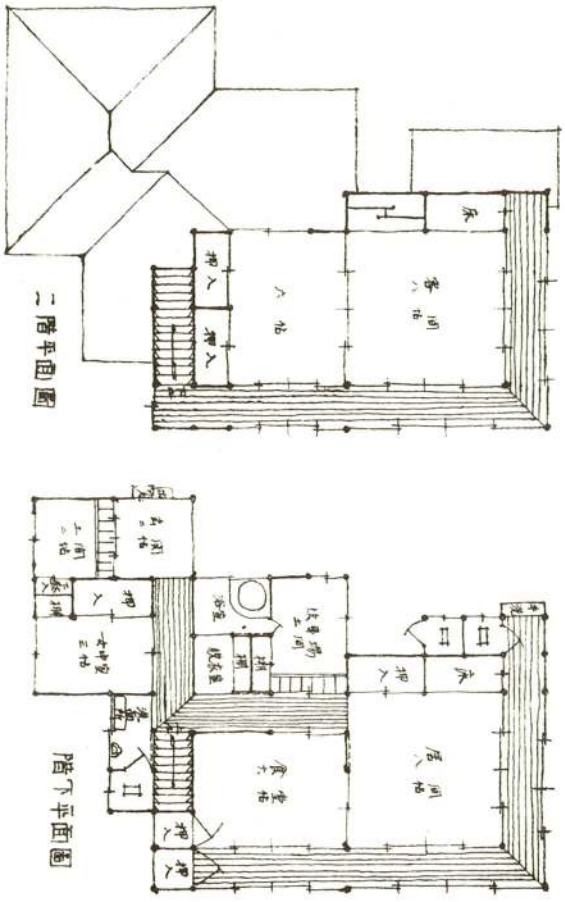
京阪香里園改善住宅展覽出會品實物住宅

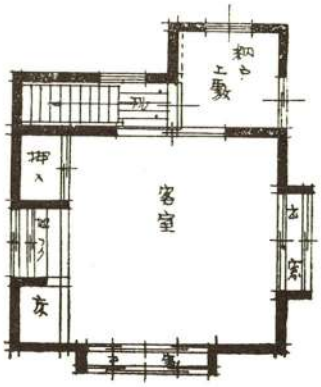
U 號 住 宅



T 號 住 宅







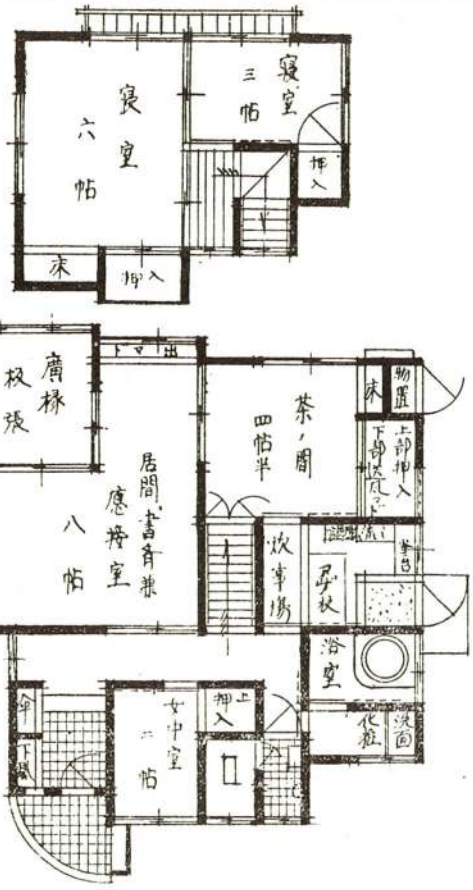
U 號 住 宅　木造和風二階建
出品者　西本組
敷地坪數　159.14坪　内法　54.14坪
建坪數　36.5坪　賣價（敷地共）6,450圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

T 號 住 宅　木造和風二階建
出品者　前田建築工務店
敷地坪數　80.51坪　建坪數　28.42坪
賣價（敷地共）4,500圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

京阪香里園改善住宅展覽會出品實物住宅

W 號 住 宅

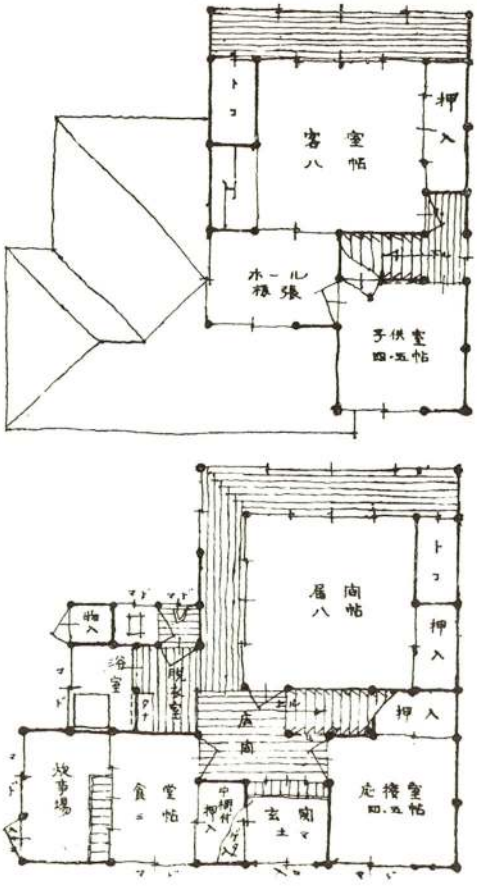




W 號 住 宅　木造和洋風二階建
出品者　藤木工務店
敷地坪數　86.24坪　建坪數　25坪
賣價（敷地共）4,500圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

V 號 住 宅





V 號 住 宅　木造和風二階建
出品者　西本組
敷地坪數　86.24坪　內法　37.09坪
建坪數　28.25坪　賣價（敷地共）4,700圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、臺所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

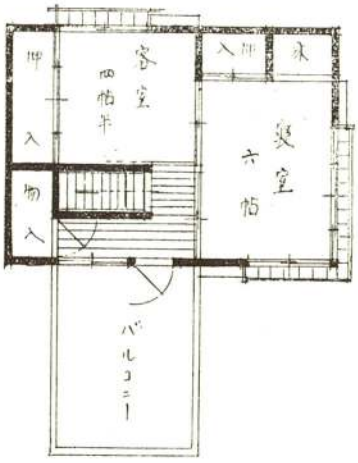
京阪香里園改善住宅展覽會出品實物住宅

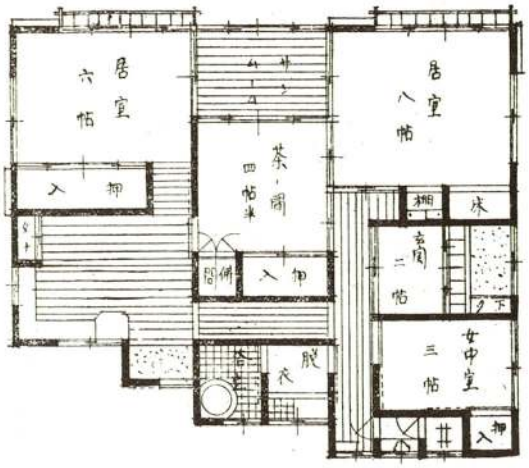
Y 號 住 宅

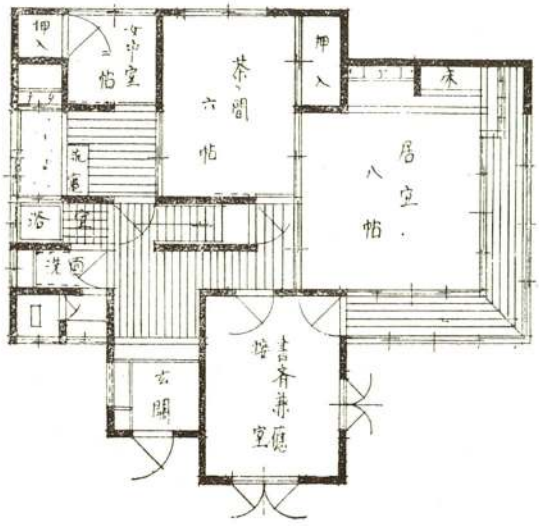


X 號 住 宅









X 號 住 宅　木造和風平家建
出品者　安達善藏
敷地坪數　81.11坪　建坪數　26坪强
賣　價　（敷地共）4,100圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、塞所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

Y 號 住 宅　木造和洋風二階建
出品者　今中春吉
敷地坪數　61.29坪　建坪數　30坪（京間）
賣　價　（敷地共）4,600圓
但し水道工事、電氣設備、浴槽、塞所設備
庭園工事、門塀工事一切を含む

京阪香里園改善住宅展覽會出品實物住宅

秋醋の南紀行

―秋季大會記―

德政金吾



宿舍錦城館前の一行

白亞の南海ビルは、其雄姿を秋晴れのアズア、スカイに泰然と聳つ。南行の青バス其前に止まれば北行の銀バスは梅田、築港を指す電車來れば自動車去り驛前の混雜芋を洗ふが如し。

驛のホールには今日の大會の受付を設けて紫の會旗群集中に目立つ。久濶と會費拂込とは尻を打付け、赤菊と白菊とは委員と會員とを區別す。

定刻來れば七十の同勢些の遲刻なく特別買切の客車に乘込む。南海の坪井、久保田兩委員の斡旋は吊皮に下る危介もなく一同晏如としてシートに納る。住吉 龍神、濱寺を過ぐれば、左は河內大和の連山紫に晴れ、右は茅の海の青疊に白帆片帆の置物を置きたるにさも似たり。

其處此處の村落には熟柿紅く輝き、白砂の曲浦には青松岸を限れり。一時間にして電車は和歌山に着す。待つ事半時、再び汽車の客となつて南行す。此客車はローカル列車の事とて總ての設備劣りて恰も座敷より台所へ下格されたる心地す。殊に日暮に近ければ、市より郊外に歸る人々もありて車內は存外に詰まれり。箕島を過ぎて用意の辨當と酒とを配る。車內の陽氣は俄に高まりて高談風發是も並等の氣散しなりかし。されど今夜の宴會もあれば餘り度を過す人なく節制法を超へす實に訓練ある人の集ひなりかし。

南部驛よりの自動車の乘替、是又何んの心迷ひなく順序よく乘込みて暗の一路を前車に續いて走る晝ならば肝を消す斷崖もあるべく尺を餘さぬ曲浦に布栗を縮むるもあるべかりしも幸なるは暗夜とて先行く車の影或は遠近の火の走り而已に影して、安心の居眠り叔ては知らぬが佛の鳴し聲安けれ。鮮詰の三時間の半ば一寸倦怠の色見へし頃は田邊町に入りて、町並道行く人に興を與へて再び暗路のひた走りも幾分の習慣性も加はりけむさのみ退屈も感ぜずやがて目指す白濱溫泉町に入る。

◇

先着、中着、後着も一と先づ大廣間に集まりて晝事の部屋割に觀念の目をとじて知り合の仲間を作りて夫々に落着き、一と風呂浴びて濛塵も、疲れも、總てを洗ひ流せり。

汽車中の胃袋への中繼は腹の虫の怒りを和げて、女中の配膳も、もどかしからず、空腹の湯氣に上りしも聞かず、湯上りの一杯にホツト安心の胸をなでしは幹事のみにはあらざるべし。

潮合よしと繰込み來る濱育ちの女軍共、既に一席は勤めけるらむ『今晩』はと座敷の最只中に横づちよに座るあり、扨ては入口の敷居に『失敬』と突つ立つもありて其荒つぽきこと、都育ちの公達―肝をぶつつぶすもありけむ。されど又名に負ふ現場錬への古武者、又はカツフエ仕込のモダニスト、何條その位に驚かんや、悪口は皮肉に隣り、猫なで語は鹽から聲に交り



京大臨海研究所前ランチに乗つた一行

てヤンヤ〳〵の聲高し。次いでドテラ姿の初花は『こゝらあたりは山家故』と長盤を引けば、花の姿の細腰矢猪呂、卷潮と動く。淡陶子の鶴龜、目出度舞ひ納めて、絃歌は再び各個に移る。エキスターナル、ビウ丈けでは承知の出來ぬ猛者連はソツト席を外してインターナルの研究に赴くもあるらし、興は漸く下に移る。線香切れの耳打は幹事を立たしめ、ないが意見の總仕舞、一同已が部屋へと移座す岸を洗ふ波の音夢路に消へて湯町の夜は更け行く。

◇

麗かの朝日、先づ硝子戸に寫り朝風呂に宿醉の目を覺す。

海岸の白砂に三々五々の散歩の跡を印すれば、青松の下に昨夜の失敗をかこつ。砂丘に座してスケチする人を後から寫眞するも面白し宿に歸れば早や、朝食の用意も出來朝酒の一二杯に陶然として小春日和の椽に、溫泉氣分を滿喫するあり、又は館前のベビーゴルフに興ずるもあり、扨ては溫泉町の經綸に其抱負を論するもありて白濱の湯町は長閑なり。

白濱とは古代埃及語に釋すれば

てピンシヤンツンテン、興は正に酣ならんとす。一群の紅裙は地方の上調子に更に裾をかゝげて一段の奮勵を爲す、『細雨霏々として紅葉番所に散れば、奴僕走つて春塘未だ叢を成さず』、興は殆んどクライマツクスに達せんとして、一言居士壇下に氣死せんとす。即ち自ら立ちてたこ踊りの一齣を演じシラは貴人にて我古代に白衣は貴人なるに同じ、濱はパムにてパは飛ぶ意なり、ムは水にして飛沫の光景を表す。而してハがパより轉化せる事は國學者の等しく認むる所なれば、白濱とは貴人の濱にて上古此處に貴人上陸せるに非ざるか？南紀の地名に神代の名多きは奇なり。今我協會のまれ人等茲に集ひて一日の清遊を爲す、故ある哉。朝食後館前にて紀念の寫眞を撮り、更に臨海研究所に向ふ。白濱の町を西に越ゆれば又小灣に出づ、此處より道路は海岸に沿ふて曲り一折して松林に入る、其處迄に達する道路は先年の御幸にてコンクリート砥の如く良道なり。只小岬の附近浪に破壞されて其儘なるは餘りに畏こける事なりかし。

青松裡の赤瓦の小村こそ京大臨海研究所なり。館前の大池には三尺に餘る大海龜青く苔むし、館内には珍魚、奇貝、其自然の生活を示すを見て一同嬉々として三尺の童子に歸る。此濱の岩石傳ひに、用意の發動船に乗りて再び紀念の撮影をなして、白濱の沖より湯の崎の岬を通りて千疊岩、三段岩の自然の大斧鉞に驚嘆の目を樂ましめ、めぐりて湯の崎に上陸し、岩屋の湯を見て徒歩旅館に歸る。シツトリとせる背中の汗を又溫泉に洗ひて、中食の辨當に舌鼓を打ち、錦城館の謝意を後に自動車の人となる。

◇

南部驛より又汽車にて道成寺驛に下車す、驛は日高川の西岸の田畝中に在り、其處より道成寺迄二丁餘り數十の石段を上りて道成寺に達す。名にし負ふ歌舞音曲に名高きエロ、グロの本山なれば一としほの好奇心も手傳ひて、案内の役僧の說明に皆熱心に聞入る。本尊兩脇士共何れも國寶にて本殿も



（道成寺）象木命之垂子宮

特別保護の建物なり。本山建立の大壇那宮子姫と云ふ王姫の本像は左衽豐髪の座像にて珍らしきポーズなり。其他本寺に緣起の古瓦佛像の片鱗型の如く在り、堂北の莊園中の建物には安珍清姫の一代記の繪畫ありて是が解說者の活辯張には一同一笑せり。庫裡の同じ繪卷物は後小松帝の御震筆とかにて中々の傑作と見たり。



寶國（一の其）卷繪起緣寺成道

◇

再び道成驛より乘車す車中二三の他人を交へる外殆んど同人なれば、佐藤君の動議にて橫濱君議長となり和歌山迄の時間を論戰に費さんとす。先づ今見し安清事件を議題とす。I君先づ立ちて、珍の未遂を否定し且同人よりの能動を主張し、且彼の逃走の原因を清の不味に歸せり。T君立ちて其說の異同を辨ずればF君更に其急所に論究す、討論正に佳境に入らんとして議長突如中止を宣す。

次は時事問題として滿州事變に及ぶM氏起ちて其縱著を傾けて大に硬論を支持す。次で陶氏の實況報告ありて大に其機微を暗示す。T君立ちて數字「十三」に對する歐米人の實驗上の迷信より聯盟理事國の「十三」に呪あれと結ぶ。

I氏更に海軍の國際的比率の內容を暴露して大に各國の我利我利主義を難ず。保氏は謹んで陸の宮の逸話と其御儉約と平民的御動作を賞揚す。斯くて車內は何時の間にかギツシリと詰りて和歌山市の近きを示す。即ち議長は立ちて閉會を宣し同時に會員を代表して幹事の勞を謝す此行茲にて散會す。



寶國（二の其）卷繪起緣寺成道

本大會をして愉快に且順序能く遂行し得たるは委員諸君の御努力と南海諸賢の多大の御援助の賜なりし事を茲に特記すると爾云。

『建築と社會』昭和六年度特輯

新年號（一月發行賣切殘本なし）
震火災と建築（二月發行賣切殘本なし）
保健と建築（三月發行賣切殘本なし）
小住宅（四月發行濟殘本あり）
鄉土建築（五月發行賣切殘本なし）
建築事務（六月發行濟殘本あり）
新興建築（七月發行濟殘本なし）
建築と都市問題（八月發行濟殘本あり）
住宅（九月發行濟殘本あり）
小賣店・百貨店（十月發行濟殘本なし）
映畫館（十一月發行濟殘本あり）
劇場（十二月發行濟殘本あり）

本誌定價表

冊數	定價	郵稅
一冊	五拾錢	貳錢
十二冊	六圓	貳拾四錢

廣告掲載料金

普通紙	一頁	一回	一五・〇〇円	普通紙	半頁	一回	八・〇〇円
普通紙（前附第一頁）	一頁	一回	四五・〇〇	普通紙（前附第二頁）	一頁	一回	四〇・〇〇
普通紙（後附第一頁見開終頁）	一頁	一回	二五・〇〇	アート紙（中挿）	半頁	一回	二〇・〇〇
表紙二	一頁	一回	六〇・〇〇	表紙三	一頁	一回	四五・〇〇
表紙三	一頁	一回	八〇・〇〇				

昭和六年十一月廿七日印刷
昭和六年十二月一日發行（毎月壹回一日發行）

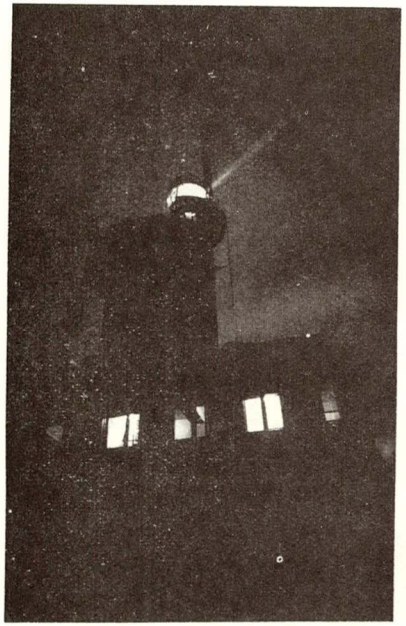
發行兼編輯人 兵庫縣武庫郡今津町浦風五六番地 鷹取陽
兼印刷人 大阪市東區內淡路町一丁目七番地

印刷所 大阪活版所 大阪市西區土佐堀通一ノ一大同ビル

發行所 社團法人 日本建築協會 電話土佐堀四二六五番 振替口座大阪三九、九七五 大阪市西區京町堀羽子板橋北

特約販賣店 柳々堂書店 電話土佐堀二四四〇番 振替口座大阪二二〇八四番

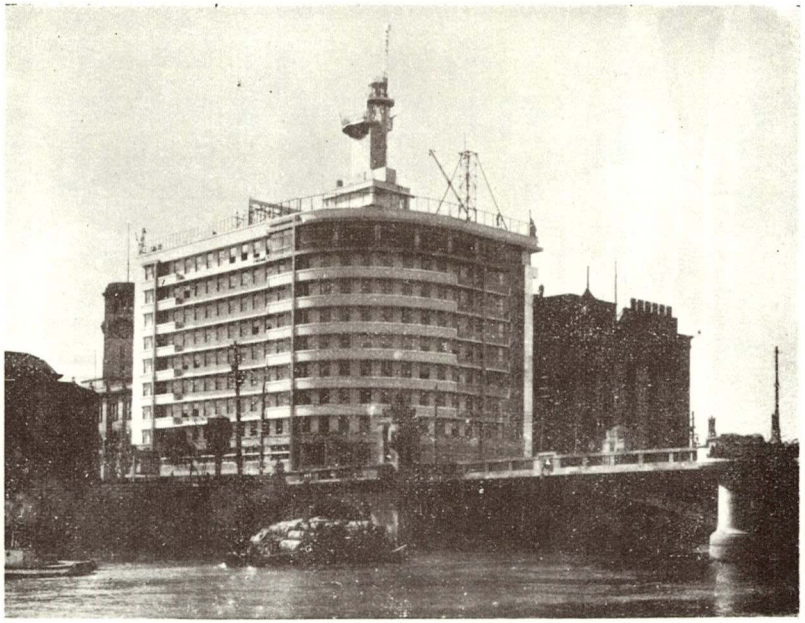
御購讀の向は本會直接又は特約店へ振替又は爲替で前金御拂込を願ひます。



航空標識燈（夜景）



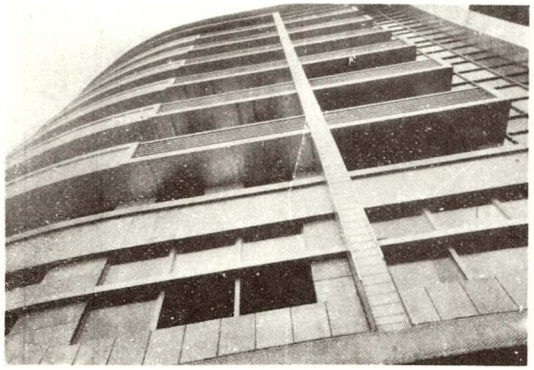
航空標識燈



朝日ビルデイング全景



裏側



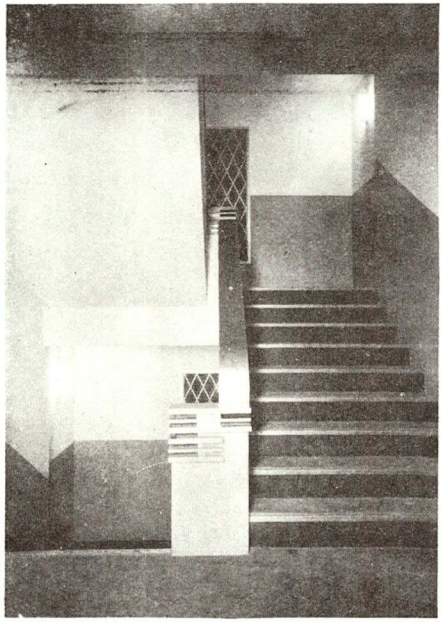
堂島川に面する北面



夜景

大阪（北區中之島）朝日ビルデイング

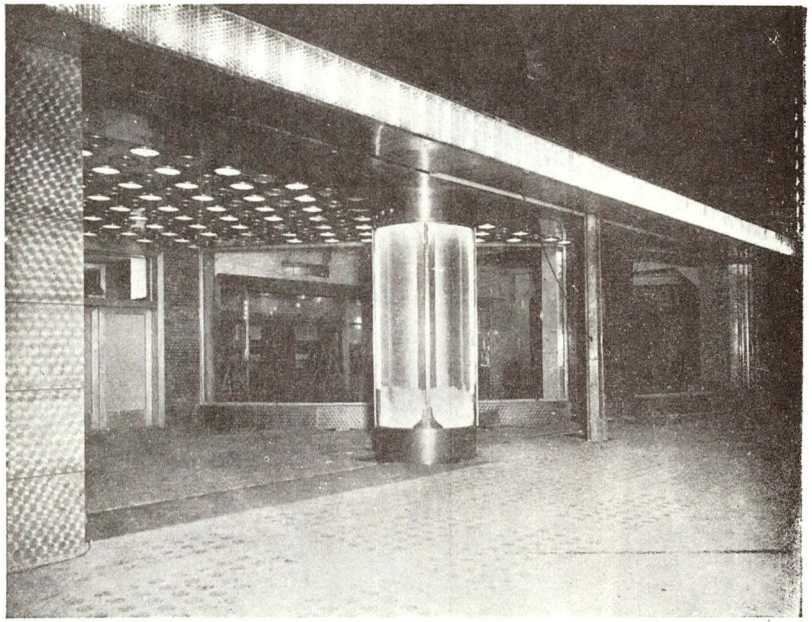
設計施工　合名會社竹中工務店　設計者　石川純一郎氏



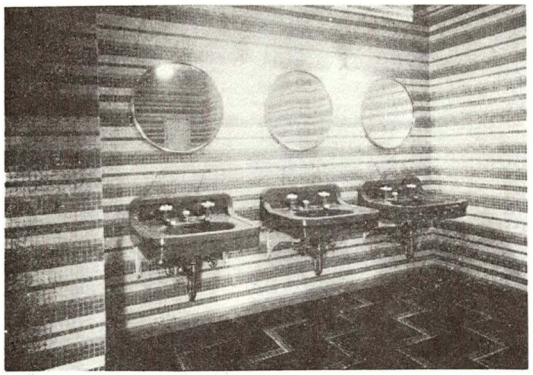
主階段室



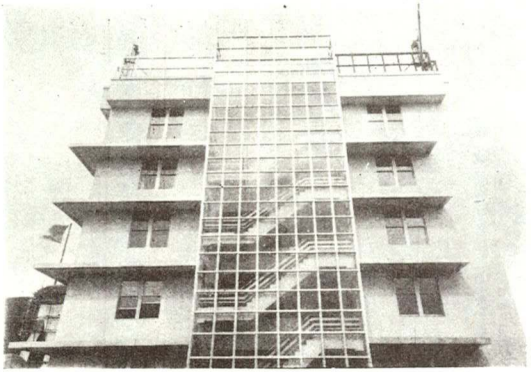
堂島川に面する北面



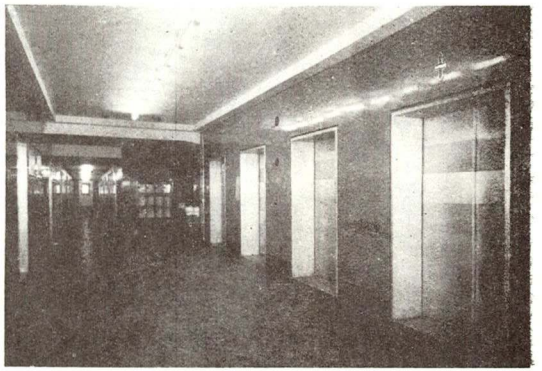
正面大玄關



各階洗面室



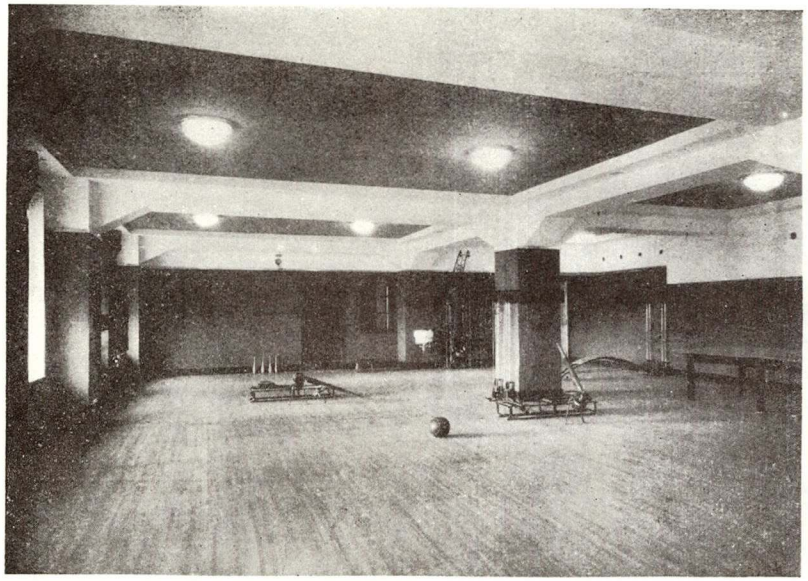
新聞社側の南面



一階エレベーター廣間

大阪（北區中之島）朝日ビルデイング

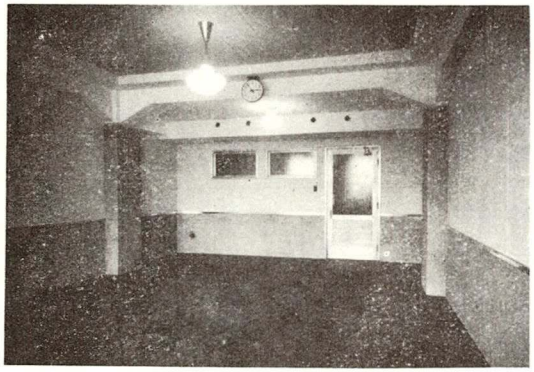
設計施工　合名會社竹中工務店　設計者　石川純一郎氏



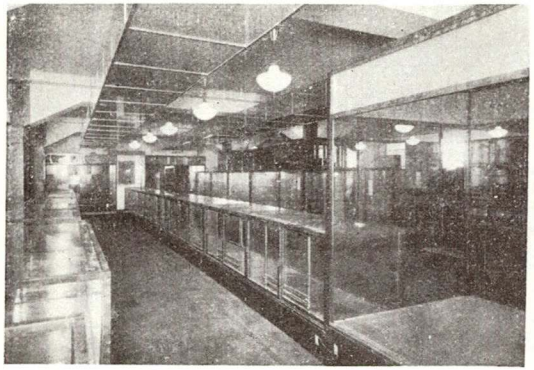
A. B. C.（朝日ビルクラブ）運動室



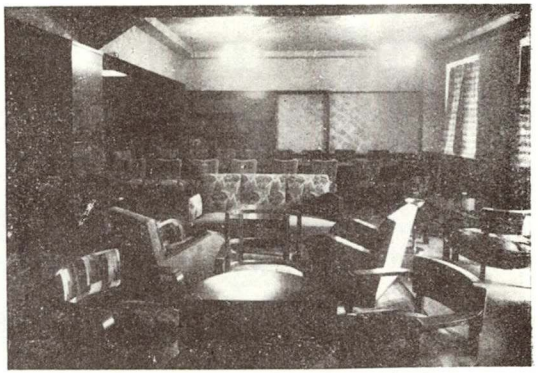
A. B. C.（朝日ビルクラブ）パーラー



一般貸事務室



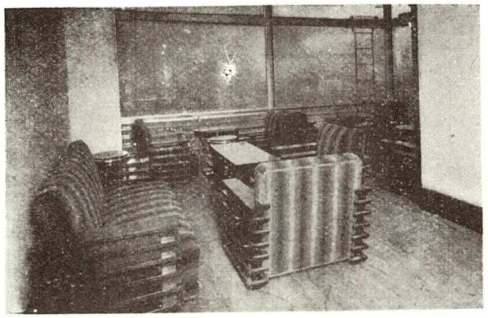
第二階專門大店陳列場



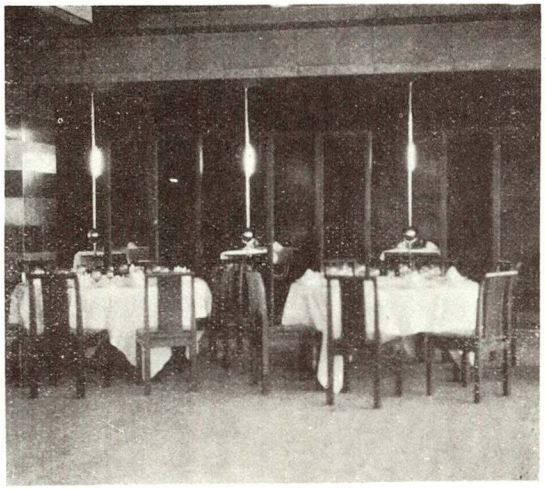
A. B. C.（朝日ビルクラブ）集會室

大阪（北區中之島）朝日ビルデイング

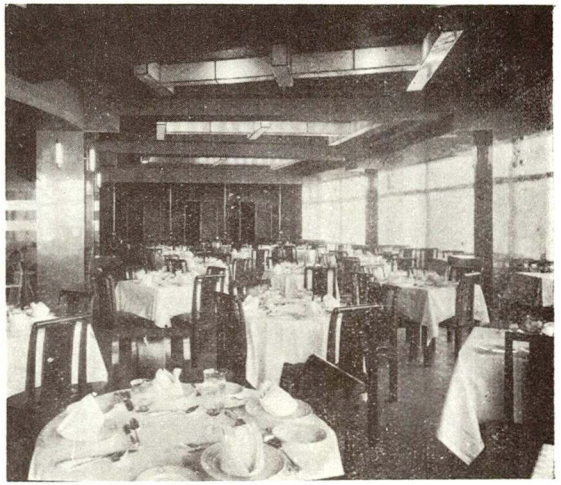
設計施工　合名會社竹中工務店　設計者　石川純一郎氏



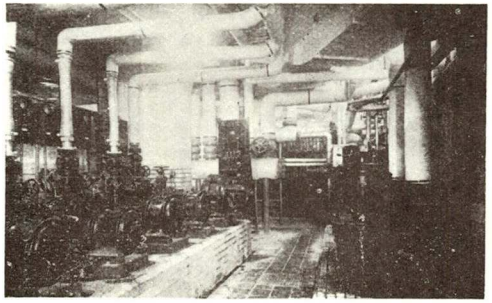
第十階　アラスカ待合室



第十階　アラスカ大食堂の一隅



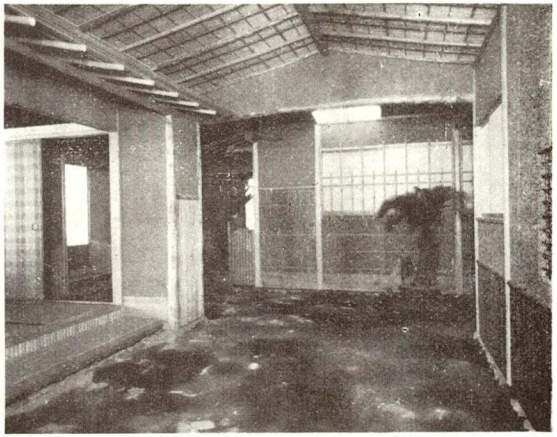
第十階　アラスカ大食堂



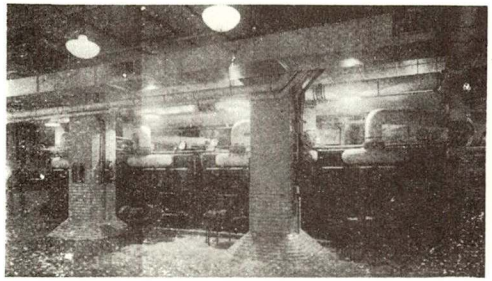
給排水ポンプ



第一地階　本みやま食堂



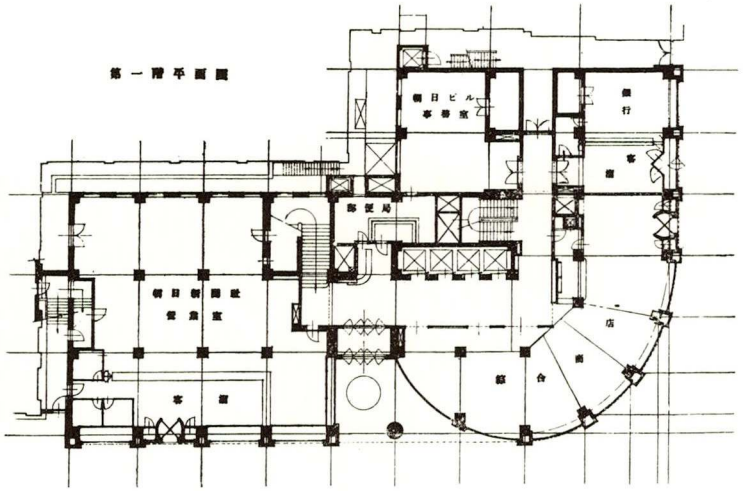
第十階　本みやま

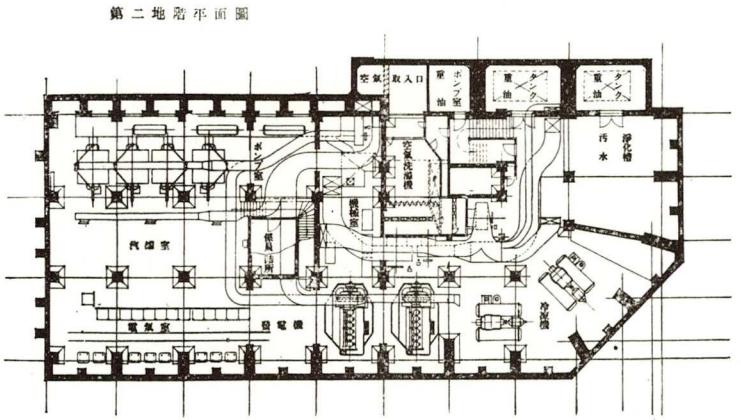


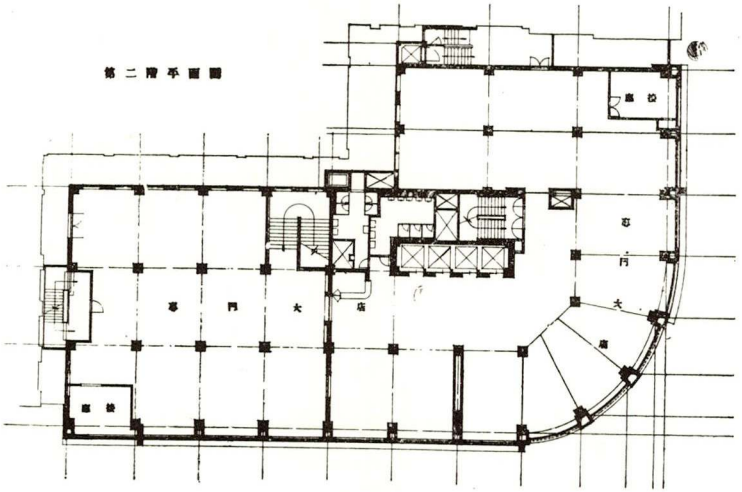
セクショナル・ボイラー

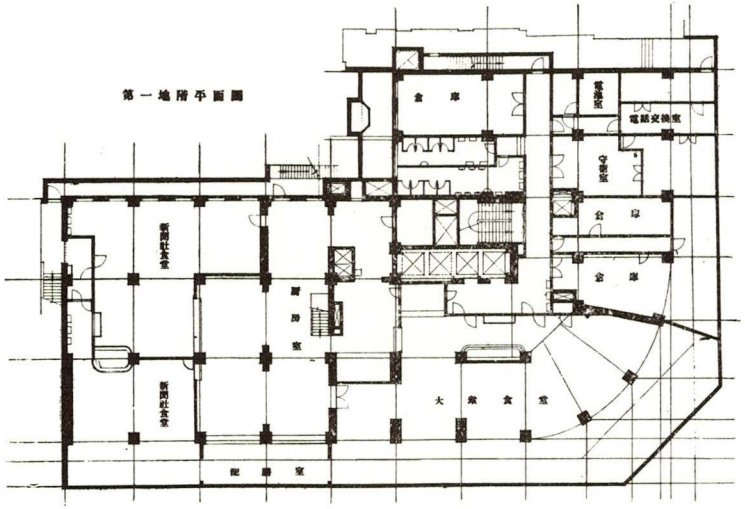
大阪（北區中之島）朝日ビルデイング

設計施工　合名會社竹中工務店　設計者　石川純一郎氏



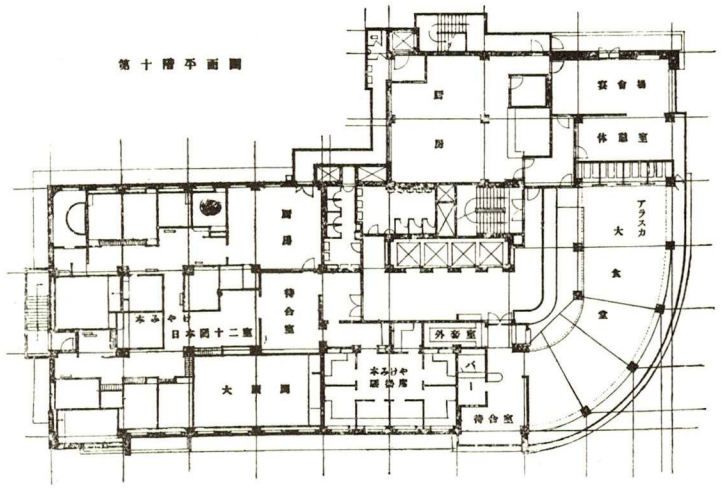


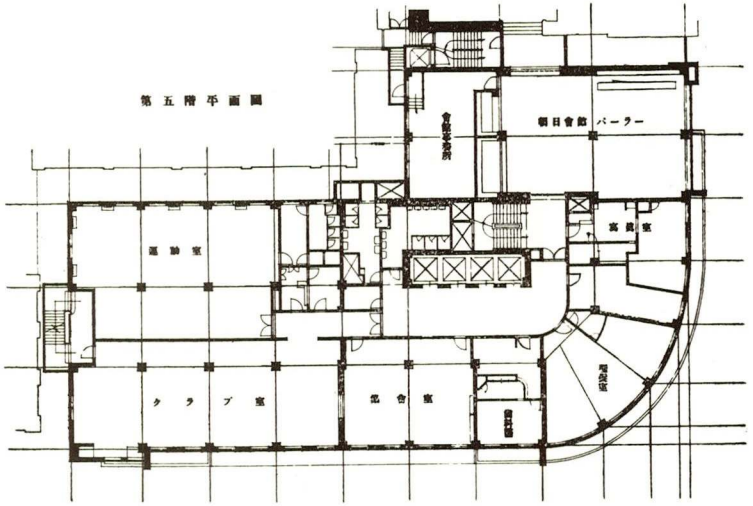


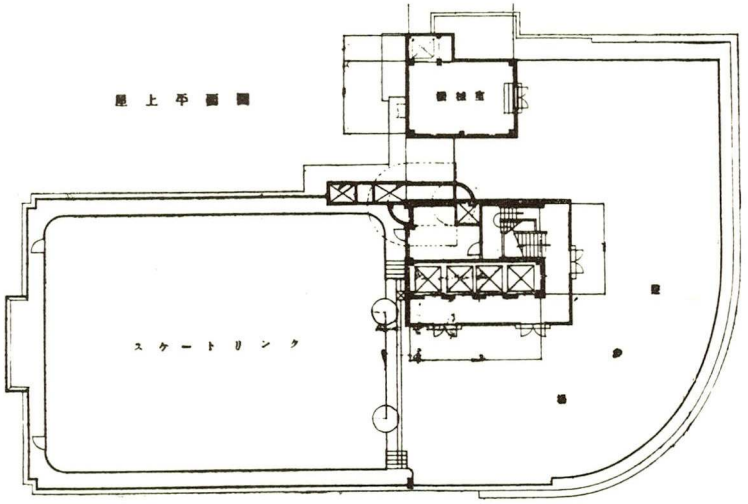


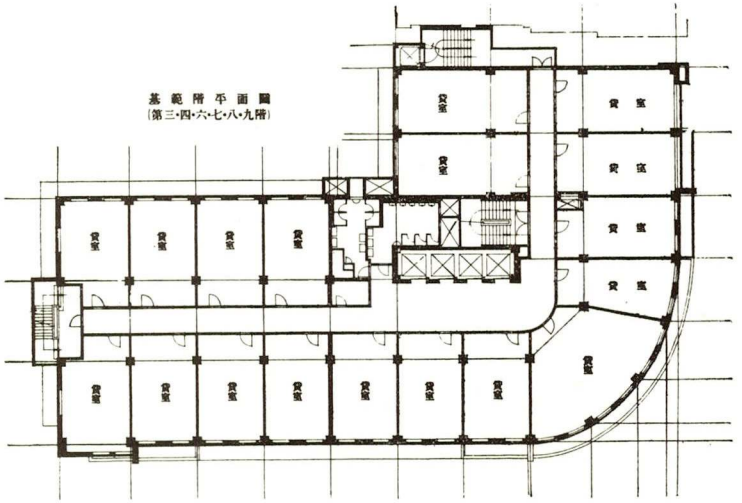
大阪（北區中之島）朝日ビルデイング

設計施工　合名會社竹中工務店　設計者　石川純一郎氏









大阪（北區中之島）**朝日ビルデイング**

設計施工　合名會社竹中工務店　設計者　石川純一郎氏

建築と社會第十四輯第十二號

廣告目次

ア
有山組……一三
安藤組大阪支店……一三
旭硝子株式會社……五三
淺野スレート株式會社……三一
淺海商店……三八

イ
池田建築事務所……一〇
池田谷建築事務所……一〇
池田組……一三
伊藤建築事務所……一〇
石川商會建材部……五五

エ
榮進社……二九

オ
オリエンタルメタル製造所……四九
オキナ商店……四八
大阪ヒトロライト工事合資會社……三二
大阪製鎖所エレベーター部……一四
大阪窯業セメント株式會社……三
大阪伊丹商店……二六
大阪橋本組……一四
大林組……一四
大倉土木株式會社大阪出張所……一三
大野製作所……一
小笠原建築事務所……一〇
奥村重兵衛商店……四〇
岡部建築事務所……一〇
岡本工務店……一四
置鹽建築事務所……一〇

カ
葛野建築事務所……一〇
龜谷開作商店……一五

キ
木下謹三商店……二六
桐田商會……四七

ク
國枝工務所……一〇
熊取谷熊次郎商店……一五
黒川化學工業所……三二

コ
鴻池組……一五
工村社(阪口芳三郎)……八

サ
佐伯組……一六
佐久間建材工業所……二四
笹岡家具製飾店……三四
阪本商會大阪出張所……三八
三稜社……四五
佐渡島西店建材部……五〇

シ
清水榮二建築事務所……一〇
清水組大阪支店……一六
城口研究所大阪支店……五六
設樂建築事務所……一一
島貿易株式會社建材部……六六

ス
須賀商會……四三

セ
政正合資會社……六一
清光社……六七

ゼ
錢高組……一六

ソ
宗建築事務所……一一

タ
竹中工務店……一六
田中昌司商店……三四
田中工業株式會社……五九

ダ
煖房同業協會……自一八至二三
ダンロップ護謨株式會社……五
大丸……六三
大和工業株式會社……六九
大理石工業株式會社……六二

ト
東洋キヤリア工業株式會社……表二
東京リノリユーム株式會社……五七

ナ
朝永建築事務所……一一
東洋工業株式會社……五八
鳥羽工業所……五八

ナンコク商事株式會社……三三
中村建築事務所……一一
中川辰藏店……一七
内外土木建築材料合資會社……五四
南滿鑛業株式會社……四二
南滿建材工業所……六〇

ニ
日本ペイント株式會社……三九
日本パイプ製造株式會社……二八
日本木材工藝株式會社……六八
日本建築紙工株式會社大阪出張所……四五
日本石綿盤製造株式會社……三六
日本金具株式會社……六
西原衛生工業所大阪支店……三五
西孫南店建築金物部……三七

ノ
野村建築事務所……一一
野澤幸三郎商店……四四

ハ
橋本建築事務所……一一
原科建築事務所……一一

フ
古塚建築事務所……一一
藤木工務店……一七
藤田商會……三〇
福原工場……六〇

ベ
ベニス工房……六二

ホ
ホーン商會……七

マ
マルエス工業株式會社……二五
眞水三橋建築事務所……一二
松村組……一七

ミ
三木商店……四六
ミナト製作所……四二
三井物産株式會社……二七
宮島康夫商店……六五

ム
村上建築事務所……一二

モ
森本建築社……一七

ヤ
安井建築事務所……一二
ヤマト商會……六五
山中商會……五一
矢橋大理石商店……三〇

ユ
ユニオントレーヂングコムパニー……六四

ヨ
横河工務所……一二
横河橋梁製作所……四一
米本商店……五二

レ
玲光社(木内眞太郎)……五二

建 築 事 務 所 錄

（五 十 音 順）

オ-カ-ク-シ　　イ—オ

オ

設 計 監 督

岡部建築事務所

建築士 岡 部 顯 則

大阪市西區靱下通一丁目
二 十 二 番 地
電 話 土佐堀五三二三番

出張所　大阪市南區心齋橋大丸建築場

イ

設 計 監 督

池田建築事務所

工學士 池 田 實

大阪市南區難波驛前鴻池ビル
電 話 戒 一 一 二 三 番

イ

設 計 監 督

池田谷建築事務所

建築士 池田谷 久 吉

大阪市西區京町堀上通一彌生ビル
電 話 {一五八一・二九五五
土佐堀 {三四〇八・四八六七

カ

設 計 監 督

葛野建築事務所

工學士 葛 野 壯 一 郎

大阪市北區絹笠町大江ビル
電 話 北 二 四 九 二 番

イ

設 計 監 督

伊藤幸太郎建築事務所

伊 藤 幸 太 郎

大阪市北區相生町三五
電 話 東 五 七 〇 三 番
分室—大阪市港區夕凪橋畔佐伯ビル
電 話 西 一 〇 九 〇 番

ク

設 計 監 督

國 枝 工 務 所

工學士 國 枝 博

大阪市北區玉江町二丁目四ノ一三菱ビル
電話土佐堀四三三三番
東京市京橋區銀座西五丁目日動ビル
電話銀座二九四五番

オ

設 計 監 督

小笠原建築事務所

建築士 小 笠 原 釰（スミ）

大阪市北區曾根崎中二丁目
第一曾根崎ビル第四十一號室
電話北二一五五・二一五六番

シ

設 計 監 督

清水榮二建築事務所

工學士 清 水 榮 二

神戸市灘區八幡友田三三

電話御影五六一五番

オ

設 計 監 督

置鹽建築事務所

工學士 置 鹽 章

神戸市榮町二丁目山口ビル四階
電話三宮(3)三四七〇番